天草送付資料Ⅰ【抜粋】

試論：細川興秋公の大坂の陣以後

【大坂の陣以後の行動についての確定事項と推論】

880-0035
宮崎市下北方町横小路 5886－3
髙田重孝
☎　0985・25・5467　Fax　0985・22・3628
Email shige705seiko214@outlook,jp

【1～57 頁】

はじめに

細川忠興、細川ガラシャの次男として生まれ、キリシタンとしての自覚を持って生き信仰を捨てなかったために廃嫡され、1614 年～1615 年大坂の陣のときに豊臣方に加担したために細川家より義絶され、1615 年 6 月 6 日京都伏見の東林院に於いて切腹させたと見せかけて隠蔽され、歴史の表舞台から消された細川興秋のその後の人生、『試論：細川興秋公の大坂の陣以後【大坂の陣以後の行動についての確定事項と推論】』と、細川忠興の身内であるために監禁され棄教を強要された小笠原玄也の記録、『豊前之国田川郡香春町中津原字浦松に於ける小笠原玄也・みや一家の生活について』及び処刑の前に書かれた『小笠原玄也の十五通の遺書』【マンショ五号に掲載】は歴史の闇に葬られた記録である。

『細川興秋の史料について』

細川興秋については史料が四つの時代に区分されている。

１、誕生・幼少期

☆　細川家のキリシタン　ヨハネス・ラウレス著　キリシタン研究第 4 巻

２、活動期

☆　戦国細川一族　　戸田敏夫著　　新人物往来社
　　細川家の人々　　細川護貞著　　新・熊本の歴史 5 近世下　熊本日日新聞社
　　細川氏と切支丹たち　花岡興輝著　　新・熊本の歴史 5 近世下　熊本日日新聞社

３、不明期

1615 年 6 月 6 日、京都伏見の東林院に於いて興秋切腹後から、
1635 年 12 月 23 日、熊本に於いて小笠原玄也一家処刑までの不明期の 21 年間。

４、天草御領に於いての潜伏期・終焉

☆　天草五和町史資料編 9　御領城跡　　熊本天草郡五和町教育委員会　1998 年

☆　B　天草長岡家系譜と長興寺薬師如来縁起　池田家文書
　　天草で生きた？長岡興秋の足跡　鶴田倉造氏　熊本日日新聞　1996 年 5 月 18 日

☆印の文献は確かな史料に基づいて書かれているので基礎史料として活用できる。

不明期の問題点への回答

最大の問題点は**不明期の 21 年**が全く欠落していることである。天草の池田家文書が確かな記録だと仮定しても 1615 年 6 月 6 日、京都伏見の東林院において興秋の切腹後の 21 年の足取りが全く途絶えている。池田家文書もこの 21 年間には詳しく触れてはいない。
池田家文書 15 頁に**『尾州春日部郡小田井村に暫らく御忍び，夫より直に肥後国天草郡御領村に御居住被成候て』**と書かれているのみである。

イエズス会日本年報の記録

小笠原玄也の研究を始めてイエズス会の記録の中に小笠原玄也とは明らかに違う人物の記述があり、この問題点は『マンショ 4 号』の、『六　細川興秋と玄也』151 頁下段～156 頁（鉱脈社）において述べた。

大坂の陣から 4 年後の 1618 年（元和四）と、6 年後の 1620 年（元和六）のイエズス会日本年報報告のなかの小笠原玄也の記録に混ざって、細川興秋が香春町採銅所にある不可思議寺の住職として記録されている。

1618 年年報（元和四）イエズス会年報 クリストファン・フェレイラ神父報告
『【細川興秋 33 歳は】その高い身分やキリスト教徒としての徳から言って、これを訪ねて慰めるに相応しい人物であるから、大きな危険を犯して神父【中浦ジュリアン神父 50 歳】がそこ【香春町採銅所鈴麦】に行ったが、泊めてくれた仏僧の助けがなかったならば発見され捕らえられるところであった。この仏僧【採銅所不可思議寺住職宗順・細川興秋】は信仰の敵であり、神父が何者であるか知っていたにもかかわらず、徳の高い人であったから、その客【中浦ジュリアン神父】が発見され捕らえられることがないようにしてくれた。』＊『天正少年使節の中浦ジュリアン』　結城了悟著　101～102 頁

1620 年年報（元和六）イエズス会年報　ロドリゲス・ジーラム神父報告
『【細川興秋 35 歳は】かつては富といい、権威といい、大名のごとき身分で、衣服にせよ、供廻りにせよ、容貌にせよ、人々が目を向けしめしものなるが、今や綴（つづ）れて垢づき破れ下がったぼろをまとい、下層の職人、貧しい農民の中に混じり、最下級の奴隷か賤民階級の一人でもあるかの如く、自ら身を下ろして衣食を求め、いかなる賤務も厭わぬのである。我が会の神父【中浦ジュリアン神父 52 歳】はこの人【細川興秋】が故里にあって豊富な生活をするよりも、むしろ追放の身分となり、苛酷な運命に弄ばれるのを優れたりとするほど熱心に宗教を守ろうと、堅い決心をしているのを見出した。』
＊『16・17 世紀イエズス会日本報告集』　第二期　第 3 巻　95～96 頁　筑後・豊後国

香春町採銅所不可思議寺

【推論】

1605 年 1 月 12 日、出家出奔した興秋を京都から移し、興秋を匿うための寺を忠興の領地豊前に作るこの相談は細川幽斎と忠興の間で1608年末から1609年には出来上がっていて、秘密裏に場所の選定が成され、忠興の末弟・細川中務少輔孝之【香春岳城主・2 万 5000 石】に命じて、田川郡香春町採銅所に於いて寺の建設が実行に移された。香春岳城主高橋九郎元種の家老・行木（雪木）善兵衛を、本願寺第十二世教如法主に帰依させ、剃髪して法名を『宗慶』と号させ住職にさせた。完成は 1610 年（慶長十五年）5 月 10 日開創、法主より阿弥陀如来仏立像本尊を受け、開基創建している。『寺の山号を不可思議山』と言い、『寺号を不可思議寺』と言う。これにより豊前において興秋を匿う場所の準備は全て整っていた。

細川興秋は大坂の陣を経て、1615 年 6 月 6 日京都伏見の東林院での切腹以後、香春町採銅所不可思議寺の第 2 世住職宗順として 18 年間隠蔽されていた。その後 1632 年 12 月、細川藩移封に伴い、熊本山鹿郡鹿本町庄村の『泉福寺』（不可思議寺と同じ真宗大谷派に属し、山鹿の金剛乗寺の末寺）に移住、3 年後の 1635 年 10 月末頃、小笠原玄也の逮捕により、急遽細川興秋は天草御領に避難したと考えれば、今まで大きな謎であった欠落していた不明期の 21 年が完全に埋まることになる。

＊　2011 年 4 月 4 日の不可思議寺古文書調査記録より

最後に残っていた香春町採銅所の明善寺（当時の不可思議寺）の古文書調査で、不可思議寺・初代住職が『宗順』ではなく『宗慶』であったこと、および『宗慶』の病死が判明した。第 2 世住職『宗順』については、『宗順』が細川興秋であるとの確固たる証拠がなく依然不明のままだが、その時代の状況証拠の積み重ねから見えてくる結論から『宗順』が細川興秋であるとの答えを導き出すことが十分可能といえる。不可思議寺古文書の記録から、『宗順』【興秋】は、不可思議寺初代住職『宗慶』の 1615 年 4 月 4 日の不可解な病死後から、1632 年 12 月、細川藩が肥後熊本に移るまでの 18 年間不可思議寺の住職だったことが判明している。『宗順』の時代 1615 年～1632 年の 18 年間の記録が不可思議寺に残されていなかった。不可思議寺の記録、古文書の全てを 1632 年 12 月の細川藩が肥後熊本に移封の際に持ち去ったと推測される。

細川藩が細川興秋・不可思議寺の住職『宗順』に関しての証拠になりえる古文書を見事に消している。或いは興秋に関する記録を初めから作成しなかったのかもしれない。

小笠原玄也

細川興秋と行動をともにしたキリシタン小笠原玄也は香春町中津原字浦松に監禁・監視されながら 1614 年 10 月頃～1632 年 12 月まで 18 年間生活。興秋と共に、細川藩の肥後熊本移封に伴い、山鹿郡鹿本町庄村付近に 1633 年 3 月頃～1635 年 11 月 4 日まで 3 年間隠蔽され監視下において隠れ住んでいた。（現在小笠原玄也が居住した場所の特定調査継続中）

小笠原玄也一家 15 人は、11 月 4 日、熊本塩屋町、寺社奉行・田中兵庫屋敷の座敷牢（現熊本中央郵便局）に入牢して、12 月 22 日までの 50 日の間に、殉教の準備をするとともに 15 通の遺書を書いている。12 月 23 日、禅定院に於いて斬首処刑され殉教した。
処刑は興秋と玄也の隠蔽と保護監視責任者の米田監物是季（一万石）が務めている。

米田監物是季の報告書
國家老・長岡監物書状、長岡佐渡守ニ遣候書状之内（寛永十二年十二月廿四日付）
『御やと御無事ニ御座候、爰元相替儀無御座候、併玄也儀ニ付而、何も気をつめ申候処、相済らち明申候而、今ハ何も落着申候、』

小笠原玄也処刑の総責任者・米田監物是季（これすえ）の国家老・長岡佐渡守宛 1635 年 12 月 24 日付けの手紙に、興秋の安否が『**御やと御無事ニ御座候**』と書いてある。
『**御やと御無事ニ御座候**』の御主人とは興秋であり、米田監物是季が小笠原玄也の処刑報告の冒頭に興秋の安否を報告している。米田監物是季にとっての御主人とは細川興秋であり、米田監物是季は大坂の陣以来、興秋の警護を担当し隠蔽の全責任を負っていた。このことは興秋と小笠原玄也とが行動をともにしていたことも示している。この時藩主細川忠利は江戸に在勤、父忠興は八代にいることが国家老の長岡佐渡守（松井新太郎興長）、米田監物是季の両名には分かっているのに、『御やと御無事ニ御座候』との報告は、興秋についての安否報告であり、米田監物是季のこの手紙は、この時点で細川興秋が生存していて、小笠原玄也の一件に巻き込まれずに無事に鹿本町庄村泉福寺から天草御領のキリシタン寺に逃亡したことを示す唯一の重要な証拠となっている。

天草の池田家文書も実に不明瞭な記述が多く、池田家文書を調べ直して矛盾点を洗い出し個人的に調査収集した史料や古文書、また現地調査で頂いた古文書や新たに解った資料を織り込みながら、他の資料からの推測や憶測を交えて、細川家史料に照らし合わせて整理して再構成をした。自分なりの結論を年表にして細川興秋の大体の行動を、状況証拠の上に立脚しながら資料、及び伝承などを交えて推測して再構築した。

香春町採銅所の不可思議寺、香春町中津原浦松の加賀山隼人興良の墓碑、イエズス会報告の小笠原玄也と細川興秋の記録、鹿本町庄地区の泉福寺、米田監物是季の報告書、天草御領の芳證寺の記録、以上の各地点における断片的記録によって、興秋生存の立証が可能となった。しかし、これらの断片的記録同士を結びつける資料は今のところは見つかっておらず、現段階では推論にたよらざるをえない。現在分かっている資料や記録、状況証拠をこれからの細川興秋研究の叩き台にしていただければ幸いである。

細川興秋概略年表

1585 年（天正 13）
興秋、細川忠興、細川玉ガラシャの次男として誕生する。
【家伝、天草の池田家文書では 1583 年誕生となっている】

1595 年（文禄 4）
忠興の弟興元、忠興の次男興秋【10 歳】を養子にする。
興秋の姉お長の夫、前野出雲守長重自殺、お長は尼になる。

1600 年(慶長 5)　6 月 23 日
興秋【15 歳】、兄忠隆、叔父興元とともに会津討伐に参加。
7 月 17 日
大坂玉造細川藩邸にて母玉ガラシャ【37 歳】自害する。
小笠原玄也の父、小笠原備前守秀清少齋が介錯した。
9 月 15 日　関ヶ原の戦い、興秋【15 歳】首級ひとつを上げる。
9 月 27 日　興秋、福知山へ行く
？月　兄忠隆、高野山で出家して休無と称する。
11 月　2 日　父細川忠興、豊前の国（39 万 9000 石）を拝領する。
12 月 26 日　忠興、豊前中津城に入国する。

1601 年(慶長 6）12 月中旬
興元【36 歳】兄忠興に逆らい黒田如水、長政を頼り小倉から出奔する。興秋【16 歳】養父興元の出奔に連座して中津城に幽閉される。

1603 年（慶長 8）9 月 29 日
興秋の姉お長【24 歳】前野出雲守長重の後妻、出雲にて死去。現在八代市盛光寺（浄土宗）にお長の位牌はある。お長の法名安昌院殿心月妙光大姉【写真参照】

1604 年（慶長 9）10 月
興秋【19 歳】、忠利の代わりに江戸に人質として使わされる。
11 月 16 日　興秋、小さい将宛に起請文を出す。京都に留まる。
（永青文庫所蔵・熊本県立図書館蔵）

1605 年（慶長 10）1 月 12 日

興秋【20 歳】、京都建仁寺塔頭十如院で出家出奔。
（祖父細川幽斎の庇護のもと伏見か淀あたりで隠棲する。

【推論】
1604 年（慶長九）秋、興秋【19 歳】は長らく江戸で人質だった三男・忠利の代わりに、江戸に人質として行くように父忠興に命じられた。興秋は始めこれを拒んだが、暮れには江戸に向けて出立している。1600 年（慶長五）9 月 15 日、興秋は関が原の戦いにおいて父忠興、叔父興元、兄忠隆、とともに戦い、首級ひとつ取る手柄を立てている。弟忠利は徳川秀忠の小姓として気に入られ、初陣は飾ったが関が原の戦いには間に合わなかった。この事から興秋は自分が廃嫡されたこと、何の働きもない弟忠利が嫡子になったことへの怒りと、＜忠利嫡子＞を父忠興に押し付けた徳川家康への憎しみ、またそれを認めた父忠興への反抗、徳川家康の元に人質として行けば、キリシタンゆえに処罰されることへの恐怖から、旅の途中、京都建仁寺に留まり、11 月 16 日、忠興の愛妾、小さい将宛に起請文【永青文庫蔵・熊本県立図書館蔵】を出している。、年を越した 1605 年（慶長十）1 月 12 日の朝、突然、興秋は京都建仁寺塔頭十如院で出家出奔した。父忠興にとって興秋の行動は予想もしないものだった。京都で暮らす祖父・細川幽斎の近く、伏見か淀あたりで隠棲生活を送ったものと思われる。

1606 年（慶長 11）7 月 27 日
興秋の重臣、飯河父子、飯河肥後守、父飯河豊前守が誅罰される。誅罰で郎党を含めて 22 名が討死にした。米田監物是季【22 歳】は細川家を出る。表向き飯河誅罰事件について細川忠興との不和が原因と言われている。米田監物是季は細川忠興に秘密裏に命じられて細川興秋の警護のために細川家を出て京都に住む。
12 月 25 日　三男・細川忠利【20 歳】、兄興秋に変わって中津城に入る。

【推論】【家伝池田家文書による】
16??年　興秋、側室を娶る。立家彦之進の娘、（興秋の側室はキリシタンと思われる。）
唐津藩寺沢志摩守家老、関主水は天草佐伊津村金浜城主。立家彦之進と関主水の関係が不明確。16??年　興秋の嫡子・興吉（後の興季）誕生する。【家伝池田家文書による】
おそらく 1605 年から 1610 年 8 月の細川幽齋死去前の間に、興秋は側室を娶り、嫡子興吉が誕生したと考えられる。いつ興秋の嫡子・興吉が誕生したのか？　興秋の長女・鍋の誕生した 1611 年（慶長十六）8 月 6 日以前なのか、または以後なのか池田家文書では明確ではない。天草市五和町御領の芳證寺にある興季の墓碑銘には死去年月日の寛文十年（1670 年）8 月 17 日との刻印だけがあり、死去時の年齢、及び年齢から逆算しての誕生年月日、いずれも不明。
推定だが 1606 年～1610 年の間に嫡子興吉が誕生したと考えると、興秋の嫡男元服【15 歳

前後】の時（推定 1621 年～1625 年）の命名からも推測される出来事がある。米田監物是季は 1606 年 7 月以後、興秋の警護を担当しているので、二人は共に大坂の陣を戦い抜き、興秋は命を助けてもらい親密になった米田是季の一字・季を興秋が嫡男に貰い付けたと考えられる。また、季の字は細川家の縁戚関係系図、細川家、明智家、妻木家、沼田家、三淵家、松井家、寺沢家のどの系譜を見ても見出せない。興秋の嫡子興季の季の字は米田監物是季から取られたと思われる。、興季元服当時（推定 1621 年～1625 年）興秋の妻【妾】と嫡子興季は天草佐伊津にいたし、興秋は豊前田川郡香春町採銅所不可思議寺の住職だったので、互いの連絡の手段は両方の土地を行き来して宣教活動をしていた中浦ジュリアン神父に頼ったと推測できる。当然、採銅所不可思議寺の興秋と京都坂本の西教寺に蟄居していた米田監物是季との間にも細川藩内での機密の連絡手段は存在したと考えられる。1641 年（寛永 18）春頃、興秋の嫡子興季が江戸より呼ばれ、天草初代代官鈴木重成の命により御領組みの大庄屋を預かった時、興季は 35 歳～31 歳と推定される。この時興秋【56 歳】は息子興季と 1614 年以来 27 年ぶりに再会している。御領庄屋となった興季の死去した 1670 年 8 月 17 日の推定年齢は 64 歳～60 歳。

天草の池田家文書の記録に従えば『1615 年 6 月 6 日、京都伏見の東林寺にて切腹。尾州春日部郡小田井村に暫らく御忍び被成、夫より直に肥後國天草郡御領村に御居住被成候て、宗専様と奉申候よし。』となっている。つまり興秋が 1615 年～1616 年頃に天草に来て、立家彦之進の娘をもらい嫡子興吉が誕生している。興吉の誕生は早くて 1617 年頃以後と推測される。1641 年（寛永 18）春頃、興秋の嫡子興季が江戸より呼ばれ、天草初代代官鈴木重成の命により御領組みの大庄屋を預かった時、興季は 24 歳と推定され、御領庄屋となった興季の死去した 1670 年 8 月 17 日は 53 歳。

興吉（後の興季）についての記録が存在しない理由とは、興秋の出奔、及び京都での隠棲に関して幕府から興秋自身がどの様な処分を下されるのかさえもわからないのに、興秋の嫡子・興吉にまでその累が及んではならないとの父細川忠興の配慮から、興吉の存在（誕生に関して）そのものが秘密裏に処理され、すべての興吉に関する記録を残さないように（破棄するように）画策したためと思われる。その当時、幕府に対して敵対する家（もしくは個人）の男子（嫡子）は根絶やしにするが女子には害を及ぼさないのが武士の慣例であり、興秋の長女・鍋に関しての記録のみが存在するのは、このような理由によるものと推測される。

家伝・天草の池田家文書について

興秋の系譜自体は江戸時代後期、1802 年・享和二年・6 月 15 日に御領組、九代大庄屋長岡五郎左衛門興道（1815 年・文化 12 年・10 月 7 日死去）により書かれたものが池田家に伝えられていた池田家古文書である。文書の系譜自体は江戸時代後期の編纂であるが資料的価値が高いと判断されている。なぜならば、慶安四年（1651 年）肥後藩が古城の実態を報告提出した『肥後国　江戸江差上候御帳之控え』には、御領城の記載はない。御領城は、天草・島原の乱後に鈴木重成によって陣屋が置かれた本格的な中世城跡だけに報告書からの

欠落は大きな謎であり、細川藩が作為的に御領城を報告書に記載しなかったと考えられる。興秋が隠蔽されていた御領城は興秋の死去９年後も細川藩にとっては最高機密の土地であり、絶対に外部に知られてはならない、触れてはならない最高秘密事項だった。御領城は城が破却放置された後、【芳證寺の境内となる以前】秘密裏に切支丹寺が建てられていたので興秋はこの寺に身を潜めたと考えられる。細川家にとつて御領城跡は隠さなければならない土地であり『慶安四年の差出』から御領城が欠落している最大の理由は興秋の隠蔽と深く係わっていると考えられる。**興秋の警護を担当していた長岡監物是季（米田監物是季）と全責任者の国家老長岡佐渡守興長（松井新太郎興長）は慶安 4 年（1651 年）には共に健在で、興秋の死去 9 年後といえども幕府との緊張関係は続いていて、興秋の隠蔽に深く係わっていた 2 人によって『江戸へ差上候御帳之控え』への御領城の不掲載は決定されたと推測される。**

したがって、慶安四年の差出から 165 年後の編纂といえども御領城に匿われていた興秋の系譜【池田家文書】の信憑性は高いと判断される。

＊『五和町史資料編（その９）御領城跡・鬼池城跡』　五和町教育委員会発行

御領・鬼池の中世城跡調査にあたって関係史料とその解題　鶴田倉蔵

（行書体　髙田重孝書き込み挿入）

興季についての家伝・天草の池田家文書に、『興秋公は立家彦之進の娘を妾とした。彦之進は大坂の陣で討ち死。彦之進の家臣の中村半太夫が主人の娘を天草で養育していた。同妻【妾】は寛永十二年（1635） 7 月 10 日に死去した』とある。

【推論】

しかしこの池田家文書の記述には実に矛盾や曖昧な点が多く、いつ興秋が寺沢家家臣立家彦之進の娘を側室にしたのか、いつ嫡子興吉【後の興季】が誕生したのか、いつ家臣の中村半太夫が主人立家の娘【興秋の側室】を天草に連れ帰り養育したのかについては不明。しかし避難の時期についてはおそらく大坂の冬の陣の前 1614 年（慶長十九）12 月以前に戦禍を避けるためと嫡子興吉を保護するために郷里天草の佐伊津に連れ帰ったと推測される。その時すでに立家の娘【興秋の側室】には興吉が生まれていて、幼い興吉を連れて天草に帰って身を隠したと考えられる。娘の父・立家彦之進は寺沢家重臣・天草佐伊津村金浜城主とあるので、立家彦之進の家臣中村半太夫が避難のために出身地天草の佐伊津に連れ帰って匿うことは母と息子にとって一番安全な隠れ場所であった。興秋の妻（妾）は『寛永十二年（1635 年）7 月 10 日死去』と天草市五和町御領の芳證寺過去帳にあるので、終生天草を動かなかったと考えられる。興秋は妻の死後、小笠原玄也が訴えられた直後の同年（1635 年）10 月中旬から下旬の間に山鹿郡庄村【鹿本町庄村】の泉福寺から出て山鹿から（あるいは玉名・高瀬から）菊池川を下り、海路天草御領の御領城跡にすでにあったキリシタン寺に移り潜伏、後に長興寺を興したことになる。つまり興秋にとって天草佐伊津、御領は妻の縁故の土地であり元々キリシタン組織基盤の強い土地であった。おそらく嫡子興吉も母とともに天草にいてこの土地で育ったのではなかろうか？

細川興秋の1635年10月の天草へ移住のためのキリシタン指導者達との折衝、場所の選定、移動の際の手引き及び警護は、大坂の陣以来の興秋の警護を担当していた細川藩家老米田監物是季が行なったと推測される。当時、天草は唐津藩主、寺沢広高が拝領していて、1633年（寛永10）以来、三宅藤兵衛が天草富岡番代になっていた。（萬松山却記簿）三宅藤兵衛は細川忠興の妻、玉ガラシャ夫人の姉の子であり細川興秋と三宅藤兵衛は従兄弟同士である。寺沢広高の妻は妻木貞徳の娘、明智光秀の妻も妻木家の出身。明智家、寺沢家ともに、細川家とのつながりが深い親戚関係である。米田監物是季はこの血縁関係も考慮に入れ、あえて寺沢藩領の天草御領を選択したと推測される。

1610年（慶長15）5月10日
豊前国田川郡香春町採銅所に真宗大谷派、不可思議寺を創建する。
香春岳城主高橋九郎元種の家老、行木（雪木）善兵衛を本願寺第十二世教如法主に帰依させ、剃髪して法名を宗慶と号する。（興秋を匿うために作られた寺）

細川興秋を匿うために作られた不可思議寺

細川忠興は、忠興の末弟・細川中務少輔孝之【香春岳城主・2万5000石】に命じて、香春郡採銅所に、真宗大谷派の寺、不可思議寺（後の明善寺・みょうぜんじ）を作らせている。香春岳城主高橋九郎元種の家老・行木（雪木）善兵衛を、本願寺第十二世教如法主に帰依させ、剃髪して法名を宗慶と号させ住職にさせた。1610年（慶長十五）5月10日開創、法主より阿弥陀如来仏立像本尊を受け、開基創建している。寺の山号を不可思議山という。

不可思議寺は細川藩が1632年（寛永九）12月に肥後に移った後、1634年（寛永十一）8月7日、第3世慶順の世代に至って寺号免許を取り、明善寺と号した。
＊　香春町町史　第一章　神社・寺院　723～724頁　明善寺
＊　明善寺蔵の古文書『永代志』から調査した記録による。
　【明善寺古文書調査責任・髙田重孝】

【推論】
おそらく死を悟った細川幽斎【77歳】が忠興【48歳】と相談して、幽斎の死後、忠興の領地豊前に於いて興秋を匿うために作らせた寺と考えられる。幽斎としては自分の死後、京都周辺で興秋を今まで通りに庇護出来ない懸念があった。興秋を京都から移し、興秋を匿うための寺を忠興の領地豊前に作るこの相談は幽斎と忠興の間で1608年末から1609年には出来上がっていて、秘密裏に場所の選定が成され、忠興の末弟・細川中務少輔孝之【香春岳城主・2万5000石】に命じて、田川郡香春町採銅所に於いて寺建設が実行に移された。
香春岳城主高橋九郎元種の家老・行木（雪木）善兵衛を、本願寺第十二世教如法主に帰依させ、剃髪して法名を宗慶と号させ住職にさせた。完成は1610年（慶長十五年）5月10日

開創、法主より阿弥陀如来仏立像本尊を受け、開基創建している。寺の山号を不可思議山と言い、寺号を不可思議寺と言う。これにより豊前において興秋を匿う場所の準備は全て整った。

8 月 20 日　　細川幽斎、京都に於いて病のため死去【77 歳】

【推論】
1610 年（慶長十五）忠興の父、細川幽斎が 8 月 20 日、京都で 77 歳の生涯を閉じた。京都での興秋の保護者でもあり、監督者でもあった祖父幽斎の死により、興秋は関西における庇護を失ってしまった。興秋【25 歳】は祖父幽斎の亡き後も京都に引き続き住まう。興秋と忠興の間でどの様な話し合いが成されたのかは不明だが、幽斎と忠興の意に反して興秋は京都に住み続けた。細川幽斎の死後、興秋を豊前国田川郡香春町採銅所の不可思議寺に匿う計画は頓挫した。おそらく興秋は秘密裏に生まれた興吉と側室との平和なキリシタン家庭生活に満足していたこと、京都という環境が嫡子興吉を育てるのに適していたので京都での生活を維持したかったこと、不便な豊前の田舎での匿われた生活は望まなかったこと、江戸への人質の一件以来、廃嫡された怒りと父忠興への反発も多大にあったものと推測される。この香春町採銅所の不可思議寺は、本来、キリシタン信仰を棄てない次男・興秋を、父忠興が自分の領地・豊前に置いて保護するために作った隠し寺（隠蔽をカモフラージュするための寺）だった。

1611 年（慶長 16）8 月　6 日　興秋長女・鍋（南条大膳元信の妻）誕生する。
（真源院様御代侍帳）母は興秋正室、氏家宗入の娘
1629 年(寛永 6)　6 月 6 日　鍋姫【18 歳】南条大膳元信へ嫁ぐ。化粧料五百石。
鍋は 1689 年（元禄 2）6 月 13 日死去【79 歳】法名　香雲院梅室理清

【推論】
1610 年（慶長十五）春頃、あるいはそれ以前、興秋【25 歳】、氏家宗入の娘と内密に結婚する。結婚は祖父幽齋の亡くなる以前に執り行われと推測される。次年 1611 年 8 月 6 日に長女鍋が誕生している。忠興は興秋に側室ではなく、細川家次男の正室として元美濃斉藤道三入道の家臣、美濃斉藤の三名将として名高く名門である氏家宗入の娘を迎えた。正室から生まれる嫡子（男子）を期待したであろうが、生まれたのは長女鍋であった。

1629 年（寛永 6）6 月 6 日　興秋の娘・鍋姫【18 歳】南条大膳元信へ嫁ぐ。化粧料五百石。
鍋の婿である南条家は元豊臣の家臣で名門。加藤清正へ仕えて宇土城を預かる。後に細川家に移る。細川忠利の末息子元知が南条元信の養子となり、この元知の嫡子是康が米田家を継ぎ五代目のときに、南条家は一応断絶している。

1612 年（慶長 17）11 月 13 日
伊東マンショ神父　長崎コレジヨに於いて死去【43 歳】肋膜炎・胸膜炎が原因

1613 年（慶長 18）6 月　4 日
徳川家康、キリシタン禁令を発する。全国でキリシタン狩が始まった。

1614 年（慶長 19）5 月初旬
中浦ジュリアン神父【46 歳】危険を犯して小倉城内に潜入、二の丸の加賀山隼人興良宅に監禁されている小笠原玄也一家を訪ねる。（現・小倉城内二の丸跡・北九州 NHK 放送局）
＊　1614 年イエズス会年報記録　ガブリエル・デ・マットス神父報告による
　　『16・17 世紀イエズス会日本報告集』　第二期　第二巻　127～129 頁

1614 年（慶長 19）9 月 17 日
興秋の妹、多羅【27 歳】稲葉一通の正室、豊後臼杵に於いて死去。【細川家系図による】（当時、大名の正室は江戸へ人質として住まうことが定められていた。それゆえ、江戸の稲葉上屋敷にて死去したと思われる。稲葉家の菩提寺である芝高輪の泉岳寺に埋葬された。大分臼杵教育委員会、神田高士氏の情報による）

10 月頃　小笠原玄也、小倉城二の丸の加賀山隼人興良の屋敷から追放され香春町中津原浦松地区の農家に監禁され、厳重な監視下に置かれる。監視は香春岳城主細川中務少輔孝之の家来が担当した。香春町中津原浦松の山の上には愛宕山照智院が、慶長年間の火災により焼失。細川忠興が僧永椿に命じて再興に当たらせ、寺禄 50 石を賜り、営繕の費用に充てられた。山上の照智院からも永椿が小笠原玄也一家の監視をしていたと推測される。
＊　1618 年イエズス会年報記録　クリストファン・フェレイラ神父報告による
　　『天正少年使節の中浦ジュリアン』　結城了悟著　101～102 頁
＊　香春町町史　下巻　721 頁　愛宕山照智院

興秋は大阪城入城前、側室と嫡子興吉【後の興季】を避難のため天草へ帰郷させる。

10 月　6 日
興秋【29 歳】、豊臣秀頼の依頼により西軍に組みして、大坂城 に入城。細川藩の家臣、米田監物是季、寺本八左衛門、杉生左兵衛、西郡半助、武藤又兵衛、山田伝助、興秋の正室の父、氏家宗入の兄、氏家道喜、興秋の側室の父、立家彦之進（寺沢藩重臣）等が籠城した。
11 月 7・8 日
家康の禁教令により国内の宣教師達、原マルチノ、高山右近、内藤寿安、長崎よりマカオ・

マニラに追放される。
12 月 21 日　　大坂冬の陣終了（12 月 21 日和睦成立）
12 月 29 日　　細川忠興、小倉から大坂に向けて船出後、出陣延期。

12 月？　　香春町採銅所不可思議寺の初代住職・宗慶【行木善兵衛】病気に倒れる。
＊　明善寺蔵古文書『永代志』より

1615 年（元和元）4 月 4 日　香春町採銅所不可思議寺の初代住職・宗慶 71 歳で寂定（死去）
4 月 19 日　徳川家康が忠興に出陣を命令。
4 月 28 日　細川軍、大坂夏の陣参戦のため摂州兵庫花熊浦に到着。
5 月 10 日　大坂夏の陣終了
6 月　6 日　興秋【30 歳】、京都伏見の東林院に於いて切腹させられる。
【池田家文書】伏見の稲荷山、南谷に埋葬。法名　黄梅院真月宗心。

不可思議寺第二世住職に成りすまして隠棲した細川興秋

香春町採銅所明善寺【不可思議寺】古文書より【調査報告責任者・髙田重孝】
『永代志』による
1　慶長 15 年（1605 年）草創、開基雪木善兵衛となっている。雪木と行木との表記の違い。
2　行木（いくき）とは読まず,「ぎょうき和尚」と地元では呼んでいる。
3　初代住職・宗慶【63 歳】、1610 年（慶長十五）5 月 10 日開創、法主より阿弥陀如来仏立像本尊を受け、開基創建している。寺の山号を不可思議山、寺号を不可思議寺という。初代住職・宗慶の在任期間は 1610 年 5 月 10 日～1615 年 4 月 4 の 5 年間。
4　初代住職・雪木善兵衛の法名は宗慶であり、宗順ではなかった。
5　初代住職（第一世）宗慶は慶長 19 年（1614 年）12 月より病気を生じ、元和元年（1615 年）4 月 4 日に 71 歳にて寂定（往定・死去）している。
6　第二世、宗順、以下不明【細川興秋と推測される】
7　第二世住職宗順は、1632 年 12 月、細川藩の肥後熊本移封と共に不可思議寺を出ている
8　第三世、慶順、以下不明【現明善寺住職、片山家の初代】
不可思議寺は細川藩が 1632 年（寛永 9）12 月に肥後に移った 2 年後、1634 年（寛永 11）8 月 7 日　香春町採銅所の不可思議寺、第三世慶順の世代に至って寺号免許を取り、明善寺と号する。
＊　香春町町史　第一章　神社・寺院　723～724 頁　明善寺

初代（第一世）住職宗慶について

不可思議寺古文書（明善寺古文書）による。

記録
福岡県豊前國田川郡採銅所村
真宗大谷派本願寺末　**明善寺**
一　由緒沿革
慶長拾五庚戌年ノ草創ニシテ開基雪行善兵衛宗近士ハ香春獄城主千種信濃守髙橋九郎元種ノ家臣ニシテ、而モ身ハ家老ノ職権ニ任シ採銅所三ヶ村三千六百石ヲ領有管轄シ城壁ヲ片山ヒシヤケ原ニ築キ其武勇ヲ振フ。折柄豊後大友曹淋氏ノ攻撃ヲ受ケ遂ニ敗刃ニ及ビ、為二一家一門悉ク諸方ニ流浪ス。其後時世ノ治第ニ平穏ニナリ依テ時ノ庄屋ヲ拝命シ片山花立ニ於テ其ノ公務ヲ映賞ス。折柄敗戦ノ富時離別己来二拾有餘年ニシテ実子善五郎士、時ノ役所花立ニ尋ネ来ル。親子ヲ名乗ント欲スレ共、父近宗士疑心深ク容易ニ其実ヲ不語不図、善五郎脇指目貫ニ鏤鎮セル宝石ノ奇ナルヲ見テ之ヲ拝借シ、其身刀ニ某作ト銘記セルニ気付、是ハ之我家傳来ノ寶刀ナリトテ、爰ニ於テ始テ親子ノ実義ヲ語リ、此ヨリ先キ身ハ老衰ニ傾キ、片山ノ庵室二隠遁シ専ラ天臺ノ教義ヲ研学スト雖、其理深遠幽微ニシテ難修寧根機相応ノ真宗ニ改宗セントテ上京シ、東本願寺派門跡第十二世教如上人ニ皈依シ、三皈戒ヲ受ク。法名ヲ宗慶ト賜ルニ時慶長十五年五月拾日行年六十三歳。其後同年十月三日、本山ヨリ御木佛尊像一骨阿弥陀如来立像ヲ供奉シ皈ヘル。此ノ処ニ草庵ヲ建立シ後、益々門徒教導怠ナク念佛弘通ノ教義ヲ弘宣セリ。其後慶長十九年拾二月ヨリ病気ヲ生ジ、元和乙卯年四月四日七拾一歳ニテ往定

第一世宗慶　　慶長拾九甲寅拾二月ヨリ病気ニテ、明年元和乙卯年四月四日寂定
一　御木佛御尊像阿弥陀如来立像壱骨
慶長拾五庚戌年拾月三日本山ヨリ御下附相成候
第二世宗順　【記載なし】
第三世慶順　【記載なし】

☆この論考では不可思議寺第二世住職宗順が細川興秋の法名であることを前提に展開する。

【第 1 の疑問点】
初代住職，宗慶の病死について
慶長 19 年（1614 年）10 月 6 日、細川興秋【29 歳】は米田是季と共に大阪城に入城。
12 月 21 日和睦成立。不可思議寺初代住職宗慶の 12 月発病は、大坂冬の陣が終わった時期と相前後して重なり、豊臣側の敗北がおおよそ細川忠興には読めた時期と重なる。
1615 年（元和元）4 月 4 日宗慶死去、4 月 19 日、徳川家康が忠興に出陣を命令。
4 月 28 日、細川軍、大坂夏の陣参戦のため摂州兵庫花熊浦に到着。

細川忠興は小倉出発前に、採銅所不可思議寺の初代住職宗慶を病死（毒による暗殺）という形で取り除き、次の不可思議寺住職に興秋を迎えるための準備をして大坂夏の陣に出陣したと思われる。

【第 2 の疑問点】
第二世住職・宗順和尚とはだれか？
何故宗順まで細川藩の熊本への移封に伴い不可思議寺を出なければならなかったのか？
不可思議寺、第二世住職宗順の時代は、不可思議寺古文書『永代志』と香春町史から計算すると、1615 年～1632 年（元和元～寛永 9）12 月までの 18 年間となる。
1615 年（元和元）は大坂夏の陣が終了して、6 月 6 日細川興秋が京都で切腹させられた年。
1632 年（寛永 9）12 月は，豊前細川藩が肥後熊本に移封になって小倉を去った年。

細川興秋と米田監物是季との関係　（明細は 55～61 頁参照）

米田監物是季略歴

1614 年 12 月 16 日、米田監物是季【30 歳】は大野主馬組の侍大将として、塙団右衛門直之と共に撃って出て南御堂の阿波徳島城主蜂須賀至鎮陣屋を夜襲。大坂城落城後、米田監物是季は脱出して坂本の西教寺に蟄居していた。
1623 年（元和 9）8 月 28 日、徳川幕府が大阪籠城した浪人を赦免、召し抱えの許可を出す。米田監物是季【39 歳】、細川忠興から帰国を勧められ、忠興の招きにより破格の待遇の 2000 石を賜り、細川家に帰参している。
1625 年（寛永　2）【41 歳】6500 石で家老職。
1628 年（寛永　5）【44 歳】大阪城修築の責任者として大役を果たす。
1634 年（寛永 11）【50 歳】には 1 万石を賜る。
1635 年（寛永 12）【51 歳】12 月 23 日、小笠原玄也一家処刑の総責任者。
1638 年（寛永 15）【54 歳】天草・島原の乱の時には、熊本留守居役を命じられている。
1648 年（正保　4）【64 歳】長崎港にポルトガル船が開港した時、藩兵 1 万 1300 人、船 447 隻を率いて出動して大功を立てた。
1658 年（万治元）11 月 8 日死去。【73 歳】。法名雲祥院仁勇紹実実居士。殉死 6 人。子孫は代々家老を務める。

【推論】
1614 年（慶長 19）秋頃、興秋【29 歳】は大坂方（西軍）の招きで大阪城に入城して、豊臣秀頼に仕え、11 月の冬の陣、翌 1615 年（元和元）5 月の夏の陣を戦っている。細川忠興は大坂の陣が始まる前に、京都での興秋の警護を任せていた米田監物是季【30 歳】に大坂城陥落の際には興秋救出を秘密裏に命じて、豊臣方に加担させたと推測される。

5 月 10 日、大阪城落城。
細川忠興は大坂城落城とともに興秋の安否を必死に確かめたであろう。米田監物是季は興秋を大阪城から何としても助け出すために、興秋の警護をして守り抜き、興秋を大阪城陥落の時に無事に落ち延びさせ、細川方に引き渡したと思われる。米田監物是季は坂本の西教寺に隠れ蟄居した。細川方に引き渡された後、興秋は細川家家老松井家の寺である京都伏見稲荷の東林院に潜伏した。忠興は興秋の伏見の屋敷に残された妻子を守るために松井右近等一部の側近を護衛に派遣して、興秋の潜伏先が掴めると身柄を保護したと考えられる。しかし告訴する者があり、潜伏先で捕らえられた。徳川家康は、興秋は死罪に価するが父忠興のこれまでの徳川家に対する忠義と功労に報いるため、興秋の罪を免じようとしたが成り行きによっては細川家の知行減、最悪の場合、細川家取り潰しまで発展しないとも限らなかた。細川家の生存と存続をはかるため、忠興は愛する息子、興秋に切腹を命じ、6 月 6 日、京都、伏見の東林院において興秋【30 歳】は切腹した。
興秋の遺体は京都伏見の稲荷山の南谷に埋葬された。法名黄梅院真月宗心。
興秋亡き後、残された妻・氏家宗入の娘は忠興が引き取って公家の飛島井雅豊大納言へ再婚させたと『氏家家先祖付』に書かれている。娘鍋は細川家で養育して 1629 年 （寛永 6） 6 月 6 日　鍋姫【18 歳】を南条大膳元信へ嫁がせている。化粧料五百石。
しかし、不思議なことに、興秋の墓は残されていない。興秋が切腹した東林院も京都伏見稲荷には存在しない。忠興は興秋を採銅所の不可思議寺に匿うためにあらゆる手を尽くしたと思われる。現在の京都市右京区花園妙心寺町、妙心寺内にある東林寺とは無関係。

【推論】
【家伝・天草の池田家文書】15 頁には『興秋は尾州春日部郡小田井村に暫らく忍び後、肥後国天草御領村に隠棲』とある。
興秋を切腹させたと見せかけて、おそらく 6 月中に人目につかないように京都から豊前小倉まで船に載せて連れて来て、すでに 5 年前の 1610 年 5 月 10 日に開基創建している豊前国田川郡香春町採銅所の不可思議寺に匿わせた。
しかし不可思議寺には初代住職宗慶（行木善兵衛）がおり、宗慶は熱心な仏教徒なので、キリシタンである興秋を匿うには、宗慶和尚から秘密が漏れる危険性が余りにも大きかった。それゆえ最初から興秋を住職として不可思議寺に匿うには、宗慶の存在が大きな障害となった。
明善寺古文書には『慶長拾九年拾二月ヨリ病気ヲ生ジ元和元乙卯年四月四日七拾壱歳ニテ往定』『第一世宗慶　慶長拾九年寅拾二月ヨリ病気ニテ明年元和元乙卯年四月四日寂定』となっている。
細川忠興により興秋を第二世住職にするために初代住職宗慶は暗殺されたのではないだろうか？　1614 年 12 月に毒を盛り 1615 年 4 月 4 日に殺害に及んだ。宗慶を取り除くことに

より不可思議寺には何の障害もなく興秋を第二世住職として迎え入れ、誰にも秘密が漏れずに不可思議寺は隠れキリシタン寺として機能することができた。第二世住職宗順【細川興秋】にさえ初代宗慶は急な病死として伝えたであろうし、暗殺は秘密にされた。

1615 年（元和元）　7 月 29 日
氏家道喜の二男左近、三男内記、四男八丸、家康の命令により京都の妙覚寺にて処刑される。

興秋の正室の父、氏家宗入の兄、氏家道喜は大阪城に興秋とともに籠城して戦死。氏家道喜の二男左近、三男内記、四男八丸、が京都の妙覚寺に於いて誅された。末子一人が死を免れていて、天海和尚の弟子になっている。この苦境の最中に氏家宗入は病のために 11 月 4 日、小倉において死去【65 歳】

興秋の側室の父、立家彦之進（寺沢藩家臣）大坂の陣で討ち死。
興秋の嫡子・興吉（後の興季・おきすえ）の存在が判っていれば幕府から執拗な追求を受けた事は明白なことであり、それゆえ細川忠興は興吉の誕生そのものを秘密裏に処理して憂いを事前に取り除いている。また興秋は妻（妾）と嫡子・興吉を大坂の陣の前に密かに郷里天草の佐伊津に帰して匿うようにしている。

1616 年（元和 2）　9 月 23 日
三宅藤兵衛（興秋の従兄弟）天草郡に知行 200 石を受ける。

1617 年（元和 3）　8 月 29 日
コーロス徴収文書、*内野村大長嶋与平衛【他 2 名】二江村松田杢左衛門【他 2 名】など、イエズス会日本菅区長マテウス・デ・コーロスの依頼により作成した文書。

コーロス徴収文書とは 1617 年（元和三）8 月 29 日、内野村 3 名、二江村 3 名のキリシタンの代表者達がイエズス会日本菅区長マテウス・デ・コーロスの求めに応じて信仰を告白して自筆署名した文書であり、天草地方のコーロス徴収文書は中浦ジュリアン神父が作成している。天草下島では 13 地区、計 34 名のキリシタン指導者が代表者としてコーロス徴収文書に署名をしている。大矢野島 7 名、天草上島 18 名。
いかに天草全域でキリシタン組織が確固として存在していたかがこの数字から推測できる。
内野村は、現・天草市五和町城河原及午野、二江村は五和町二江。

コーロス徴収文書は日本在住の托鉢修道会から、イエズス会の指導司祭たちは迫害の下、日本人信徒を見捨てて信徒達に躓きを与えているとの非難に答えるために、全国各地の信徒

代表者から証言を集めることにした。この文章は日本文に訳文を添えてヨーロッパに送られた。私達はこのコーロス徴収文書により、1617 年（元和三）の日本に於ける各地の 755 名の信徒代表者の名前を正確に知ることができる。この最高機密書類はプロクラドールといわれた日本イエズス会の代表者がヨーロッパまで肌身離さず携帯して行った。収集の過程で秘密が官憲に漏れた地方の徴収文書もあったようだ。秘密が漏れた文書から壊滅的弾圧迫害を受けた地方があることを、その後の殉教の事実と歴史が物語っている。

＊『近世初期日本関係南蛮史料の研究』　　松田毅一　風間書房 1967

第六章　元和三年、イエズス会士コーロス徴収文書　1022~1145 頁

第六章　元和三年、イエズス会士コーロス徴収文書

第 45 文書　肥後国、天草 1104～1108 頁

？月

フランシスコ・パチェコ神父、ヨハネ・バプテスタ・ゾラ神父ダ・フォンカセ神父、中浦ジュリアン神父【49 歳】、天草で宣教活動をする。（イエズス会年報報告による）

イエズス会日本報告集に不可思議寺の住職として記録された細川興秋

1618 年（元和 4）　？月

中浦ジュリアン神父【50 歳】、香春町採銅所鈴麦の不可思議寺に興秋【33 歳】と香春町中津原浦松地区に小笠原玄也を訪問。中浦ジュリアン神父、逮捕を免れて不可思議寺の住職宗順【興秋】に匿われて不可思議寺に宿泊する。

＊　1618 年イエズス会年報記録　クリストファン・フェレイラ神父報告による

『天正少年使節の中浦ジュリアン』　結城了悟著　101～102 頁

大坂の陣から 4 年後の 1618 年（元和四）と、6 年後の 1620 年（元和六）のイエズス会年報報告のなかの小笠原玄也の記録に混ざって、細川興秋が記録されている。

1618 年年報（元和四）イエズス会年報　クリストファン・フェレイラ神父報告

『いま具体的に述べるが、信仰のために追放されたキリシタンの中に殉教者ディオゴ加賀山隼人の娘婿【小笠原玄也】とその妻及び八人の子供がいる。彼らは豊前の領主、長岡越中殿【細川忠興】によって、数名の貧しい農民だけがすんでいる人里離れた土地【香春町中津原字浦松地区】に追放され、その土地から出ることはおろか居住する家からも出ないように監視されている。**【細川興秋 33 歳は】その高い身分やキリスト教徒としての徳から言って、これを訪ねて慰めるに相応しい人物であるから、大きな危険を犯して神父【中浦ジュリアン神父 50 歳】がそこ【香春町採銅所鈴麦】に行ったが、泊めてくれた仏僧の助けがなかったならば発見され捕らえられるところであった。この仏僧【採銅所不可思議寺、住職宗順・**

細川興秋】は信仰の敵であり、神父が何者であるか知っていたにもかかわらず、徳の高い人であったから、その客【中浦ジュリアン神父】が発見され捕らえられることがないようにしてくれた。それで神の特別な御摂理によって危険から逃れることができた。また同じく神の御心によって神父が企図した目的も都合よく運ばずにはいなかった。』
＊『天正少年使節の中浦ジュリアン』　結城了悟著　101～102 頁

1620 年年報（元和六）イエズス会年報　ロドリゲス・ジーラム神父報告
『**【細川興秋 35 歳は】かつては富といい、権威といい、大名のごとき身分で、衣服にせよ、供廻りにせよ、容貌にせよ、人々が目を向けしめしものなるが、今や綴れて垢づき破れ下がったぼろをまとい、下層の職人、貧しい農民の中に混じり、最下級の奴隷か賤民階級の一人でもあるかの如く、自ら身を下ろして衣食を求め、いかなる賤務も厭わぬのである。我が会の神父【中浦ジュリアン神父 52 歳】はこの人【細川興秋】が故里にあって豊富な生活をするよりも、むしろ追放の身分となり、苛酷な運命に弄ばれるのを優れたりとするほど熱心に宗教を守ろうと、堅い決心をしているのを見出した。**』
＊『16・17 世紀イエズス会日本報告集』　第二期　第 3 巻　95～96 頁　筑後・豊後国

【推論】
小笠原玄也の知行高は細川忠興の小姓であったから 600 石である。小姓が高い身分かというと決して高くはなく、まして、富、権威、大名のごとき身分でもなく、供回りも多くはない。おそらくこの記述表現は別の人物のことを表していて、細川家においてキリシタンであり『大名の如き身分』の人とは次男の細川興秋以外に考えられない。
細川興秋は 1615 年（元和元）6 月 6 日以降、京都伏見の東林院で切腹させたと見せかけて、実は秘密裏に京都より豊前国田川郡香春町採銅所にある不可思議寺に連れてこられ、初代住職・宗慶病死（1615 年 4 月 4 日）の後、第 2 世住職宗順になって、叔父細川中務少輔孝之の保護下に匿われていたと考えられる。
細川家の嫡子である興秋はキリシタンゆえに『かつては富といい、権威といい、大名のごとき身分で衣服にせよ、供廻りにせよ、容貌にせよ、人々に目を向けしめし者』であったが、『この名門に生まれて愉しい日を送ってきた士が、晴々として財産や故郷を捨てて現在の境涯を選んだ』人だった。
『しかし、わたしにとって益であったこれらのものを、キリストのゆえに損と思うようになった。わたちは、更に進んで、わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思っている。キリストのゆえに、わたしはすべてを失ったが、それらのものを、ふん土のように思っている。それは、わたしがキリストを得るためであり、律法による自分の義ではなく、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基く神からの義を受けて、キリストのうちに自分を見いだすようになるためである。』
ピリピ人への手紙　３章　７節～９節

キリストのゆえに、すべてを失った細川興秋と小笠原玄也。それらのものを、ふん土のように思い、日々の糧を得るために、最下級の仕事も厭わず、聖貧のなかに慎ましく暮らす興秋と玄也とみやの姿は、まさに信仰に生きるキリシタンの模範であった。

『寂しい片田舎に名もない百姓、領内のやくざ者の間に追放され・・今や綴（つづ）れて垢づき破れ下がったぼろをまとい下層の職人、貧しい農民の中に混じり、最下級の奴隷か賤民階級のひとりでもあるかの如く、自ら身を下して衣食を求め、いかなる賤務も厭わぬのである。我が会の神父はこの人が故里にあって豊富な生活をするよりも、むしろ追放の身分となり、苛酷な運命に弄ばれるを優れたりとするほど熱心に宗教を守ろうと堅い決心をしているのを見いだした。』
＊『16・17 世紀イエズス会日本報告集』 第 2 期　第 3 巻　96 頁　同朋舎

『晴々として財産や故郷を捨てて現在の境涯を選び、今や極貧の人達の間に交って、百姓の姿（蓑を着ていた）をして、その日その日の糧を得んがために賤しい労働に従っているのは、感動すべき光景であった。』
＊『日本切支丹宗門史』　中巻　レオン・パジェス著　第 5 章　133 頁

【推測】
1618 年の豊前訪問のとき、中浦ジュリアン神父【50 歳】が香春町採銅所鈴麦の不可思議寺に細川興秋【33 歳】を訪ねたこと、香春町中津原浦松地区に隠蔽されている小笠原玄也を訪ねたことはイエズス会年報により報告されているので確認できる。
1614 年 5 月初旬、中浦ジュリアン神父は危険を犯して小倉城二の丸の加賀山隼人興良宅に軟禁されている小笠原玄也一家を訪ねた後、小笠原玄也は 1614 年 10 月頃に小倉から追放されて香春町中津原浦松地区の農家に監禁されていた。1615 年 7 月以後、興秋が採銅所の不可思議寺に隠蔽され、第 2 世住職宗順となっている情報を中浦ジュリアン神父は豊前のキリシタン組織から 1618 年の筑前豊前地方巡回前の時点で入手していて、香春町中津原浦松地区の農家に監禁されている小笠原玄也一家と、採銅所の不可思議寺に第 2 世住職として身を隠している興秋のことを知ったうえで訪問したと思われる。
当時、中浦ジュリアン神父は島原口之津に居を構えていて、島原、天草、八代地区を司牧宣教していた。興秋の側室【妾】嫡子興吉の匿われている天草佐伊津村は島原口之津からは早崎瀬戸を挟んだ対岸にあり、鬼池、御領、佐伊津は確固としたキリシタン組織の存在した地区だった。前年の 1617 年 8 月 29 日付けでコーロス徴収文書を中浦ジュリアン神父が作成している。これらの文献に記載されている状況証拠を付け合せて見ると、中浦ジュリアン神父は佐伊津にいる興秋の側室と息子興吉の存在をすでによく知っていて、1618 年、採銅所不可思議寺訪問のとき、住職宗順【興秋】に天草佐伊津の側室と息子興吉の消息を伝えた。

帰りには興秋の手紙なりを預かり元気でいることを興秋の側室に伝えた。それ以後中浦ジュリアン神父が採銅所不可思議寺を訪問するときは、興秋と側室は互いの消息を確かめ合い、中浦ジュリアン神父を仲立ちとして連絡を取り合っていたと推測される。
興秋の嫡男元服【15 歳前後】の時（推定 1621 年～1625 年）の命名からもこの事は推測される。米田監物是季は 1606 年 7 月以後、興秋の警護を担当しているので、二人は共に大坂の陣を戦い抜き、興秋は命を助けてもらい親密になった米田是季の一字・季を興秋が嫡男に貰い付けたと考えられる。また、季の字は細川家の縁戚関係系図、細川家、明智家、妻木家、沼田家、三淵家、松井家、寺沢家のどの系譜を見ても見出せない。興秋の嫡子興季の季の字は米田監物是季から取られたと思われる。、興季元服当時（推定 1621 年～1625 年）興秋の妻【妾】と嫡子興季は天草佐伊津にいたし、興秋は豊前田川郡香春町採銅所不可思議寺の住職だったので、互いの連絡の手段は両方の土地を行き来して宣教活動をしていた中浦ジュリアン神父に頼ったと推測できる。
1620 年頃、小笠原玄也は 4 年に渡る監禁生活から解放されて、香春町中津原浦松地区の狭い土地で農業に従事する。解放後、玄也は近くの不可思議寺の住職宗順になっている興秋と面会、以後、興秋と玄也はハンセン病救済（救癩）活動や被差別部落への貧困救済援助活動を田川地方に約 3000 人いたキリシタン組織の人々と共にしていたと推測される。
＊　イエズス会 1620 年年報ロドリゲス・ジーラム神父報告
　『16・17 世紀イエズス会日本報告集』　第二期　第二巻　95～96 頁

1613 年（慶長十八）6 月 4 日、キリシタン禁令が発布され、全国でキリシタン狩りが始まった。迫害を逃れ、追放された貧しいキリシタン達は山の奥深くに逃げ込んだ。徳川家康が全国の金銀山保護のために定めた法律、『御山例五十三条之事』があり、そこには一種の治外法権が認められていたため、貧しいキリシタン達にとっては、山深き地は信仰を守りながら貧しくても生活できる安住の場所であった。奈良時代から銅や金が採掘できた田川郡香春町採銅所付近も、豊前、豊後、筑前、筑後のキリシタン達の格好の隠れ家だった。採銅所は呼野・企救郡（きくのこうり）に接していて、このあたりから田川周辺にかけて当時キリシタンが約 3000 人いたと記録に残されている。細川忠興もこの地方に 3000 人からのキリシタンが住んでいる事実を把握していて、次男興秋を隠すために香春町採銅所に不可思議寺を作っている。このことからも、細川忠興が意識的に息子興秋と小笠原玄也一家を、隠れキリシタンの多いこの地域を選んで隠していたことが理解できる。
約 200 年後の、*1829 年（文政十二）田川郡香春町採銅所の光願寺で行われていた宗門改めの記録には、男女合わせて 2871 人（男 1488 人、女 1383 人）、像踏み申す分 793 人、像踏み申さず分 2078 人とあり（*金田手永大庄屋六角文書 78～79 頁『年々記録』）、絵踏みをしなかった者（隠れキリシタン）の数が圧倒的に多い。いかにこの地方に隠れキリシタンが多かったかがこの記録からも分かる。
＊　香春町町史　田川郡の宗門改め 527～529 頁、

＊　香春町町史　金田手永大庄屋六角文書 78～79 頁『年々記録』

2 月末～8 月初め　　豊前の国において大規模な迫害のために殉教者が相次ぐ。
1618 年（元和四年）イエズス会報告書補遺には『2 月末から 8 月の始めにかけて 37 名が殉教した。小倉に於いて 25 名、斬首。中津に於いて 12 名が殉教、内 5 名、斬首。7 名が逆さ十字架に掛けられて槍で胸を付かれて殉教した。』と報告されている。
フライ・アロンソ・デ・メーナ神父の 1618 年 2 月付け『豊前において信仰のために遂げた聖なるキリシタンの殉教』の報告より
＊『16・17 世紀イエズス会日本報告集』　第二期　第二巻　418~420 頁
＊『福者アロンソ・デ・メーナ　O.P.　書簡・報告』
　　キリシタン文化研究　23　188~194 頁
＊『福者フランシスコ・モラーレス　O.P.　書簡・報告』
　　キリシタン文化研究　7　136~137 頁

1619 年（元和 5）10 月 15 日
加賀山隼人【54 歳】、豊前小倉に於いて斬首処刑（殉教）、加賀山半左衛門【49 歳】、息子ディエゴ【４歳】、豊後日出に於いて斬首処刑（殉教）される。

三人の遺体はキリシタンを棄教しない見せしめのために香春町中津原浦松地区に監禁されていた小笠原玄也のもとに運ばれて玄也の家の近くに埋葬される。
（イエズス会 1619 年年報の記録による）
＊『16・17 世紀イエズス会日本報告集』　第二期　第 3 巻　38～40 頁

加賀山隼人正興良の陵墓および香春町中津原浦松地区について
加賀山隼人興良、加賀山半左衛門の墓
香春町中津原字浦松地区、愛宕大権現神社、照智院下（柿下温泉近く）
浦松川に掛かる庚神橋という小さな橋があり、そのほとりに、庚神塔をはさんで二つの石祠が祠られている。両方の祠（墓碑）とも名前、死去年月日が刻んでなく、左の祠（墓碑）の石の扉の右左には十字架が二つ、右の祠（墓碑）の石の扉の右左にはギリシャ十字‡が二つ、浮き彫りにされている。明らかにキリシタン墓碑であるが、持ち主は不明。
左の墓碑は加賀山半左衛門、右の墓碑は加賀山隼人興良の墓と考えられる。

加賀山氏画伝より
『少右ェ門祭、八月十七八九日』とあり、墓地は『豊前国田川郡香原町加々義山八幡付近に在り』と書かれている。

【推論】
香原町とは現在の香春町、加々義山とは現在の鏡山、八幡付近とは現在の中津原にある鶴岡八幡神社を指しているので、中津原字浦松地区方面を指していると解釈できる。位置関係からして香春町から採銅所は北の方角。中津原浦松地区は東の方角にある。
加賀山隼人、加賀山半左衛門の墓のある浦松地区は両側から山の稜線が落ち込んでいる山間の狭いＶ字の地形になった土地であり、西の稜線に沿って浦松川と呼ばれている幅 1m 位の小川が山上の湧水口から流れている。現在も 10 家ばかりが集落を作っている。
小笠原玄也時代の 1614 年当時、この浦松地区は、香春町から人里離れていて農家もほとんど無く、山間の狭い入口に見張りを置けば、出入りを簡単に監視できる場所であり、山頂には愛宕神社と慶長年間に焼失したが 1614 年頃に再建された照智院があり、僧永椿が細川忠興に命じられて寺禄 50 石を賜り、営繕をしながら山上から小笠原玄也一家の監視をしていたと思われる。上からも下からも監視が可能な地形である。
おそらく、小笠原玄也一家は 1614 年秋頃、小倉城二の丸の加賀山隼人興良宅を追放されてから直ぐに 1632 年 12 月までの 18 年間をこの浦松地区に監禁されていたと思われる。
小笠原玄也たちが浦松に監禁されたことは、採銅所の不可思議寺の初代住職、宗慶（行木善兵衛）には知らされなかった。暗殺【毒殺】する宗慶にキリシタンである小笠原玄也の監禁を知らせる必要はない。なぜなら、同年 12 月に宗慶は病気になり、次の年 1615 年 4 月 4 日に死去している。6 月 6 日、京都で細川興秋が切腹。秘密裏に採銅所の不可思議寺に連れてきて、興秋は法名を宗順と名乗り、不可思議寺第二世住職に収まっている。1619 年 10 月 15 日、小倉で加賀山隼人興良処刑、同日、豊後日出で加賀山半左衛門処刑。
細川忠興はキリシタンを棄教しない小笠原玄也・みや夫妻に、見せしめのために処刑した加賀山隼人興良、半左衛門の遺体を送りつけた。玄也はこの浦松に監禁されていたので、この地に父・加賀山隼人興良、加賀山半左衛門と息子ディエゴを埋葬した。

キリシタン研究に於ける法医学的検証の必要性
1619 年 10 月 15 日の処刑以後、加賀山隼人興良の骨の一部は殉教者の大事な聖遺骨として密かにマカオに持ち出され、日本の 59 名の殉教者としてマカオのコロアネ島、聖パウロ大聖堂に保管されていたが、最近になって長崎 26 聖人記念館に返還された。26 聖人記念館に保管されている加賀山隼人興良の骨と、香春町中津原浦松の墓地に埋葬されている遺骨の鑑定結果が一致すればこの墓が加賀山隼人興良の墓と断定出来る。不遜のようだが墓を掘り起こして埋葬されている遺骨を調査して性別、年齢の特定、人種の特定（外国人宣教師なのか日本人か）、DNA 鑑定、血液型鑑定、及び死亡原因の特定、殉教の際、斬首なのか、十字架刑なのか、火炙りの刑に処せられたのか、あるいは病死なのかの特定等、将来に於いてキリシタン研究の中に法医学的検証を導入する必要性が在ると考えている。
マカオに眠る原マルチノ、ヴァリニャーノ神父、メスキータ神父、長崎、伊木力の千々石ミゲル、飫肥の伊東マンショ、伊東義賢、祐勝兄弟の毒殺説を確かめるためにも法医学検証導

入の必要性がある。
＊　マカオに眠るキリシタン殉教者　小田善三郎著　非売品
＊　シャレコウベが語る　第 7 章　マカオのキリシタン殉教者　163～178 頁
　　松下孝幸著　長崎新聞社新書

【愛宕山照智院】　愛宕神社の創建年代・仁平 3 年（1153 年）
慶長年間（1596～1614 年）火災にあい一山焼失の悲運にあった。しかし、時の太守細川忠興が深く憂い、1614 頃に僧永椿に命じて再興に当たらせ、寺録 50 石を賜り営繕の費に充てられた。＊　香春町町史　下巻　721 頁

『細川氏が豊前を領有していた頃、東谷町呼野金山を開発している。この金山を掘る時、南蛮の採鉱技術を取り入れた。それは恰（あたか）も、伊豆の銀山や佐渡の金山を開いた時, バテレン（伴天連）にこれらの鉱山を見せ指導を受けた幕府の態度に良く似ている。南蛮人、即ちポルトガル人が、この地に来て指導した時その居住地を唐人小屋とよんで、呼野の旧家、長門橋橋本家所蔵の旧地図にのっている。作秋 11 月 1 日、私は橋本さんに案内されて唐人小屋の現地を見に出かけた。今は日本セメント工場の敷地となって、原形をしのぶことは困難になっているが、当時の金山坑のあと、排水溝など、微かに遺っている。この南蛮人が、日曜毎に集まった教会堂はどこにあったのか。私はこの疑問を抱いて、帰途についたが、呼野に程遠くないところに切支丹宗の寺があったに違いないと思っている。』
『禁教政策が益々厳しくなるにつれ、信者達は山間僻諏の地を求めて逃げ隠れた。信者達が最も安住の隠れ場所として選んだのは山間の鉱山町であった。山間にして鉱山町の呼野も、かつてはキリシタン宗徒の隠れ場所となったのではあるまいか。呼野から大野山脈の鞍部を越えると銅山で名のあった、頂吉（かぐめよし）に出るが、この地名がどうして起こったのであろうか。私は山間の鉱山町であったこの地が、かくれよしと言うことに基づいたのでは有るまいかと思っている。即ち隠れ場町として適住の地から出来た地名ではあるまいかと思う。私の村、即ち田川郡採銅所村は、村名が示す如く、採銅業から起こった村であるが、切支丹宗の圧迫が激しくなった頃、この山間の鉱山町が、宗徒にとって、安全な避難所とせられた時代はあるまいか。その遺跡はどこかに埋もれてはいまいかと、わが村の歴史を振り返って省察している。』
『細川家の記録、新撰御家譜の原本に、忠興は慶長 19 年（1614 年）江戸から在国の重臣に書状を送って切支丹宗の取締まりを厳重にするように督励しているが、中にも企救郡は信者も多く宗門も盛んであるから、特に重臣の筆頭たる長岡右馬介が奉行となって転宗するように奨めて欲しいと下命している。平戸藩から流れ込んだ信者、これが平尾あたりに隠れていたと仮定が出来るなら、ポルトガル人の居た呼野、この両面と結ぶ教会堂の位置は新道寺あたりになる。新道寺は切支丹宗の伝道初期に於ける切支丹寺の別名とすると新道寺、即

ちキリシタン寺から起こった地名ではあるまいかと思う。・・・しいて私の推定を言えば新道寺の丸山に所在している真宗法円寺がその候補に上がってくる。・・・法円寺の位置が平尾台と呼野を結び更に大野山脈を越えて中谷町道原方面に通ずる交通の中心にあることは見逃し難い殿堂建設の適地である。』92～93 頁
＊小倉のきりしたん遺跡　木島甚久　記録第一集　小倉郷土会刊

呼野村
現・北九州市小倉南区呼野
頂吉村（かぐめよし）の南東、紫川支流の東谷川の最上流に立地する。秋月街道（香春街道）が通り、南に竜ヶ鼻・金辺峠などがある。秋月街道筋の徳力宿と香春宿（現香春町）を結ぶ中間地点で人馬継立をする本宿が置かれた。（小倉藩政時状記・県資料五）
竜ヶ鼻は小倉藩の留山で、毎年一月末、犬通しと称して鳥見役・殺生方が猪（いのしし）狩などを行った。（小倉藩政時状記）金辺峠は急坂で、峠にさしかかるオンジャク坂に一里塚があった。一六二二年（元和八年）人畜改帳に呼野村とみえ、高三三九石余、家数六九、総数二〇一人、（うち百姓三五人、坊主二人、ざるかたけ商人七人）牛一四、馬二三、と記載されている。

呼野金山
現・北九州市小倉南区呼野
一五九七年（慶長二年）十一月、利久は木船大明神のお告げに従って、呼野に住居を構えた。ところが、同年末『異人』がきて、この辺は黄金が出る地相であることを指摘したので、同人を伴って山野を探索したところ、『横ずり』という所は最大の地で、『黄金の出ること泉のごと』き状態であった。早速、藩主細川忠興に注進し、『原木金太夫』を金山奉行として、多数の役人が派遣された。
『企救郡誌』所収の『古海家系図・与三右衛門利久』の頁の伝記による

金山発見の経緯を見ると、宣教師が連れてきた鉱山技師とその下で技術を学んだキリシタン技術者および労働者達集団の手で試掘が行われていることが推測される。

幕府が派遣した隠密の記録、一六二七年（寛永四年）成立の『筑前筑後肥前肥後探索書』によると、一六二一年（元和七年）頃に当地で金山採掘が行われ、元和八年三月から元和九年十二月までの金採取に対する運上金として、砂金二貫六九四匁余を上納（砂金進上・永青文庫）。元和九年、金山用炭・金堀道具のことや金山南口屋番人の交替などが見られる。
（御用覚書帳・永青文庫）元和十年、金山奉行を設置。一六二四年（寛永四年）「金山之家三百程」があり、最盛期には五、六千人の採掘夫が従事していた。（探索書による）
当時の採掘法は、「ためしゆり」（土砂を水でゆすり漉す・企救郡誌）露天掘り（探索書）

間府堀りなどであった。

採銅所

現・福岡県田川郡香春町採銅所

平安時代からみえる銅鉱採掘施設。のちに施設名が地名に転訛して、江戸時代の採銅所村に継承された。『豊前国風土記』逸文（宇佐宮託宣集）には、田河郡鹿春郷（かわらごう）の北の峰（香春岳）のうち、第二の峰は、銅・黄楊・龍骨などを産すると記されている。鹿春郷は現採銅所のすぐ南西に比定され、奈良時代すでにこの地は銅を産出していた。

同逸文には新羅国神が渡来して鹿春神になったとあり、大宝二年（702 年）の豊前国関係の戸籍（正倉院文書・古編一）には、渡来人系の姓の住民が多くみえるので、銅の採掘・精錬にも渡来系の技術が用いられたと推測される。

奈良東大寺大仏鋳造で当時の採銅所の技術集団が都に上り、貢献した記録が残されている。

金山としての採銅所は、1622 年（元和八）呼野（現北九州市小倉南区）での、金の発見に始まった。初めは川の砂金を採取しており、他国からも採取者が集まり、採取の札請者は多い時には 1500 人を数えた。金辺峠（きべ）を境に、北は呼野、南は採銅所、同じ山塊の金の鉱脈になる。

採銅所村

下香春村の北に位置する南北に細長い村。北端の金辺峠（きべ）は企救郡（きく）との境をなし、その南麓を水源とする金辺川が南流、集落はその流域と東西の山地の谷間に作られている。1622 年（元和八）人畜改帳では高 1992 石余の『採銅所村』と無高の『採銅所町』の二筆に分けて記されている。

採銅所村は家数 190・人数 218 人、うち百姓 29 人・名子 24 人、牛 31・馬 22。

採銅所町は家数 116・人数 267 人、うち町人 58 人・名子　9 人、牛 12・馬 35。

1627 年（寛永四）頃、採銅所町は、秋月街道（香春街道）の宿場町になっていた。

採銅所にある 2 つの寺

真宗大谷派・不可思議寺、　　1610 年（慶長十五）創立。（後の明善寺）

浄土宗・来迎寺（らいこうじ）、 1628 年（寛永五）創立。

＊『福岡県の地名』　1288～1289 頁　日本歴史地名体系　41　平凡社

【推論】

小笠原玄也・みや一家と関わりのある寺は、玄也達が香春町中津原浦松地区に監禁された 1614 年から 1632 年 12 月熊本移封までの年代から考察すると真宗大谷派・不可思議寺（後の明善寺）と考えられる。

『イエズス会 1618 年年報』に書かれている徳の高い仏僧（採銅所不可思議寺第 2 世住職、宗順・細川興秋）は、宗派を超えた愛と理解を示し、訪ねてきた中浦ジュリアン神父を逮捕

の危機から救って保護し匿っている。
『泊めてくれた仏僧【住職宗順・興秋 33 歳】の助けがなかったならば発見され捕らえられるところであった。この仏僧は信仰の敵であり、神父【中浦ジュリアン 50 歳】が何者であるか知っていたにもかかわらず、徳の高い人であったから、その客が発見され捕らえられることがないようにしてくれた。』
1618 年年報（元和四）イエズス会年報　クリストファン・フェレイラ神父報告
＊『天正少年使節の中浦ジュリアン』　結城了悟著　101～102 頁

1619 年（元和 5）？月
三宅藤兵衛（興秋の従兄弟）　天草郡に知行 700 石を受ける。

1620 年（元和 6）？月
中浦ジュリアン神父【52 歳】、採銅所不可思議寺に第 2 世住職『宗順』細川興秋【35 歳】を訪問する。小笠原玄也を香春町中津原浦松地区に訪問する。
＊　イエズス会 1620 年年報の記録による

『【細川興秋 35 歳は】かつては富といい、権威といい、大名のごとき身分で、衣服にせよ、供廻りにせよ、容貌にせよ、人々に目を向けしめしものなるが、今や綴れて垢づき破れ下がったぼろをまとい、下層の職人、貧しい農民の中に混じり、最下級の奴隷か賤民階級の一人でもあるかの如く、自ら身を下ろして衣食を求め、いかなる賤務も厭わぬのである。我が会の神父【中浦ジュリアン神父】はこの人【細川興秋】が故里にあって豊富な生活をするよりも、むしろ追放の身分となり、苛酷な運命に弄ばれるのを優れたりとするほど熱心に宗教を守ろうと、堅い決心をしているのを見出した。』
1620 年年報（元和六）イエズス会年報　ロドリゲス・ジーラム神父報告
＊『16・17 世紀イエズス会日本報告集』　第二期　第 3 巻　95～96 頁　筑後・豊後国

池田家文書より
12 月 25 日　　忠興【58 歳】 剃髪して中津城に移り隠居、三斎宗立と号する。
　　興秋【35 歳】忠興の号するに従い宗専と奉申する。
　　忠利【34 歳】藩主となり中津城から小倉城に移る。
【推論】
1620 年（元和六）12 月 25 日
細川忠興【58 歳】は剃髪して隠居、三斎宗立と号して中津城に移り、細川忠利【34 歳】が父忠興に代わりに豊前の領主になって小倉城に居住する。
1620 年 12 月、豊前藩主は忠興【58 歳】から忠利【34 歳】に代わっていて、忠利（興秋の弟）は父忠興とは違い、キリシタンに対しては理解を示し寛容な態度で臨んでいることも見

逃せない事実である。この頃からキリシタン迫害は収まり、以後 1632 年（寛永九）12 月の肥後熊本移封まで豊前に於いて殉教者は少ない。表面的には平安を装っているこの時期をキリシタン達は潜伏しながら信仰を保ち続けている。1611 年（慶長十六）12 月、セスペデス神父の死去とともに忠興の命令により破壊された豊前の教会に代わり、伊東マンショ神父により再組織された信徒組織コンフラリアが、以後信徒達の大事な信仰維持の役割を担っていった。
池田家文書には『興秋【35 歳】父忠興の号するに従い宗専と奉申する』となっているが、採銅所の不可思議寺文書【明善寺文書】では法名変更は不明。興秋に関する記録が細川藩の肥後移封の際に興秋もろとも全て持ち去られているために調査不可能。
したがって、興秋は宗順の名前のまま、1632 年（寛永九）12 月に採銅所不可思議寺を去ったのか、1620 年 12 月に宗順から宗専と改名したのかは不明。
ただイエズス会のロドリゲス・ジーラム神父の 1620 年の報告には　『【細川興秋 35 歳は】かつては富といい、権威といい、大名のごとき身分で、衣服にせよ、供廻りにせよ、容貌にせよ、人々に目を向けしめしものなるが、今や綴れて垢づき破れ下がったぼろをまとい、下層の職人、貧しい農民の中に混じり、最下級の奴隷か賤民階級の一人でもあるかの如く、自ら身を下ろして衣食を求め、いかなる賤務も厭わぬのである。我が会の神父【中浦ジュリアン神父】はこの人【細川興秋】が故里にあって豊富な生活をするよりも、むしろ追放の身分となり、苛酷な運命に弄ばれるのを優れたりとするほど熱心に宗教を守ろうと、堅い決心をしているのを見出した。』とあり、興秋の熱心に宗教を守ろうとの堅い決心ゆえに、名前を宗順から宗専に改名したと受け取ることも可能かと推測できる。
興秋の主任司祭であった中浦ジュリアン神父が次の年 1621 年 12 月 21 日に加津佐に於いて終誓願を書いて堅信を新たにしている。中浦ジュリアン神父の影響も興秋の信仰に於いては大きいと思われる。

1621 年(元和 7）12 月 21 日
中浦ジュリアン神父【53 歳】終誓願を加津佐に於いて書く。
【原文書は、長崎 26 聖人記念館で閲覧することができる】
＊『天正少年使節の中浦ジュリアン』　結城了悟著　107～109 頁　参照

1623 年（元和 9）？月
忠興の側室、小山りん、中津に於いて病没。忠興、小山りんのために西光寺を中津に建立する。忠興【61 歳】

8 月 28 日　徳川幕府が大阪籠城した浪人を赦免、召し抱えの許可を出す。
？月　　米田監物是季、細川忠興の招きにより帰参。2000 石を賜る。
【推論】

8 月 28 日　徳川幕府が大坂の陣のとき豊臣方に加担した全ての武士・浪人に対して赦免、恩赦を与えた。これによりどの様な人物でも召抱えることが出来ることになった。
細川忠興は、京都坂本の西京寺に蟄居させていた米田監物是季【39 歳】を 2000 石という破格の待遇で持って召抱えている。米田監物是季の招聘は、1606 年 7 月 27 日、興秋の重臣、飯河父子誅罰以後、京都に於いて興秋の警護を秘密裏にしてきたこと、大坂の陣に興秋とともに豊臣方に参加して興秋を警護したこと、大坂城陥落の時、混乱の中興秋を城から無事連れ出して細川方へ届けたことへの褒美と考えられる。

1624 年(寛永元)　？月
中浦ジュリアン神父【56 歳】、筑前博多秋月、豊前小倉、中津を訪問。脳卒中により歩行困難となり信徒達に籠で運ばれる。

【推論】
『中浦ジュリアン神父は当時、筑前と豊前を訪問中であった。彼は困難辛苦のためにすっかり衰え、身動きも不自由で、たびたび場所を変えるのに人の腕を借りる有様であった』
＊　イエズス会報告 1624 年年報の記録による　『日本切支丹宗門史』　中巻　338 頁

中浦ジュリアン神父【56 歳】は 1624 年の筑前・豊前訪問時点で脳卒中による不自由な生活を余儀なくされている。筑前と豊前の訪問中に脳卒中になり、自力による長い距離の移動が困難になり移動の際には信者達の手を借りて籠に乗って次の訪問地に移動している。この時の訪問で興秋【39 歳】が住職をしている香春町採銅所の不可思議寺に身を寄せたのかどうかは明確ではないが静養のためにしばらくの間滞在したのではないかと推測される。ジャンノネ神父が 1625 年の書簡において中浦ジュリアン神父の消息を記録しているので、島原の口之津に一度は戻って静養しながら神父としての最小限の活動を続けていた。『この地区の私達の院長ファン・バウティスタ・ソーラは、皆を満足させて任務を果たしています。この高来にいる他の伴侶たちは皆健康ですが、老齢で弱わっている者【中浦ジュリアン神父・56 歳】もいます。ですから私達の活動ぶりが大分衰えていきます。』
＊　イエズス会報告 162５年年報の記録による
『天正少年使節の中浦ジュリアン』　結城了悟著　113 頁
1625 年 1626 年以後のイエズス会の報告書に中浦ジュリアン神父の活動報告は見出せない。

1625 年（寛永 2）？月　米田監物是季【41 歳】、6500 石に加増され、家老職を命じられる。
1626 年（寛永 3）？月頃
島原の宣教師団は迫害のため壊滅する。中浦ジュリアン神父【58 歳】は島原口之津より豊前小倉地方に移る。
中浦ジュリアン神父の動向不明の空白の 6 年間

香春町採銅所の不可思議寺

【推論】

1624 年筑前豊前訪問のとき脳卒中を患った中浦ジュリアン神父【56 歳】は、数年後の 1626～27 年頃、島原口之津より豊前地方に移って来た。しかし中浦ジュリアン神父【59 歳】は脳卒中ため体調が依然として思わしくなく活動も最小限に限られていたと推測される。それ故に中浦ジュリアン神父は最も安全な隠れ場所である細川興秋【42 歳】の隠蔽先である豊前国田川郡香春町採銅所の不可思議寺【キリシタン寺】に大胆にも身を寄せたのではないだろうか。興秋にとっても中浦ジュリアン神父は信仰を維持するうえで必要な司祭だし、中浦ジュリアン神父にとっても興秋に匿ってもらうことで、身の安全と静養治療を保障されながら、田川地方約 3000 人のキリシタン信徒達の世話をする拠点を持つことができる。互いの利点に於ける相互扶助の関係が出来上がることを考えると、中浦ジュリアン神父が最も身を隠すのに適している場所が、興秋の匿われている香春町採銅所の不可思議寺と考えても差し支えないと思われる。どんな迫害の最中でも、終誓願でさえ場所と日付を明確にしてイエズス会に報告していた中浦ジュリアン神父が、1627 年を境に 1632 年 12 月の小倉での逮捕までの 6 年間報告書を書いていない。

キリシタン史の中で中浦ジュリアン神父の動向不明の空白の 6 年間、報告書を書いていないこととその理由とが大きな謎だった。

中浦ジュリアン神父の**脳卒中説**も原因のひとつと考えられる。1624 年のイエズス会報告には『中浦ジュリアン神父は当時、筑前と豊前を訪問中であった。彼は困難辛苦のためにすっかり衰え、身動きも不自由で、たびたび場所を変えるのに人の腕を借りる有様であった』とあり体調に重大な問題を抱えていたことが報告されている。脳卒中により半身不随、あるいは部分的に麻痺障害が残り筆記することが困難な状況だったと推測される。6 年間の動向の空白が如実に中浦ジュリン神父の脳卒中説を示唆していると考えられる。またこれまでの考察から、もしも、中浦ジュリアン神父と興秋の隠蔽に関係するイエズス会宛の報告書が幕府の手に落ちて検閲された場合、厳しい詮索の結果、必ず隠蔽されている興秋に辿り着くと思われ、そうなれば細川藩に隠蔽されている興秋だけでなく小笠原玄也一家、田川周辺のキリシタン組織、それらを見ぬ振りをしている細川藩自体にまで累が及ぶことが明白である以上、中浦ジュリアン神父はこれら隠蔽に関する事実をイエズス会宛の報告書として書くことができなかったと推測される。

中浦ジュリアン神父【59 歳】が島原から豊前に移動した 1626～27 年、採銅所の不可思議寺の住職は宗順（興秋）【42 歳】であり、興秋の判断で中浦ジュリアン神父を不可思議寺に匿ったと思われる。興秋が中浦ジュリアン神父を密かに匿っていることを知った父忠興【65 歳】は烈火のごとく怒ったであろうが、興秋隠蔽それ自体が細川藩最高機密である以上、下手に騒ぎ立てて幕府に機密が露見したら細川藩自体取り潰しになりかねない危険性を孕んでいるために、興秋にこの中浦ジュリアン神父の隠蔽を逆手に取られては忠興といえどもうかつには手出しはできない問題であった。忠興にとっては中浦ジュリアン神父の不可思

議寺寄宿の件は忌々しい限りの問題であったであろう事は容易に理解できる。
また豊前地方に於いてはキリシタンの組織が確固と構築されていた。中浦ジュリアン神父を匿う組織とは、都市部に於ける武士・商人を中心とした都市型信徒組織コンフラリア、農村地方に於ける庄屋を頂点とした農民達で構成する農村型信徒組織コンフラリア、被差別民で構成する被差別部落型信徒組織コンフラリアに大別される。中浦ジュリアン神父と同宿トマス・リョウカン（良寛）は信徒達の求めに応じて、宣教活動の時は定住することなくこれら三つの信徒組織間を渡り歩いていたと推測される。

筑後秋月の長生寺
中浦ジュリアン神父の隠れ家のもうひとつの選択肢として、筑後の秋月、甘木、今村が考えられる。1613 年に筑前博多教会、それに属する筑後柳川の教会、秋月、甘木のレジデンシアが閉鎖破壊されるまで、中浦ジュリアン神父はその地方の主任司祭・責任者だった。

『筑後におけるこの神父（中浦ジュリアン）の隠れ家が、どこであったか判明しない。筑後、筑前の国境に位置している、太刀洗の辺りではないかとも推測される。言うまでも無く、探索の手を逃れるために、そうした隠れ場はしばしば変えられたに違いない。ここには神父の名もあげられていないが、それが中浦ジュリアン神父であったことは疑いが無い。1632 年に豊前の小倉で逮捕されるまで、彼は前記の三カ国、ひいてはその他の隣国を歩き回ってキリシタンの世話をし続けた。しかし、彼が逮捕され、翌年に殉教した後、筑前、筑後の教会は分厚い暗黒に包まれてしまった。』
＊『秋月のキリシタン』　H,チースリク著　110~114 頁，185 頁

H,チースリク神父のこの説は、中浦ジュリアン神父の筑前博多、筑後柳川、秋月、甘木、今村でのそれまでの活躍を基に考察されていて正しい。また 1617 年コーロス徴収文書にも筑後 63 名の信徒代表の名前が挙げられていて、明治初めの隠れキリシタンに関する『邪宗門一件口書帳』1868 年（明治元）に摘発を受けた地域と人数として、今村 500 人、上高橋村 157 人、小島村 60 人、平田村 9 人，両本郷村 108 人、高桶村 4 人、本郷枝村 9 人，菅野村 4 人，徳次村 9 人、友光村 8 人、以上 868 人。1869 年（明治 2）御原郡・御井郡の町村記録に、鵜木村 13 人、下高橋村 25 人、三沢村 8 人、松崎町 9 人、恋の段村 1 人、以上 56 人、合計 924 人。
摘発された地域と人数から証明される明治までの 250 年に渡る強固なキリシタンコンフラリア・信徒組織の潜伏と生き残りを考えれば、筑後国秋月、甘木、今村も中浦ジュリアン神父の隠れ家のひとつの選択肢として考えられる。秋月の長生寺には末次興膳善入の墓が裏山にあり大涼寺には黒田長政夫人の墓、、古心寺は黒田家の菩提寺で歴代藩主の墓地がある。この三つの寺の敷地自体、元々は末次興膳善入の土地であり、秋月のレジデンシア、秋月教会のあった場所である。三寺の創建の歴史と経緯、長生寺・末次興膳とキリシタンの関わり

と、大涼寺・古心寺と黒田藩との関わり等を考えると、この土地全体が大きな隠れキリシタン地区であったと考えられる。

長生寺

『長生寺調査表』から、
興膳善入 85 歳の時、1600 年（慶長 5 年 12 月 8 日）開宗、
善入示寂 124 歳、1639 年（寛永 16 年）。
初代長生寺住職開山，玖天禅良 1652 年（承応元年 8 月 12 日寂）。
第二世住職、風元盛順 1664 年（寛文 4 年 6 月 16 日寂）。
第三世住職、大園白道 1691 年（元禄 4 年 8 月 17 日寂）。
中浦ジュリアンが秋月で活動していた時代は、1600 年～1632 年 12 月の小倉での逮捕、1633 年 10 月 21 日、長崎西坂での殉教。まさに興膳善入が長生寺で生きていた時期（1600 年～1639 年）に相当するので、当然、信心深い興膳善入は宣教活動のために秋月長生寺を訪ねて来た中浦ジュリアン神父を保護し匿ったであろう。長生寺、大涼寺、黒田家菩提寺・古心寺が隠れキリシタン寺として果たしていた役割は非常に大きいと考えられる。善入が長生寺を作った時の住職であった玖天禅良も 1652 年（承応元）まで生きていて、確実に隠れキリシタン寺としての機能を維持していたと考えられる。第二世住職風元盛順 1664 年頃までは確実に、第三世住職大園白道あたりまでは隠れキリシタン寺としての役割を担っていたのではないだろうか？

末次興膳善入の即身仏の謎

長生寺に伝わる興膳善入が生きながら即身仏になった話は本当だろうか？
イエズス会報告書に出てくる善入に関する記録等から考えても、即身仏になるなど、善入らしからぬ信じられない行動だし、善入は当時のキリシタン教会の会計を一手に引き受けていて、堺、博多、長崎での貿易で巨万の富を築いて教会の全てを金銭面で支えていた善良なキリシタンであり、イエズス会の会計を一手に引き受けていた熱心なキリシタンである善入が、キリスト教の教えに反する自殺である即身仏になるという矛盾した行動を取ることはありえないと思える。推測であるが、キリシタンとして天寿を全うした善入は、長生寺を隠れキリシタンの寺として存続させるために、自分が即身仏になったとの噂を流すことで、長生寺が信仰熱き仏寺と人々に思わせるために仕組んだのではないかと思われる。
昭和 36 年，興膳家の人々が興膳善入の墓を掘り返した。興膳善入の墓には善入の生前使用していた色々な物が遺体と共に納められていたので、興膳家の人々は記念にそれぞれ納められていた物を持ち帰った。その時興膳善入の遺体は即身仏ではなく遺骨のみがあった。墓から掘り出された興膳善入の使用していた茶碗が京都の古物商に売られていたのを遺族が買い戻して現在は長生寺に納めている。その茶碗の底には興膳家の印が入っている。

興膳善入の墓のある長生寺の裏山は、今は雑木林に覆われて見晴らしが悪いが、当時は善入の墓の在る高台から、正面に秋月教会・レジデンシアがあった土地が望める場所であり、善入は死後も教会が望める場所を墓に選んだと思われるとのこと。
（加峰満秋月郷土館館長談）

大涼寺
長生寺の北隣、同じ敷地内に隣接する寺。大涼寺も興膳善入の土地に建てられたキリシタン寺であり、興膳善入（1639 年没）も生きていた時代であり、大涼寺の裏に自分の墓を建てた黒田長政夫人も 1635 年までは生きているので、キリシタンに対しては寛容な態度で許容していたと思われる。当然、黒田長政夫人も信心深い興膳善入も秋月の元主任司祭である中浦ジュリアン神父を保護し匿ったであろう。大涼寺が長生寺と共に隠れキリシタン寺として果たしていた役割は非常に大きいと考えられる。中浦ジュリアンの殉教が 1633 年 10 月なので、その当時までは大涼寺も十分に隠れキリシタン寺として長生寺と共に機能していたと推察できる。大涼寺に関しては、黒田長政夫人が寛永 12 年（1635 年）に死去しているので、長政夫人死後も大涼寺は長生寺とともに隠れキリシタン寺として機能を果たしていたと考える方が妥当と思える。しかし、大涼寺に残されていた古文書は明治元年（1868 年）の廃仏毀釈の折に焼却したとの事。真相はつかめなかった。
筑後秋月、甘木、今村は豊前香春町採銅所不可思議寺から徒歩でも僅か 2 日の距離にある。
＊『秋月のキリシタン』H,チースリク著　キリシタン研究 37 号　教文館
＊『邪宗門一件口書帳』久留米郷土研究誌第 6 号、7 号
＊『筑後国御原郡今村の復活切支丹』キリシタン研究第 18 号、海老沢有道著
＊『長生寺調査表』

【推論】
また細川藩の実権は 6 年前の 1620 年 12 月、豊前藩主は忠興【58 歳】から忠利【34 歳】に代わっていて、忠利（興秋の弟）は父忠興とは違い、キリシタンに対しては理解を示し寛容な態度で臨んでいることも見逃せない事実である。
『豊前の領主は、長岡越中殿の子（細川忠利）で、その父とは大いに違い宣教師に対して非常に心を寄せ、母ガラシャの思い出を忘れないでいることを示した。』
＊1624 年イエズス会日本年報の記録　『日本切支丹宗門史』中巻　338 頁

藩主忠利はキリシタンである兄興秋を庇い、採銅所不可思議寺での中浦ジュリアン神父の隠蔽に関しても目をつむって見ない振りをしたのであろう。教会側もイエズス会年報報告には書けない出来事、細川藩も記録に残せない隠蔽問題、だからこそ両者が何も語らない 6 年ではないかと考えられる。

1628 年（寛永 5）　　米田監物是季、大阪城修築の責任者として大役を果たす。

1629 年（寛永 6）？月
三宅藤兵衛（興秋の従兄弟）志岐の代官兼天草群島の奉行になる。志岐、大江、崎津などでキリシタンを迫害する。
＊『日本切支丹宗門史』下巻 131～133 頁　レオン・パジェス著

6 月　6 日　　興秋の娘・鍋姫【18 歳】南条大膳元信へ嫁ぐ。化粧料五百石。
1690 年（元禄 2）6 月 13 日没 79 歳　法名　香雲院梅室理清

1632 年(寛永 9)12 月　9 日
豊前細川藩、細川忠利【46 歳】の肥後熊本への移封、熊本入。忠利、肥後入国に際、南関・山鹿に宿泊している。
＊　寛永 9 年（1632）11 月 24 日之触状　『綿考輯録』第四巻　296~317 頁

12 月　？日
豊前の新藩主小笠原忠真により小倉に於いて中浦ジュリアン神父【64 歳】、同宿トマス・リョウカン逮捕される。

【推論】
1632 年 12 月 6 日、忠利は肥後熊本に移封のため秋月街道を南下、香春町採銅所にて興秋【47 歳】（と小笠原玄也の家族）は米田監物是季【48 歳】の部隊に紛れ込むようにして香春町採銅所の不可思議寺を出て山鹿まで移動、9 日夜半に山鹿を出立した部隊と別れて、興秋は山鹿から山鹿郡鹿本町庄村の泉福寺（真宗大谷派・山鹿金剛乗寺の末寺）に向かい泉福寺住職として隠棲したと考えられる。住職の名前は不可思議寺のときに名乗っていた宗順なのか、あるいは天草の池田家文書に書いてある宗専と名乗ったのかは不明。
小笠原玄也の家族はそのまま熊本の塩屋町へ入ったと思われる。

細川興秋の思い
興秋にとっては、中浦ジュリアン神父は信仰生活を維持するうえで欠かせない人物であったが、不可思議寺の財産を肥後熊本に移すには米田監物の部隊の運搬力に頼らざるを得ない立場にあり、中浦ジュリアン神父を同行させた場合、途中で殺害される恐れがあるので、一旦小倉の信用できる信徒組織の宿主に預け、山鹿郡鹿本町庄村の泉福寺に落ち着いてから、改めて肥後熊本へ呼ぶつもりであったと思われる。

細川忠興の思い

細川忠興【70 歳】は興秋によって不可思議寺に匿われていた中浦ジュリアン神父【64 歳】と同宿トマス・リョウカンの同行を絶対に許さなかったと考えられる。行き場を失った中浦ジュリアン神父、同宿トマス・リョウカンは小倉のキリシタン信徒代表を頼り潜伏していたが、新しく赴任してきた豊前藩主・小笠原忠真により小倉に於いて逮捕された。おそらく忠興の指示で細川藩が後任の小笠原藩に内通して逮捕させたと推測される。なぜなら小倉着任早々、街の状態さえ把握できていない小笠原忠真が潜伏しているキリシタンを探し出すことなど不可能に近いことであった。忠興、忠利にとって中浦ジュリアン神父が興秋を頼って肥後熊本にまで来られては今度こそ細川藩の存亡に係わるから、移封を機に切り捨てたと推測される。小笠原玄也一家の隠蔽問題でさえ細川藩の取り潰しになりかねないのに、忠興、忠利にとっては間接的といえどもキリシタン聖職者中浦ジュリアン神父を匿っていたなど、幕府の手前あってはならないことであった。

1633 年 5 月 27 日付けの手紙の中で忠興【71 歳】は幕府の禁教の動向は厳しいことを忠告して、忠利【4７歳】のキリシタン政策が生温いと叱責している。
＊『忠興、忠利宛書状・部分御旧記』類族部 1 巻 76

おそらくこの手紙の叱責の真意は興秋が中浦ジュリアン神父を採銅所不可思議寺に匿っていたことを知りながら忠利が黙認して何も手を打たなかったこと、忠利のキリシタン政策の優柔不断さが細川藩の取り潰しにまで発展しかねない危機を含んでいることに対する警告だった。忠利は肥後熊本移封後、ただちにキリシタン取締りを強化している。加藤氏改易後の大国肥後 54 万石を拝領した細川氏は徳川幕府への忠誠を示すために肥後国内でのキリスト教禁制への徹底を図ることで 1634 年から 1635 年に禁教政策と迫害は厳しさを増し続けた。

【推論】
小笠原玄也一家は 1632 年 12 月 9 日に熊本に着いて塩屋町の寺社奉行田中兵庫の屋敷に軟禁され、年を越して 1633 年（寛永十）3 月頃までに、山鹿郡庄村泉福寺（住職は細川興秋）庄村周辺付近に移り住んだ。豊前国田川郡香春町中津原字浦松地区で営んでいたと同じく、農業を中心とした生活を新しい土地、山鹿郡鹿本町庄村付近で始めたと思われる。
玄也一家は 1633 年春頃から、逮捕され熊本に連行された 1635 年 11 月 4 日までの 3 年間しか庄村にはいなかった。
*この鹿本町庄地区、中富地区は、1600 年 9 月、関が原の戦いで敗れた小西行長の一族と家臣達が、宇土城下付近から、菊池氏との関係が特に深く中富村を知行していた国衆加悦氏との関係を頼り多く移り住んだ場所。小西一族は加藤氏との軋轢や宗教的弾圧を避けるために農民となり、キリシタン信仰を維持するため隠れキリシタンとなってこの中冨地区やこの付近に定住した。現在も中富地区にはキリシタン史蹟として、*小西行長供養塔、マリア

観音像、マリア像踏絵が残っている。*小西行長供養塔のある中富地区と細川興秋の隠棲していた庄村泉福寺とは約 5 ㌔の距離。*小西行長供養塔は、1600 年 9 月 15 日に石田三成の西軍に組みして関ヶ原の戦いで敗北し、同年 10 月 1 日京都六条川原で斬首処刑された小西行長を悼んで、キリシタンであった元家臣達及び在郷の信者達が、当時旭光山長福寺と称されていた観音堂の裏に、10 月 6 日に建立した供養塔であろうと考えられている。
高さ 1.25m,最大幅 56ｃｍの疑灰岩で逆三角形の板碑状石碑。『慶長五年　西岳院殿行長即得大居士　十月六日』と彫られている。さらに中富地区の下分田の墓地と小柳墓地には明らかに「隠れキリシタン」であることを示す墓石が多数残されていたが、近年整理破棄され僅かに数基ずつ残されていた墓石を鹿本町が保存、現在は山鹿市鹿本支所隣の鹿本交番裏に移設保存している。
また周囲地方には*上木庭（菊池市木庭　上木庭）のキリシタン墓地、*津留（旭志町小原津留）のキリシタン墓地、*亀尾（菊池市七城町亀尾字北杉田）のキリシタン灯籠、*福本（泗水町福本　泗水町総合支所横）のカマボコ型キリシタン墓碑、*伊倉北方（玉名市伊倉北方）のカマボコ型キリシタン墓碑、（口伝ではイルマン・ドワルテ・ダ・シルバの墓と伝えられ、近くの中山家にはシルバの髪の毛が保管されている。別名「バテレンの頭髪」
東野利夫氏が借り受けて九州大学法医学部・永田教授に依頼した鑑定の結果では約 400～500 年前の西欧人・白人の頭髪で色は黒髪、血液型 B 型との鑑定結果が報告されている。
中山家に伝わる「山姥の髪」別名「バテレンの頭髪」は、現在玉名市立歴史博物館こころピアに寄託されている）等、天草に次いで多くのキリシタン遺物を見ることが出来る。

山鹿地方の切支丹の実在を裏付ける史料として『古･転切支丹二期御断帳』が現存している。
史料は『肥後切支丹史・肥後藩切支丹系統』下巻　上妻博之著　エルピスに収録。
この地方の切支丹類族のうち最後まで生存したのは「山鹿郡新町売人転切支丹左太郎系」の、御宇田村百姓市平で、天保 3 年（1832）正月 17 日、71 歳で死去している。なお同系統の庄三郎は新町売人（商人）で、文化 14 年（1817）5 月 5 日、72 歳で死去している。
（肥後切支丹史　下巻　20 之帳　612 頁）

1632 年（寛永 9）12 月、細川忠利【46 歳】が肥後に移封されてきた。移封前の調査で細川忠利はキリシタンが天草と鹿本地区に多く居住していることを把握していて、特に鹿本地区の小西一族に対して寛大な処遇をしている。この時代背景があったからこそ、実兄興秋と小笠原玄也一家をキリシタンの多い鹿本地方の中富地区、庄地区付近に隠したと推測される。また米田監物是季【50 歳】が 1 万石を賜った背景に、興秋隠蔽先として山鹿郡鹿本町庄村に泉福寺を確保した褒美としての加増と考えられる。協力した金剛乗寺は 1633 年（寛永 10）1 月 7 日、細川家より寺内 6 反 18 歩の寄進を受けている。これは細川興秋の隠蔽に末寺泉福寺を差し出した見返りと推測される。
玄也の遺著 9 号の中の『慈悲頼みます』の言葉も、この地区で活動していた慈悲の組・ミゼ

リコルジアの存在と、信徒組織・コンフラリアの存在を裏付ける発言として捉えることができる。『熊本県未解放部落史研究』（第 1 集、第 2 集）によると鹿本郡鹿本町御宇田村付近に被差別部落（穢多非人部落）があり、被差別部落の外れにはハンセン病（癩病）患者収容施設があったことなどから考えると、これら貧しい被差別部落の人々やハンセン病患者のために玄也達、慈悲の組のキリシタン達が治療や施しの慈善活動をしていたと考えられる。

＊　鹿本町町史　第Ⅰ　加藤・小西時代　156～158 頁

＊　小西行長供養塔　鹿本町大字中川字永冨 1998 番地　長福寺跡（小材繁雄氏宅地）
　　鹿本町町史　421 頁【写真掲載参照】　庄村からは約 5 ㌔の距離

＊　下分田、小柳の切支丹墓碑　山鹿市鹿本支所隣接の鹿本交番裏に移設保存されている。

＊　上木庭のキリシタン墓地　　菊池市木庭　上木庭　菊池市の文化財　83 頁

＊　津留のキリシタン墓地　　旭志町小原津留　旭志の文化財

＊　亀尾のキリシタン灯籠　　菊池市七城町大字亀尾字北杉田

＊　福本のキリシタン墓碑　　泗水町福本　泗水町総合支所横

＊　菊池市・山鹿市に残されたキリシタンの足跡　カトリック山鹿教会　川本實編集

＊　伊倉北方のキリシタン墓碑　玉名市伊倉北方　玉名市の文化財

（口伝ではイルマン・ドワルテ・ダ・シルバの墓と伝えられ、近くの中山家にはシルバの髪の毛が保管されている。別名「バテレンの頭髪」東野利夫氏が借り受けて九州大学法医学部・永田教授に依頼した鑑定の結果では約 400～500 年前の西欧人・白人の頭髪で色は黒髪、血液型 B 型との鑑定結果が報告されている。中山家に伝わる「山姥の髪」別名「バテレンの頭髪」は、現在玉名市立歴史博物館こころピアに寄託されている）

＊　『南蛮医アルメイダ』　東野利夫著　柏書房

＊　シルバの死去　1564 年 10 月 14 日付　アイレス・サンシェス書簡志岐発
　　『16・17 世紀イエズス会日本報告集』第 3 期　第 3 巻　241～244 頁
　　『日本史　西九州編』フロイス著　Ⅰ、7 章 123～128 頁

＊　肥後国玉名郡の切支丹について
　　『肥後藩切支丹之系統細目　19 之帳』588～602 頁、20 之帳　603～619 頁
　　『肥後切支丹史』　下巻　上妻博之著　エルピス社

＊　『熊本県未解放部落史研究』（第 1 集、第 2 集）

『ひとりのらい病人が、イエスのとろこに願いにきて、ひざまずいて言った、「みこころでしたら、きよめていただけるのですが」。イエスは深くあわれみ、手を伸ばして彼にさわり、「そうしてあげよう、きよくなれ」と言われた。するとらい病が直ちに去って、その人はきよくなった。』

＊　マルコによる福音書　1 章　40～42 節　ルカによる福音書　5 章　12～13 節
　　マタイによる福音書　8 章　2～3 節,

『そのとき、王は右にいる人々に言うであろう。『わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ、かわいていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、裸であったときに着せ、病気のときに見舞い，獄にいたときに尋ねてくれたからである』。そのとき、正しい者たちは答えて言うであろう、『主よ、いつ、わたしたちは、あなたが空腹であるのを見て食物をめぐみ、かわいているのを見て飲ませましたか。いつあなたが旅人であるのを見て宿を貸し、裸なのを見て着せましたか。また、いつあなたが病気をし、獄にいるのを見て、あなたの所に参りましたか』。すると、王は答えて言うであろう、『あなたがたによく言っておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである』。それから左にいる人々にも言うであろう、『のろわれた者どもよ、わたしを離れて、悪魔とその使いたちのために用意されている永遠の火にはいってしまえ。あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせず，かわいていたときに飲ませず、旅人であったときに宿を貸さず、裸であったときに着せず、また病気のときや、獄にいたときに、わたしを尋ねてくれなかったからである。』そのとき、彼らもまた答えて言うであろう、『主よ、いつ、あなたが空腹であり、かわいておられ、旅人であり、裸であり、病気であり、獄におられたのを見て、わたしたちはお世話をしませんでしたか』。
そのとき、彼は答えて言うであろう、『あなたがたによく言ってお。これらの最も小さい者のひとりにしなかったのは、すなわち、わたしにしなかったのである』。そして彼らは永遠の刑罰を受け正しい者は永遠の生命に入るであろう」。
＊　マタイによる福音書　２５章　34～46 節

1633 年（寛永 10）9 月頃　同宿トマス・リョウカン、小倉に於いて火炙りにより殉教。
10 月 21 日　中浦ジュリアン神父【65 歳】、長崎西坂に於いて逆さ吊りにより殉教。
【10 月 21 日死去】
＊『日本切支丹宗門史』　下巻　254～256 頁

？月　　三宅藤兵衛、天草の富岡番代になる（萬松山却記簿）
？月　　天草佐伊津村金浜城主　関主水、落城する（西明寺年譜）

1634 年（寛永 11）6 月 28 日　第一之制札（キリシタン禁令）が建てられる。
8 月　7 日　香春町採銅所の不可思議寺、第 3 世住職慶順の世代に至って寺号免許を取り明善寺と号する。

不可思議寺は細川藩が 1632 年（寛永九）12 月に肥後に移った後、1634 年（寛永十一）8 月 7 日、第 3 世慶順の世代に至って寺号免許を取り、明善寺と号した。

＊　香春町町史　第一章　神社・寺院　723～724 頁　明善寺

？月　　米田監物是季【50 歳】一万石を賜る。

【推論】
おそらく米田監物是季【50 歳】が 1 万石を賜った背景には、興秋隠蔽先として山鹿郡鹿本町庄村に泉福寺を確保した褒美としての加増と考えられる。協力した金剛乗寺は 1633 年（寛永 10）1 月 7 日、細川家より寺内 6 反 18 歩の寄進を受けている。これは細川興秋の隠蔽に末寺泉福寺を差し出した見返りと推測される。また今後、藩主細川忠利がキリシタン禁制を厳しく打ち出していく中で、兄興秋を次のより安全な土地へ移転させるための候補地を探すことへの報酬だと思われる。米田監物是季は次の候補地として興秋の側室の出身地であり、キリシタン信者の数が多い天草の御領を考えていたと思われる。天草の佐伊津、御領は興秋の側室（妾）の郷里であり、同地には確固たる基盤を持つキリシタン信徒組織コンフラリアが存在していた。1617 年（元和三）のコーロス徴収文書に天草内野村の信徒代表として三名の名前が記載されている。
（正確には内野村とは現在の城河原一帯を指し、井手組庄屋の長嶋家が代表）
天草御領のキリシタン大長嶋九兵衛【安当仁】、ささ原与兵衛【備前天】、飛瀬外記【伊即所】。御領は隠れキリシタン信者の多い土地であり、興秋を隠すには廃城になっている御領城跡地が最適であり、すでにそこにはキリシタン寺が存在していた。おそらく米田監物是季は、秘密裏に天草御領の隠れキリシタンの代表者の庄屋に興秋の受け入れを打診していたと思われる。1633 年（寛永 10）三宅藤兵衛、天草富岡番代になる（萬松山却記簿）当時、天草は唐津藩主、寺沢広高が拝領していて、三宅藤兵衛は細川忠興の妻、玉ガラシャ夫人の姉の子であり細川興秋と三宅藤兵衛は従兄弟同士である。寺沢広高の妻は妻木貞徳の娘、明智光秀の妻も妻木家の出身。明智、寺沢、細川家とのつながりは深く、この血縁関係も背景にあって、米田監物是季は寺沢領である天草をあえて興秋の隠棲場所として選択したと推測される。

1635 年(寛永 12）6 月 20 日
小笠原玄也の 10 番目の 4 女お類､病気のため死去｡隠蔽先の玄也の自宅近くに自葬される。
小笠原玄也の 10 番目の 4 女お類が病気のため山鹿郡庄村の自宅にて死去した。
＊『マンショ 5 号』　小笠原玄也の遺書
（小笠原玄也遺書第 7 号、みや遺書第 11 号にお類死去の話が出てくる）
【推論】
小笠原玄也の 4 女お類は、泉福寺の周辺近くの玄也の家の土地に葬られたと考えられる。この時のお類の自葬が同じ庄村の百姓仁左衛門（助十郎とも称している）に玄也一家はキリシタンではないかと怪しむきっかけを与えたことは疑うことの出来ない事実であり、お類

の自葬以来、玄也一家に対して不審を募らせた仁左衛門は密かに玄也達一家の様子を遠目に注視観察し始めたと思われる。仁左衛門の心に一層火をつけたのが 7 月 29 日に*下高橋の高札場に立てられた第二のキリシタン禁令の制札（高札）だった。七月、八月、九月の三ヶ月の観察の時を経て玄也一家がキリシタンであるとの確証を掴んだ仁左衛門は、9 月下旬～10 月上旬、地元山鹿の番所ではなく熊本の寺社奉行でもなく、約 5 日間、約 180 ㌔を歩み通して長崎の立山奉行所に訴え出た。この時の仁左衛門の訴状記録は長崎立山の奉行所の宗門記録として残されていたが、1666 年の長崎の大火で全て消滅してしまい、現在は熊本細川藩に残る長崎奉行所から細川藩に対しての小笠原玄也に関する問い合わせからしかその内容は推測できない。細川忠利の 1635 年（寛永 12）11 月 8 日付の御書には『訴人が似たようなことを言うのはもっともである。（仁左衛門は）懸賞金が目的ではないと言うので（長崎奉行所では）確かなことと決まった。』と述べている。仁左衛門には訴え出た褒美として銀子 20 枚が褒賞金として支払われている。
銀一枚（10 両）は 43 匁に相当する。江戸時代前期の金銀両替の公定相場は、金一両が銀 50 匁である。この褒賞金制度を当時の世間ではどの様に受け止めていたかというと、人々の評判は決して好くなかった。現在の貨幣価値から言うと、何百万円という褒賞金だから誰もが欲しいが、逮捕された相手は拷問を受け処刑されることが分かっていただけに、普通の人は密告することをためらった。そして密告した者が分かると、その密告者は地域の人々から厳しく非難され、嫌われて除け者扱い（村八分）にされたと記録されている。

＊下高橋の高札場跡
山鹿市鹿本町下高橋に、高札場跡が六地蔵と並んで残っている。高札とは法度や掟書き等を記して高く掲げた板札。寛永年間（1624～44）山鹿郡中村手永会所の 4 枚立て御高札場跡。小笠原玄也の時代から 170 年後の享和 4 年（1804）2 月、庄屋甚兵衛が建てた、高さ 2.5 ㍍、幅 3 ㍍の石造りの高札場が現在も残っている。熊本県内では高札場が残る唯一の例で、大変貴重な史蹟である。下高橋の高札場は鹿本町来民から菊池市隈府に至る旧道（菊池往還）沿いにある。庄村泉福寺からは約 2 ㌔の距離。
＊鹿本町町史　文化財　34 下高橋御高場跡　472 頁

＊第二之制札（高札）
1635 年（寛永 12）細川藩領内において、領民全てに対して寺請、起請文を取り、人別改めを行い、キリシタン探索を徹底させている。この年、南蛮誓詞が初めて肥後において踏み絵とともに導入されている。『第二之制札』が 7 月 29 日、長崎奉行、榊原飛騨守の名によって建てられた。高札の文面は次の通りである。（文面省略）
山鹿に建てられたこの高札を見て、山鹿郡庄村の百姓・仁左衛門（助十郎とも称している）が、懸賞金欲しさに九州の切支丹総取り締まりである長崎奉行所に、仁左衛門の近くに隠れて住んでいた小笠原玄也一家を訴え出た。

＊細川藩『日帳』（御奉行所日帳・御奉行所日記）寛永 12 年 11 月 2 日の項に
『山鹿郡庄村の仁左衛門、玄也ノ訴人二罷出候二付、銀子弐拾枚被遣候事』とあり、
また、同年 12 月 3 日付けの細川忠利書状に
『山鹿郡庄村之助十郎二相尋候書物、請取候、彼者ニ褒美仕可然由、榊飛騨殿・・・・銀子弐拾枚遣由』とある。

お類の埋葬地について

10 月下旬、山鹿郡庄村の仁左衛門（訴人）の訴えにより長崎奉行所からの問い合わせによる急な逮捕監禁であったために、玄也達にお類の墓を掘り返す時間も無かったこと、時間的にもお類の遺体が埋葬から 5 ヶ月では完全に白骨化していないことを考えると玄也達はお類の墓をそのままの状態で鹿本町庄村からを去らざるを得なかったと考えられる。
お類の墓については小笠原玄也の自宅近くに葬られたと考えられる。香春町中津原浦松にある加賀山隼人の墓には墓碑銘はないが十字が彫ってあり、一目でキリシタン墓碑と判る造りである。玄也とみやは父隼人と同じ様なキリシタン墓碑をお類の為にも後日造るつもりだったと推測される。当時の埋葬は土葬であり、野犬が掘り起こさないために埋葬した上に置石（平石・自然石）を置いて白骨化させ、後年（2，3 年後）、遺骨を掘り起こして洗い埋葬しなおして墓を建てていた。6 月 20 日にお類が死去して、5 ヵ月後の 11 月 4 日には小笠原玄也達は熊本に連行されて庄村を去っていることを考えると、お類の墓は置石のみの状態で置き去りにせざるを得ないために放置されて、庄村の周囲の隠蔽監視下に置かれていた自宅の近く残っている可能性が高い。玄也の自宅の上には香春町中津原浦松のときと同じ様に愛宕権現社、または権現社に相当する寺社があり、監視されていたのではないだろうか？香春町中津原浦松と同じ様な V 地谷の狭い地形、上から監視が可能な 1632 年以降、細川藩が手を加えた愛宕権現などの条件の土地を調査探索するならば、庄村周辺（現・鹿本町、菊鹿町）での小笠原玄也が監視下に置かれながら生活していた場所の特定ができると考えられる【現在居場所の特定調査継続中】

泉福寺跡（竜徳山、密巌院）山鹿町金剛乗寺の末寺

鹿本町大字庄　字小路
真言宗紀州高野山東南院末寺。平安時代平重盛建立。同永暦元年（1160）開基。鎌倉～室町中期頃までは寺領すこぶる繁栄、本堂、御位牌所、客殿、鎮間堂、庫裏に本尊毘沙門天ほか木像五像及び観世音、聖天、庚申堂、六字塔、などを備え、隈部氏、相良氏（高橋氏）の庇護を受け盛大であったが、室町末期に至って戦禍のため衰微したが、永禄年中（1558～1570）に再興。江戸時代元禄 5 年（1692）山鹿金剛乗寺入真住寺、江戸時代初期まで再び衰微荒廃した寺字を継承して復興以来江戸初期まで寺子屋を開設して住職がいたとある。
宝暦 6 年（1774）、寛政 2 年（1790）、寺社間数の御改めあり（森文書）。

寛永年間？妙解院細川忠利御鷹野の節に止宿あり。正保 2 年（1645）4 月、真源院細川光尚同じく御鷹野の節に休息あり。住僧快存。寺跡 290 平方㍍には、鎌倉時代より江戸時代にわたる 500 余年の古碑古塔郡をなし、まさにその展示場的観がある貴重な遺跡である。
＊　鹿本町町史　文化財　22　泉福寺跡　465～466 頁　第四節　15　泉福寺跡　529 頁

泉福寺跡　（現　鹿本町庄）
庄の集落中央あり、肥後国誌によれば竜徳山密巌院と号し、真言宗、高野山金剛峰寺の末、開基・建立年代不明、元禄 5 年（1692）金剛乗寺（現山鹿市）から堂守として入った入真が復興したという。また寛政 2 年（1790）の寺社間数就御改御達申上候覚帳（森文書）には永暦元年（1160）平重盛が建立。その後寺領も召放され無縁地となり、永禄年中（1558～1570）の再興を伝える。同帳によると境内一反一畝余、本堂には毘沙門天や吉祥天女・弘法大師など六木像、御位牌所に観世音、鎮守堂に聖天像があり、ほかに庚申堂・客殿・庫裏・石地蔵一体があるが、寺領・山藪・寄付米銀・祈祷料はまったくない。明治の「郡村誌」には寺名はみえない。寺跡には本尊と伝える高さ 120 ㌢の毘沙門天像や聖天像、五輪塔 10 基分とその残欠、宝珠印塔の残欠や板碑 9 基がある。板碑は天文 5 年（1536）銘・文禄 3 年（1594）銘が各一、慶長期（1596～1615）のものが四、最新は承応元年（1652）銘。　＊『熊本県の地名』　174 頁　日本歴史地名体系 44　平凡社

現在は僅かに毘沙門堂、聖天堂を残しているが、共に戦後縮小移転新築したもので新しい。山鹿市教育委員会の解説によると『真言宗の古刹泉福寺跡には種子アを刻む巨大板碑の勢順大徳碑（1610 年）、種子ウーンを刻む庚申塔（1702 年）があり、墓地北側には五輪塔 10 基分とその残欠、宝珠印塔の残欠と板碑数基（中世～近世）がある。』（昭和 57 年 5 月 1 日一括町指定）
別途、寛政二年（1790）の寺社間数御改御達覚帳に依る、昭和 52 年 10 月 1 日平川厚氏作成の泉福寺復元図を掲載する。【泉福寺復原図参照】

寺社間数御改御達覚帳や泉福寺に関する原本文書は，鹿本町の森家が所蔵保管していたが、火災により焼失したとの報告があったので、これ以上の追跡調査が出来ず明細は不明のままである。

細川興秋が隠棲した寺を如何にして泉福寺と断定したか

1　小笠原玄也の訴人、仁左衛門（助十郎）が鹿本町庄村から長崎奉行所に訴え出ている。小笠原玄也居住地区近くの隠れキリシタン寺の住職として細川興秋は隠蔽されていたので、庄村地区の真宗大谷派の寺は金剛乗寺末寺の泉福寺ただひとつと断定される。
2　香春町採銅所の不可思議寺は真宗大谷派に属しており、山鹿町と鹿本町には真宗大谷派に属する寺は山鹿町湯町の金剛乗寺ただひとつであり、金剛乗寺は平安時代初期の

創建である。従って、歴代の住職の系譜も明確にされており、細川興秋が金剛乗寺に入り込む余地は無い。歴代住職の系譜の中に宗順もしくは宗専の名前は見当たらなかった。しかし、末寺の泉福寺は細川藩が肥後熊本に移封になった 1632 年当時、住職がいたがどうかも定かではなく記録も残されてはいない。興秋を隠蔽するには格好の寺であったと思われる。

3　山鹿湯町の金剛乗寺自体の寺社記録は明確にされているのに、末寺の泉福寺の記録は不透明で信憑性に欠けている。金剛乗寺にも明確な記録が残されていない。

4　金剛乗寺は 1633 年（寛永 10）1 月 7 日、細川家より寺内 6 反 18 歩の寄進を受けている。これは細川興秋の隠蔽に末寺泉福寺を差し出し協力した見返りと推測される。

5　鹿本町に存在する全ての他の宗派、及び浄土真宗本願寺派の寺の記録を調べたが、全ての寺の創建年代も古く歴代の住職の系譜も明確にされている。歴代の住職の系譜の中の 1632 年（寛永 9）あたりに、宗順、宗専の名前はなかった。従って宗派を真言宗大谷派から、浄土真宗本願寺派に変更したとしても秘密裏に隠棲することは不可能と思われる。

＊　鹿本町史　第 3 節　寺院　520～526 頁
＊　山鹿市史　第 4 節　近世の村落と祭祀　近世の社寺　613～621 頁
＊　菊鹿市史　資料編　25　寺社資料　1161～1174 頁
＊　菊鹿市史　本編　　第 6 章　信仰　神社・寺院　1099～1115 頁

7 月 10 日　　興秋側室、興季の母、天草の佐伊津か御領周辺にて死去。
　　法名月山妙雲大姉。（芳證寺過去帳）
7 月 29 日　　第二之制札（キリシタン禁令）が建てられる。
10 月初め？　山鹿郡庄村の百姓仁左衛門、長崎奉行所に小笠原玄也を訴え出る
10 月下旬？　玄也達は鹿本町庄村の自宅に監禁される。

興秋は泉福寺を出て山鹿から菊池川（玉名を経て高瀬より？）を舟で下り海路天草御領に渡り、御領城跡の切支丹寺に身を隠す。米田監物是季【51 歳】が警護、手助けをしたと推測される。

11 月　1 日　第三之制札が建てられる。
11 月　4 日　小笠原玄也、熊本塩屋町田中兵庫屋敷裏の座敷牢に入る。
【50 日の間に*15 通の遺書を書く】
12 月 23 日　小笠原玄也一家 15 人、禅定寺にて斬首処刑されて、祇園山（現・花岡山）に葬られる。忠興の側室、小さい将【58 歳】キリシタン故に小笠原玄也とともに処刑される。処刑の総責任者は長岡監物【米田是季 51 歳】一万石の家老が勤めている。
12 月 24 日　米田監物是季、国家老長岡佐渡守宛の手紙に興秋の安否を『御やと御無事二

御座候』と報告する。

＊　小笠原玄也一家の殉教　『マンショ 4 号』八、玄也一家の殉教　163～171 頁
＊　小笠原玄也 15 通の遺書の現代語訳
　『小笠原玄也一家の遺書その現代語訳と解説』髙田重孝訳、監修・児玉雅治
　『マンショ第五号』　126～189 頁に掲載　鉱脈社

細川興秋、泉福寺を出て天草御領に身を隠す

【推論】

興秋【50 歳】は 1635 年（寛永 12）10 月中旬から 10 月下旬、つまり山鹿郡庄村【現・鹿本町庄】の訴人百姓仁左衛門（助十郎とも）が長崎の奉行所に小笠原玄也を訴え出て、長崎の奉行所から細川藩へ問い合わせがあった時点で小笠原玄也一家は庄村の自宅に監禁された。それと同時に興秋は身を隠すために山鹿郡庄村の泉福寺を密かに出て、山鹿から菊池川を（あるいは玉名を経て高瀬から）舟で下り、海路天草の御領に向ったと推測される。天草の御領の選定と隠蔽の準備は米田監物是季【51 歳】が天草御領の隠れキリシタン代表の庄屋達と連絡を取り全て手筈を整えた。天草への渡海の準備と警護は米田監物是季の精鋭が務めたと推測される。小笠原玄也は興秋の身代わりの山羊（Scape Goat）だった。

興秋の存在を表に出さないために、世間の目を興秋から逸らすため、興秋を逃がすために小笠原玄也一家 15 人は興秋の身代わりとなり犠牲となった。

小笠原玄也の遺書第九号・山田半左衛門宛の手紙の最後に『申たく候文ニて申べく候へとも、熊（わざと）これを進申さず候。せすす・まりや申候。』

小笠原玄也の遺書第二号・御みやさま宛のかえし書に『此の一ぶ（分）はこともあまた御さ候まま、しせんの事のためにと、そんし候て、おき申候。』

玄也の言いたいこととは何だったのか？　あえて言わずに死に臨んだこととは、人に言わずに神であるイエス・キリスト、聖母マリアに訴えたかった事とは何だったのか？

玄也の面目（一分）とはなんだったのか？　玄也一家を死にまで追いやったキリシタン信仰と細川家臣として庇い続けた主君細川興秋のことではなかったのだろうか。

米田監物是季の国家老・長岡佐渡守宛の手紙に書かれている細川興秋の安否

小笠原玄也一家の殉教の記録は、細川藩の記録にのみ見ることが出来る。

小笠原玄也処刑の総責任者・米田監物是季の国家老・長岡佐渡守宛の **1635 年 12 月 24 日付**の手紙に、興秋の安否が『**御やと御無事二御座候**』と書いてある。

國家老・長岡監物書状、長岡佐渡守二遣候書状之内（寛永十二年十二月廿四日付）

『御やと御無事二御座候、爰元相替儀無御座候、併玄也儀二付而、何も気をつめ申候処、相済らち明申候而、今ハ何も落着申候、』

『御主人は御無事です。こちらは変わりありません。しかし玄也の件については、何とも気を詰めていましたが、処罰が済み解決しました。今はすべて落着しました。』

小笠原玄也処刑の総責任者・米田監物是季（これすえ）の国家老・長岡佐渡守宛 1635 年 12 月 24 日付けの手紙に、興秋【50 歳】の安否が『**御やと御無事二御座候**』と書いてある。米田監物是季が小笠原玄也の処刑報告の冒頭に興秋の安否を『**御やと御無事ニ御座候**』と報告している。米田監物是季にとっての御主人とは細川興秋であり、米田監物是季は大坂の陣以来、興秋の警護を担当し隠蔽の全責任を負っていた。このことは興秋と小笠原玄也とが 1615 年以来行動をともにしていたことも示している。この時、藩主細川忠利は江戸に在勤、父忠興は八代にいることが国家老の長岡佐渡守（松井新太郎興長）、長岡（米田）監物是季の両名には分かっているのに、『御やと御無事二御座候』との報告は、興秋についての安否報告であり、米田監物是季のこの手紙は、この時点で細川興秋が生存していて、小笠原玄也の一件に巻き込まれずに無事に鹿本町庄村泉福寺から天草御領のキリシタン寺に逃亡したことを示す唯一の重要な証拠となっている。当時、天草は唐津藩主、寺沢広高が拝領していて、1633 年（寛永 10）以来、三宅藤兵衛が天草富岡番代になっていた。（萬松山却記簿）三宅藤兵衛は細川忠興の妻、玉ガラシャ夫人の姉の子であり細川興秋と三宅藤兵衛は従兄弟同士である。寺沢広高の妻は妻木貞徳の娘、明智光秀の妻も妻木家の出身。明智家、寺沢家ともに、細川家とのつながりが深い親戚関係である。米田監物是季はこの血縁関係も考慮に入れ、あえて寺沢藩領の天草御領を選択したと推測される。

天草の佐伊津、御領は興秋の側室（妾）、嫡子興季の郷里であり、また確固たる基盤を持つキリシタン信徒組織コンフラリアが存在していた。1617 年（元和三）のコーロス徴収文書に天草内野村の信徒代表として三名の名前が記載されている。（正確には内野村とは現在の城河原一帯を指し、井手組庄屋の長嶋家が代表）。天草御領のキリシタン大長嶋九兵衛【安当仁】、ささ原与兵衛【備前天】、飛瀬外記【伊即所】。秘密裏に米田監物是季【51 歳】が興秋【50 歳】の受け入れを打診していたと思われる。米田監物是季はこれらのキリシタンコンフラリア・信徒組織代表者に連絡を取り、すでに秘密のキリシタン礼拝堂のあった御領城跡に興秋は隠れ住んだと思われる。切支丹寺（礼拝堂）をカモフラージュするために後に長興寺を建立した。表面的には長興寺の住職として興秋は身を隠して潜伏、法名も宗順から宗専に変えて、御領周辺のキリシタン達を庄屋達三人と協力して共に指導したと思われる。これらは**天草に伝わっている『細川興秋は熊本より天草の乱の前に移ってきた。天草の乱に際しては細川興秋公と長野幾右衛門家重様は島民に乱徒に組みしないように説いて回った』という伝承・口伝**とも一致する。

口伝を立証する天草・島原の乱の記録より

天草に伝わっている『細川興秋は熊本より天草の乱の前に移ってきた。天草の乱に際して

は細川興秋公と長野幾右衛門家重様は島民に乱徒に組みしないように説いて回った』という伝承・口伝

口伝を裏付ける井口少左衛門の報告書

井口少左衛門より熊本藩三家老へ（御書捧書写言上　）寛永 14 年 11 月 17 日付け

天草へ参様子承届候覚

『一、十一月十六日ニ天草の内五料（御領）と申浦へ着仕候、五料（御領）村の百姓共ハ此中きりしたんニては無御座候ニ付て、一揆とも五料村を放火仕候故、五料村の百姓共ハ逃散り舟ニ乗居申候処、一揆共申候は、きりしたんに成候ハバ組ニ入可申候、無左候ハバ討果し可申候と申ニ付て、無了簡昨日十六日ニ五料村の者共きりしたんニ成申候由申候、家共ハ悉く焼払申候ニ付て、五料の百姓共ハ船ニ其侭居申候、此様子尋申候百姓ハ、五料村の内蔵丞と申者ニて御座候事、』以下省略

＊原史料で綴る天草島原の乱　0406　井口少左衛門より熊本藩三家老へ　289 頁

＊寛永平塞録　熊本細川藩原城の乱記録　53 頁

『本戸（本渡）の近所御領と申所へ同十六日昼の八ツ時分【午後 2 時頃】に着仕候村々浜辺にのぼりを立置岡へ船を引上とまをふきくるすを立居申候私を見候て船より一人立ちあがり申候此方商人の儀に候か私申候は是はおひただ敷躰何たる儀哉と尋申候処に彼者申候は切支丹起候て此在所も放火仕に付て百姓共此中船に乗沖にゆられ居申候得共一揆共申候は切支丹に成申候はば組に入可申候無左候はば悉く討果可申候由に付て不及是非十六日の朝御領村居不残切支丹に成申候由申候』

＊写本　『肥前有馬切支丹一揆根源』（九州大学図書館所蔵）『天草土賊城中之話』（『改定史跡集覧』第 16 冊　266 頁

＊『山田右衛門作口書写』（『島原半島史』）中巻 190 頁

大意

本渡の近所御領に 16 日の八ツ（午後 2 時頃）船を着けた。村では浜辺に幟を立て陸に引き揚げてられた船にも、苫（とま）をおおいクルスが立てられていた。船内から一人の男が私を見て立ちあがった。少左衛門は『商売に来たものであるが、この仰々しい様子は何事か』と尋ねた。男は内蔵丞という農民で、この男の話によると『御料（御領）はキリシタンではなかったから、一揆軍が村に放火して焼き払った。村人は逃げ去り、船で沖に避難して揺られていた。一揆軍は村人に『キリシタンになるなら組に入れてやるが、ならないなら討ち殺してしまう』とのことで、16 日朝、御領村人は仕方なくみんなキリシタンになりました。三宅藤兵衛殿も 14 日の合戦で討ち死にされました。わたしも藤兵衛殿知行地の百姓なので首が晒されている所まで行き拝んでまいりました』また、一揆軍は 17 日朝、富岡城を責める予定で、御領から西の二江に四朗が本陣を構えている、と少左衛門に答えた。

一揆軍は一万の兵を五手に分けて、一組ごとに頭を決めて、本渡から富岡までの五里の間の村々を焼き払っていった。キリシタンに背くものは殺されるので、これらの村の者達は、表面上皆キリシタンに加わるようになった。
井口少左衛門より熊本藩三家老へ（御書捧書写言上　）寛永 14 年 11 月 17 日付け

井口左衛門はこの旨を 17 日高瀬へ出張して来ていた熊本藩家老、長岡佐渡守（松井新太郎興長）、有吉頼母に報告したところ，至急に府内【大分】の御目付にも報告するようにとのことで、19 日昼八ツ時（午後 2 時頃）府内に行き報告した。御目付はこの井口左衛門の報告を早速江戸への御書として書き送った。それまで江戸では島原のことだけしか報告を受けていなかった。11 月 26 日、井口左衛門の報告書が府内目付によって幕府へ届けられ、この報告が初めての天草の状況報告になった。翌 27 日、評定所にて審議され、再度追討上使・松平伊豆守信綱派遣のきっかけとなった。この意味でも井口左衛門の偵察と報告の意義は大きい。後日、井口少左衛門は細川忠利より感状をもらっている。細川忠利から『姿を変え、心を砕き賊の中に忍び入り良く働いた』として新知二百石の加増、馬回組になった。原城攻めでも立花左近や、松平伊豆守信綱へ使いに立つなどして相当の働きがあった。

ではこの時、米田監物是季（これすえ）はどこにいたのであろうか？熊本城留守居役として熊本城に詰めていたのだが、それだけではないはずで、細川興秋の隠れが確保のために八代においては秘密裏に行動していたのであろうと推測される。

御領でもキリシタン一揆勢が攻めてきた。それで村人たちは船に乗り沖に漕ぎ出して難を逃れた。運悪く捕まった者たちに、一揆の者が『キリシタンに成るなら組に入れてやる。しかし、ならないなら討ち果たす』と脅したので、仕方なく皆なキリシタンになりました。一揆に加担しなければ『討ち果たす』とか『家に火をつける』と言って脅し強要したことが解る。その頃、各地で頻繁に火災が発生しているのは一揆勢が放火をしたためと思われる。したがって、一揆に同心しないものは山に隠れたり、船に乗り沖に漕ぎ出して難を逃れたりしている。火災の記録を見ると、11 月 16～17 日にかけて本渡から富岡の間の村々で家々が放火されている。一揆軍は、村々にある寺社等にも放火、この時、御領城内にあった、興秋の隠れ家，長興寺薬師堂も、一揆軍の焼打ちにあった思われる。しかたなくキリシタン軍になった者たちも、富岡城攻撃に参加させられていたが、隙を見て逃げ出したと思われる。元々天草の佐伊津、御領は興秋の側室（妾）、嫡子興季の郷里であり、また確固たる基盤を持つキリシタン信徒組織コンフラリアが存在していた。1617 年（元和三）のコーロス徴収文書に天草内野村の信徒代表として三名の名前が記載されている。（正確には内野村とは現在の城河原一帯を指し、井手組庄屋の長嶋家が代表）。天草御領のキリシタン大長嶋九兵衛【安当仁】、ささ原与兵衛【備前天】、飛瀬外記【伊即所】。この地域の隠れキリシタン組織の人々は、細川興秋の指導の下、もし一揆になったときは、表面上はあくま

でも仏教徒を装い一揆には極力参加せずに、難を逃れることを示し合わせていたと考えられる。もし、一揆軍に捕まり強制的に参加させられた時には隙を見て一揆軍より逃げ出して郷里に帰り隠れている事、一揆が終息するまで仏教徒を装い、一揆には加担しないことを申し合わせていたと推測される。一揆終息後に、平時の隠れキリシタンの生活に戻り、今までどおりのキリシタン組織を中心としたキリスト教生活を始めたと推測される。

細川興秋と長野幾右衛門家重が島民に乱徒に組みしないように説いて回ったという伝承・口伝とも一致する天草・島原の乱に参加しなかった村々・原城に籠城しなかった村々の参加人数と天草の地図【別紙参照】

志岐村 102 名、坂瀬川村 0 名、ニ江村 30 名、下内野村 0 名、上内野村 0 名、荒河内村 0 名、

城木場村 0 名、鬼池村 0 名、御領村 0 名、佐伊津村 0 名、本村 0 名、新休村 0 名、下川内村 0 名、本泉村 0 名、広瀬村 0 名、本戸馬場村 0 名、

＊『松平氏覚書』（内閣文庫）出典

＊再海の乱・下巻　鶴田文史著　**【別紙参照】**西海文化史研究所発行

乱の天草一揆参加状況地図　94～95 頁

原城一揆勢総数一覧　98 頁

乱の天草一揆参加状況地図 94～95 頁と原城一揆勢総数一覧　98 頁より、天草から参加した村ごとの参加人数表と地図でも判る通り、興秋が住んでいた御領を中心として北西は坂瀬川村、西は本村、南は本戸馬場村を境とした地域が天草の乱に参加しなかった。この地域は 1617 年（元和 3）8 月 29 日付けで中浦ジュリアン神父が中心となって作成した『イエズス会士コーロス徴収文書』に署名しているキリシタン代表者達が治める地域であり、信徒組織・コンフラリアが強固に確立されている地域でもあった。同地域とコーロス徴収文書に重複する村名と代表者名を下記に揚げる。

内野村　大長嶋九兵衛・安当仁、ささ原与兵衛・備前天、飛瀬外記・伊那所、

二江村　松田杢左衛門・はうろ、宮崎権兵衛・理庵、茂嶋与三兵衛・はうろ、

坂瀬川村　川崎市右衛門・平とろ、溝野上与四右衛門・さんちょ、前田弥右衛門・とめい、

下津深江村　西嶋金七郎・志ゆ阿ん、西嶋右馬丞・ふらんそ、

＊イエズス会士コーロス徴収文書　第 45 文書　肥後国　天草　1104～1108 頁　『近世初期日本関係南蛮史料の研究』松田毅一著

長興寺

長興寺の号は、長岡の長、興秋の興、を取って長興寺と名付けた。元々は切支丹寺。
長興寺の建てられていた場所は、興秋の七代目の子孫、長岡五郎左衛門源興道が 1802 年（享和二）壬戌 6 月 15 日建之の墓のある現在地周辺付近と推測される。つまり長興寺が朽ちて後、その同じ場所に興秋の死後 160 年にして現在の興秋の墓を、興秋の七代目の子孫、長岡五郎左衛門源興道が建てたと考えられる。
1648 年以降、長興寺薬師堂の御領城内の建てられていた場所については、江戸時代の御領城跡芳證寺所有の二枚の絵図（見取り図）に克明な記録が残されている。御領城地は廃城後、切支丹寺が建立され、鈴木重成時代の茶屋（陣所）を経て、1648 年から芳證寺の境内と墓地になった。（芳證寺文書による）【見取り図参照】

「島鏡」に『寺屋敷東西弐拾四間、南北三拾壱間、此外薬師堂屋敷東西拾弐間、南北拾間、同所廻り畑弐反六畝支配之事』とある。
興秋が居住していたと思われる薬師堂屋敷は東西 12 間、南北 10 間と記録されている。
明治初期に撮影された貴重な芳證寺薬師堂古写真には（南向きに東西）間口 3 間、（南北に）奥行き 2 間と但し書きがあり薬師堂の姿と大きさが確認できる。薬師堂は現在の芳證寺の本堂の東側石壁と、細川興秋公主従の墓（宗専和尚主従三基の墓）の西側の間に建っていた。
（山本繁氏、五和町文化財保護委員長、御教授による情報）

【推論】
1637 年（寛永十四）　夏頃より 10 月にかけて天草全土に不穏な気配が流れる。
興秋【52 歳】は、1600 年 9 月（15 歳）、関ヶ原の戦いで徳川家康に組みして勝利。
1615 年 5 月、（30 歳）大坂の陣に於いて豊臣秀頼に組みして大敗。興秋は戦いに於ける悲惨さを経験しているので、自分を匿ってくれている同じキリシタンである御領地区の人々を勃発するであろう一揆の巻き添えにすることは断じて出来なかった。興秋には自分の経験からすでに戦いの結果が見えていた。自分に従ってきた家臣長野幾右衛門家重と渡辺九郎兵衛と共に、人々に乱の結末がどうなるのかを説明して乱徒達に組みしないように説得して廻った。その結果、キリシタンの多い地区、御領組の鬼池、御領、佐伊津村のキリシタン達は興秋達の説得に応じて乱に加担せず、島原に渡らず、原城に立て籠もらずに全滅を避けられた。忠告を聞かずに個人的に乱に参加した人々は原城と共に玉砕、全員殺された。

1637 年（寛永 14）10 月 25 日　　天草の乱勃発。興秋【52 歳】
10 月 26 日　　長岡監物（米田是季）【53 歳】島原の乱の大筒の音を聞く。
11 月 14 日　　三宅藤兵衛（興秋の従兄弟）、天草富岡城代、本渡の戦いに於いて戦死。
11 月 16 日　　井口少左衛門、御領へ上陸して天草の現状の情報を収集。

細川興秋　天草・島原の乱の間、八代に避難する

【推論】

1637 年（寛永 14）10 月 26 日夜、細川藩家老長岡監物（米田是季）【53 歳】＜小笠原玄也一家処刑責任者＞は自宅で、備頭の長岡（沼田）勘解由延之（5000 石、39 歳）を招いて囲碁の会を催していたとき、『不思議なことだ。西南の方向（島原）に大筒の響きを聞いた。世の常ではない。いまひとつ響けば兵乱である。様子を調べよ』と言い、その夜のうちに、長岡（松井）佐渡守興長（3 万石、56 歳）と、有吉頼母佐英貴（1 万 8500 石、38 歳）と相談・状況把握をしている。天草・島原の乱の勃発である。細川藩家老・長岡監物（米田是季）は細川興秋【52 歳】の警護責任者であり保護者でもあるので、おそらく、事前に御領のキリシタン指導者庄屋達から『もし一揆にでもなれば、興秋様をどちらに御移しすればよいだろうか？』との相談・連絡を秘密裏に受けていて、天草・島原での不穏な動きを十分に察知して警戒をしていたと考えられる。興秋を安全な場所に避難誘導して匿うために米田是季はすぐさま行動を起こしたと推測される。天草・島原の乱に於いて、歴戦の剛の者である米田監物是季があえて熊本留守居役を務めている理由には、興秋の安全と保護を第一に優先して細川軍とは別に秘密裏に行動しなければならない重要な使命を初めから帯びていたためと推測される。

興秋【52 歳】は、表面上は御領の長興寺薬師堂の住職に扮しているので、興秋を知らない他の天草・島原の決起したキリシタン達から命を狙われる危険があった。おそらく御領地区キリシタン信徒代表の大長嶋九兵衛、ささ原与兵衛、飛瀬外記達の忠告を受け入れ、三人に後を託して乱勃発と同時か直後に御領を離れ*海路、父忠興【75 歳】の城のある**八代の盛光寺（西光寺）・安昌院（八代市本町 3 丁目 3－8）か泰巌寺に身を隠した**と思われる。移動の際の手引き及び警護は、大坂の陣以来の興秋の警護を担当していた細川藩家老米田監物是季が務めたと推測される。*海路を見ると【地図で確認して見ると】御領から天草松島の池島の瀬戸、（満越の瀬戸）柳の瀬戸、大戸の瀬戸を通り八代までほぼ東方向に直線で結べる。特に夜陰に紛れての船による移動なら、誰とも接触せず人目にもつかずに八代まで安全に航行することができた。

興秋は細川家ゆかりの二つの寺、**父忠興【75 歳】の祈祷所である八代の盛光寺，姉お長の菩提所である安昌院（現在・八代市本町 3 丁目 3－8）か、細川家が先君・織田信長の追善のために建てた泰巌寺に身を隠したと思われる。**

盛光寺（西光寺）は 1623 年（元和九）6 月 17 日、豊前中津で病死した忠興の愛妾・小山りんの菩提をともらうために建立された寺で、りんの法名『西光寺法樹栄林』から西光寺と号した。三斎に伴って八代城下に移転。その後、盛光寺と改名した。盛光寺には興秋の姉であり、忠興の長女・お長【1603 年・慶長八・9 月 29 日、出雲に於いて死去・前野出雲守長重の後妻】の位牌が祀ってある安昌院も合併していた。**安昌院**は、西光寺住職の隠居所として最初から住職をおかずに西光寺住職の掛けもちとして、隠居した住職にお長の位牌を守らせていた。

安昌院は 1635 年（寛永 12）光国寺という真宗僧が西光寺に来たところ、西光寺の住職讃譽の願いにより、やむを得ず光国寺を安昌院におき、安昌院は上荒神丁に移転した。（八代

市史）細川興秋が天草・島原の乱で八代に避難した 1637 年(寛永 14)10 月下旬頃？から、天草の乱が終息した翌年 1638 年（寛永 15）3 月頃の間は、安昌院は上荒神丁にあった。
西光寺は三斎公（忠興）の祈祷所だった。西光寺には忠興が拝んでいた阿弥陀如来像が祭られている。この阿弥陀如来像は鎌倉前期（12 世紀～13 世紀初期）の古いもので、桧の寄木造り、彫眼、漆伯、像高さ 69，5cm の洗練された姿をしている。京都の高名な仏師の作と思われるが、仏師の名前は不明。この阿弥陀如来像は平安時代の優美さを残しつつ、新しい鎌倉時代の力強い表見を併せ持ち、武士が好んだ質実剛健の精神を感じさせる。
細川家にとって**先君・織田信長の追善のための泰厳寺**は当時、今の盛光寺と善正寺（八代市本町 4 丁目 18－７）の中間付近（平河原町の北、細工町の南）に建っていた。**泰厳寺**は先君・織田信長の菩提を追善するために、忠興が小倉に建てた泰厳寺を 1632 年（寛永九）八代に入城した翌年、1633 年（寛永十）6 月 3 日（甘棠園の織田信長墓刻銘）この地に移した。泰厳寺も盛光寺・安昌院も父忠興の住んでいた北の丸（現・松井神社）とは指呼の距離。後に泰厳寺は 1675 年（延宝三）落雷で全焼したので、松井家菩提所となっていた宗雲寺を古麓山下に新築なった春光寺に移転して、八代城出丸の三斎創建ゆかりの泰勝院跡地を 1677 年（延宝五）泰厳寺とした。

＊『江戸時代の八代』八代城下町の変遷と寺社考　木下潔著　私家本
　細川時代（細川三斎在城代 1632～1645 年）6～9 頁
　第 2 部　八代城下町寺社考　泰勝院 51 頁　泰厳寺 55 頁　盛光寺 70 頁　安昌院 73 頁
＊八代町絵図（熊本県立図書館蔵・加藤正方時代）
＊肥後国八代城廻絵図（国立公文書館蔵・細川忠興三斎時代：1644 年正保元年 12 月に、幕府が全国の諸大名に提出を命じた城絵図で、現存する 63 枚の内のひとつ）

熊本・八代における寺社考

泰勝院について

細川家の菩提寺である泰勝院。細川忠興三斎の父・幽斎玄旨（藤孝）は 1605 年（慶長 15）8 月 20 日未の下刻に京都三条車屋町の細川邸で死去（77 歳）した。
葬礼は 9 月 18 日牛の上刻、小倉野上の原において厳粛に執り行われた。忠興三斎は父幽斎の追善のため、翌 1606 年（慶長 16）亡き父の一周忌に、小倉に菩提所瑞雲山泰勝院を創建した。寺号は亡き父の法号『泰勝院殿徹宗大居士』からとって名付けた。

細川忠利は 1632 年（寛永 9）10 月豊前小倉から肥後熊本に国替えとなり、12 月 9 日熊本に入り、父忠興は八代に 1632 年（寛永 9）12 月 25 日入城した。翌 1633 年（寛永 10）小倉の泰勝院を八代城出丸（現・市立第一中学校）に移築・再建した。確かに泰勝院は細川家にとって一番大切な菩提寺ではあるが、場所が八代城内の出丸であるだけに、人目を憚る興

秋にとっては、あまりにも家臣の目に付きやすいという理由で、天草から避難してきた興秋一行にとって避難する場所としては必ず避けたと思われる。
＊江戸時代の八代・八代城下町の変遷と寺社考　木下潔著　私家本
　泰勝院 51～52 頁

盛光寺(西光寺)について

盛光寺は、はじめ西光寺（菩提山・智照院）と称し浄土宗筑後善導寺末寺。細川三斎忠興が，愛妾小山（1623 年（元和 9）6 月 17 日に病没）の菩提のため西光寺を中津城下に建てた。忠興は八代に 1632 年（寛永 9）12 月 25 日入城、西光寺も中津より八代城下細工町に移ってきた。
西光寺第四世嘆蓮社讃譽上人怡和尚は「かねて三斎の御懇意浅からず、中津より来て、当寺を下され、西小路に仏壇をたてられた。寺床は東西に一町貫通し、西を西光寺、東を安昌院とし、（「事迹略考」）中津から西光寺を移転、ただいまのところに創建した。」（寺記）
本尊は阿弥陀三尊来迎立像恵心作という。年貢免許の地である。寺領として、西光寺院殿月忌料、米高 50 石を八代郡北村にて知行（「事迹略考」63 頁）、女安昌院殿月忌料に、蔵米 5 石を寄附があった。（「國志」67 頁）
一説に、第四世嘆蓮社讃譽上人怡和尚は西光寺院殿の弟で、茶道をもって「はなはだ尊翁の御意にかない」（「國志」67 頁）「御懇意浅からず、御助力で寺内に茶室を建てられ、三年を待たず結構なる茶の湯所が成就し、おりおりに茶の会を駕したまう」このときはまだ安昌院が西光寺にあり、安昌院茶室一宇建てられた時である。（「事迹略考」63 頁）
＊江戸時代の八代・八代城下町の変遷と寺社考　木下潔著　私家本
　盛光寺 70～73 頁

西光寺は三斎公（忠興）の祈祷所だった。西光寺には忠興が拝んでいた阿弥陀如来像が祭られている。この阿弥陀如来像は鎌倉前期（12 世紀～13 世紀初期）の古いもので、桧の寄木造り、彫眼、漆伯、像高さ 69，5cm の洗練された姿をしている。京都の高名な仏師の作と思われるが、仏師の名前は不明。この阿弥陀如来像は平安時代の優美さを残しつつ、新しい鎌倉時代の力強い表見を併せ持ち、武士が好んだ質実剛健の精神を感じさせる。
【写真参考】
＊八代市立博物館未来の森ミュージアム、パンフレット、常時展示・信仰のかたち、より

安昌院について

浄土宗、盛光寺支配。細川忠興の長女「長姫」の夫、前野出雲守長重とその父但馬守は関白豊臣秀次（豊臣秀吉の甥）の家臣となっていたが、秀次が乱行の罪を問われて、高野山に於いて死を賜ったとき、長重もこの問題に連座して 1595 年(文禄 4)に生害した。忠興は長を証人（秀吉に人質）に出さず、長姫は剃髪して尼になり『安昌院』と称した。長・安昌院は

1603 年(慶長 8)9 月 29 日、出雲の国において病死した。法名『安昌院心月妙光大姉』。現在も位牌は盛光寺に安置されている。【写真参考】
忠興は八代入城後に長姫の追善の寺を八代城下西小路に建てる様に、西光寺中興四世讃譽上人に命じて、西光寺の東を分けて境内に創建、菩提寺安昌院と名付けて、位牌を安置し、斎米として月俸五石を寄附した。（「八代事迹略考」「肥後国史」「八代古跡略記」）
安昌院門は東の役割丁通りに開き、西光寺門は西の西小路通りにあるので、この三斎菩提所の二寺は、一町貫通の屋敷割で城下町における大名級菩提所の立地である。安昌院は、最初から別に住職をおかず、西光寺の掛けもちとして、西光寺住職の隠居所として、西光寺の隠居に長姫の位牌を守らせることにしてあった。
安昌院は 1635 年（寛永 12）光国寺という真宗僧が西光寺に来たところ、西光寺の住職讃譽の願いにより、やむを得ず光国寺を安昌院におき、安昌院は上荒神丁に移転した。（八代市史）
細川興秋が天草・島原の乱で八代に避難した 1637 年(寛永 14)10 月下旬頃？から、天草の乱が終息した翌年 1638 年（寛永 15）3 月頃の間は、安昌院は上荒神丁にあった。

松井文庫蔵の八代町城郭図（八代市史近世資料編によると天保六年（1835）以降の作成）では、盛光寺の北隣に安昌院が記されており、八代市史近世資料編（松井家文書「御町会所古記之内書抜」）の寛政 11 年(1799)の記録に「安昌院盛光寺隣屋敷と交換」とあり、寛政 11 年(1799)に安昌院は西小路の盛光寺の北隣に移転したことが分かる。
＊江戸時代の八代・八代城下町の変遷と寺社考　木下潔著　私家本
　安昌院 73～74 頁

泰厳寺・薬師堂について

細川忠興は先の主君、織田信長公追善のために、信長の三回忌に 1584 年（天正 12）6 月 2 日、丹後の国宮津城下に、菩提所泰厳寺を建てた。寺号は信長の法号『総見院殿信齢大居士』からとった。曹洞宗，尾州三津江の正眼寺末寺である。
小倉での泰厳寺の場所は、現在の小倉市立医療センター【馬借 2 丁目】のある場所で、泰勝院、泰厳寺、秀林院、小倉キリシタン教会が並んで立っていた。
＊小倉郷土史家の木島甚久著『小倉きりしたん遺跡』93 頁『秀林院址について』

忠興は八代に 1632 年（寛永 9）12 月 25 日入城、翌年 1633 年（寛永 10）6 月 3 日（甘棠園の織田信長墓刻銘より）八代の平河原町に小倉の泰厳寺を引き移した。開山は葉屋和尚。寺領二百石，当郡野津手永今村のうちを寄附した。（「松井家譜興長篇」「八代事迹略考」「八代古跡略記」）また寺領の他、茶の湯料玄米六石，作事料白銀十枚、を寺納した。（「八代古跡略記」）
『しかし、国立公文書館蔵の肥後國八代城廻絵図（正保元年・1644 年）幕府が全国の大名

に提出を命じた絵図には、加藤氏及び細川氏縁の淨信寺、本成寺、泰勝院に当たる所には「寺」と記されているが、泰厳寺にあたる所には、八代市史の言うような一町貫通の大名級寺院で、細川三斎の建立による寺院であるにもかかわらず、その存在が記されていない。』
また、松井文庫蔵の八代町図（八代市史近世資料編は、宝永年間（1704～1708 年）の作成と考証している）では、天和元年（1681 年）の火災後に向側の福壽寺の跡に移る以前の見松寺のあった所の東隣に「薬師」と記されている。そして、松井文庫蔵の八代城郭図（天保六年・1835 年以降の作成）では、さきの八代町図にあった「薬師」が西に拡張し、「泰厳寺下屋敷」と記されて平河原町を東西に貫通している。
この三図から考えるに、最初から泰厳寺という寺号を持つ寺院ではなく、三斎は、平河原町に先君織田信長の供養のための五輪塔を建て、その墓守のために薬師堂を置いていたものと思料する。そして 1675 年（延宝 3 年）5 月 22 日の亥の刻（午後 10 時）落雷のために薬師堂は全焼した。』55～60 頁
＊江戸時代の八代・八代城下町の変遷と寺社考　木下潔著
　泰厳寺 55～60 頁、薬師堂 140 頁

参考文献
＊江戸時代の八代・八代城下町の変遷と寺社考　木下潔著　私家本
　泰勝院 51～52 頁、泰厳寺 55～60 頁、盛光寺 70～73 頁、安昌院 73～74 頁、
　薬師堂 140 頁
＊小倉郷土史家の木島甚久著『小倉きりしたん遺跡』93 頁『秀林院址について』
＊小倉キリシタン教会、1611 年度イエズス会の記録。
＊肥後国史
＊八代市史・八代市史近世資料編
＊八代事迹略考・八代古跡略記

薬師堂・泰厳寺が正保元年・1644 年の地図に掲載されていない理由について

『しかし、国立公文書館蔵の肥後國八代城廻絵図（正保元年・1644 年）幕府が全国の大名に提出を命じた絵図には、加藤氏及び細川氏縁の淨信寺、本成寺、泰勝院に当たる所には「寺」と記されているが、泰厳寺にあたる所には、八代市史の言うような一町貫通の大名級寺院で、細川三斎の建立による寺院であるにもかかわらず、その存在が記されていない。』

推論

細川興秋は 1642 年 6 月 15 日に天草御領の長興寺に於いて死去した。幕府が全国の大名に城廻絵図の提出を命じた正保元年・1644 年は、興秋の死後 2 年目であり、興秋の警護を担当していた長岡監物是季（米田監物是季）と全責任者の国家老長岡佐渡守興長（松井新太郎興長）は正保元年・1644 年には共に健在で、興秋の死去 2 年後といえども幕府との緊張関

係は続いていて、興秋の隠蔽に深く係わっていた 2 人によって、泰厳寺にあたる所には、八代市史の言うような一町貫通の大名級寺院で、細川三斎の建立による寺院であるにもかかわらず、その存在が記されていない。報告書からの欠落は大きな謎であり、細川藩が作為的に薬師堂を報告書に記載しなかったと考えられる。興秋が避難した薬師堂は興秋の死去 2 年後も細川藩にとっては最高機密の場所であり、絶対に外部に知られてはならない最高機密事項だった。それゆえに肥後國八代城廻絵図（正保元年・1644 年）幕府が全国の大名に提出を命じた絵図への『泰厳寺・薬師堂』の不掲載は決定されたと推測される。

同じ様に『天草御領城跡』が 10 年後の慶安 4 年・1651 年の地図には掲載されていない。慶安四年（1651 年）肥後藩が古城の実態を報告提出した『肥後国　江戸江差上候御帳之控え』には、御領城の記載はない。御領城は、天草・島原の乱後に鈴木重成によって陣屋が置かれた本格的な中世城跡だけに報告書からの欠落は大きな謎であり、細川藩が作為的に御領城を報告書に記載しなかったと考えられる。興秋が隠蔽されていた御領城は興秋の死去 9 年後も細川藩にとっては最高機密の土地であり、絶対に外部に知られてはならない、触れてはならない最高秘密事項だった。御領城は城が破却放置された後、【芳證寺の境内となる以前】秘密裏に切支丹寺が建てられていたので興秋はこの寺に身を潜めたと考えられる。細川家にとつて御領城跡は隠さなければならない土地であり『慶安四年の差出』から御領城が欠落している最大の理由は興秋の隠蔽と深く係わっていると考えられる。

興秋の警護を担当していた長岡監物是季（米田監物是季）と全責任者の国家老長岡佐渡守興長（松井新太郎興長）は慶安 4 年（1651 年）には共に健在で、興秋の死去 9 年後といえども幕府との緊張関係は続いていて、興秋の隠蔽に深く係わっていた 2 人によって『江戸へ差上候御帳之控え』への御領城の不掲載は決定されたと推測される。

＊『五和町史資料編（その９）御領城跡・鬼池城跡』　五和町教育委員会発行
　御領・鬼池の中世城跡調査にあたって関係史料とその解題　鶴田倉蔵
（行書体　髙田重孝書き込み挿入）

1651 年（慶安 4）？月　　『*肥後国　江戸江差上候御帳之控え』を幕府に提出。

肥後国　江戸江差上候御帳之控え

江戸幕府が各藩に命じた実態調査。郷帳、城絵図、国絵図の作成と提出を命じたもの。数値を記した城絵図では、現存する（熊本）県内・中世城跡の約一割に当たる 61 城が報告されている。天草は、当時、細川在番時代で 15 城の記載がある。天草・島原の乱後の影響もあり、2 割強の掲載率である。（五和）町内関係では「下内野古城と城木場古城」が記載されている。

＊五和町史料編その九、御領城跡・鬼池城跡、8 頁より

御領城跡は南北 250m,東西 85～130m の広さを持ち、標高は北端で 16.63m、南端で

10.593m。高低差の少ない平たい城跡で、長円形の完全な独立区画で、中世城跡そのものの地形を有している。城跡に関連する「馬場」「堀」の字名と「城内」の小名も残されていて、本格的な麓集落（中世の城下町）が成立していたことを伺わせる。

推論より考えられる結論

天草・島原の乱の勃発により、八代に避難を余儀なくされた細川興秋一行は、八代城出丸にある細川家菩提寺である泰勝院は避け、まず父忠興の祈祷所であり、姉お長の菩提を弔うための寺、安昌院に避難したと推測される。細川興秋が天草・島原の乱で八代に避難した 1637 年(寛永 14)10 月下旬頃？から、天草の乱が終息した翌年 1638 年（寛永 15）3 月頃には、安昌院は上荒神丁にあった。

次に**薬師如来像の天草御領の長野家に伝わる伝承『天草の乱の時は、私の先祖の長野幾右衛門は薬師如来を抱いて、向こう岸に避難しましたところ、如来は毎朝，城内の元の御堂の方を向いておられたという、言い伝えがあります』**に従えば、薬師如来像を奉ることができる平河原町にある『薬師堂』へ時機を見て、上荒神丁にあった安昌院から移ったのではないだろうか。島原の原城が 1638 年（寛永 15）2 月 28 日に陥落。細川興秋一行は、政情が落ち着いた頃を見計らって、天草御領のキリシタン寺・長興寺に戻ったと考えられる。

時期については不明、あえて推測するならば、八代から島原の原城攻略のために出兵していた細川光尚が率いる八代の部隊の帰還と入れ違いに八代を離れ、天草の御領に戻ったのではないかと思われる。

小笠原備前守長元【58 歳】・長之親子は揃って出陣、天草・上島に 12 月 7 日渡った。しかし一揆勢はすでに島原の原城に撤退した後であり、小笠原備前守長元と清田石見を残して 14 日、全軍、河尻に帰陣した。1638 年（寛永 15）元日、総大将の板倉重昌が戦死。1 月 4 日、細川軍は有明海を渡り、須川で野営し翌 5 日に着陣した。天草に在番していた小笠原備前守長元、清田石見も急遽、参戦した。細川軍総勢 28,600 人、備えを指揮する備え頭に家老の松井、有吉、米田、小笠原と一門の細川立孝が勤めた。表向き米田監物是季は熊本留守居役を命じられている。左一番備え、長岡佐渡守、志水伯耆守 3,279 人は細川軍に於いて最も戦闘能力が高い部隊であり、原城三の丸を正面から、左二番備え、小笠原備前守長元は 1,303 人を率いて、原城三の丸の浜の方向から攻撃の指揮を執っている。旗本備えとして加賀山主馬は 232 人を率いて参戦、奥田権左衛門は 1,252 人を率いて参戦している。原城の戦いは 1638 年（寛永 15）2 月 27 日から 28 日にかけて凄惨を極め、籠城していた 3 万 7612 人（有馬記）のキリシタンは殲滅され、幕府軍も多大な犠牲を出して終焉した。

中浦ジュリアン神父が司牧していた島原地方、口之津、有家、有馬のキリシタン信徒達 2 万 3896 人、天草地方のキリシタン信徒達 1 万 3719 人がこの戦いに参加して犠牲になった。細川軍も死者 285 人、手負いの者 1,826 人を数えた。

（細川藩の記録による）

1638 年（寛永 15）2 月 28 日　　島原、原城陥落。参戦したキリシタン 3 万 7612 人は全員戦死。興秋【53 歳】

1639 年（寛永 16）10 月 1 日～1640 年（寛永十七）9 月頃まで
10 月　1 日　鈴木重成が天草の乱終了後の建て直しのため天草を調査する天草の荒廃の土地の開発を命じられる。（寛政重修諸家譜）

【推論】
戦後の混乱が収まった頃（時期は不明）興秋【53 歳】は御領の長興寺に戻ったと思われる。鈴木重成は御領城跡地、長興寺薬師堂の西隣に陣屋【茶屋】を建設して、ここを拠点として天草の調査にあたっている。この時長興寺薬師堂に於いて細川興秋【54 歳】に会ったと思われる。鈴木重成の細川興秋に出会ったときの驚きはいかばかりだったろうか。興秋の取ってきた行動、つまり御領組みの人々（鬼池、御領、佐伊津）に対しての乱への不参加の呼びかけと説得の努力を知り、鈴木重成は大いに感動したのではないだろうか。それゆえ興秋へはお構いなしとなったのではないだろうか。キリシタン達に匿われている興秋は鈴木重成と話合い、本来ならキリシタンとして罰せられるはずの御領の人々を処罰の対象から外してもらい救っている。鈴木重成に『御領の人々はお構いなし。キリシタン問題も不問。』と言わせて御領の人々の命を救った興秋の払った努力と粘り強い交渉、キリシタンとしての興秋の人格とを高く評価すべきではないだろうか。

御領芳證寺に伝えられている興秋の差していた*関の兼元

御領芳證寺に興秋の差していたと伝えられている*関の兼元（俗名関の孫六）の大小一振りの刀が納められている。この刀は興秋が不戦の証として（僧侶には必要のないものとして）、御領の人々をキリシタンと解っていながら暗黙の了承をして処罰の対象から外し、御領の人々を救ってくれた礼として鈴木重成に贈ったと思われる。鈴木重成も贈られた関の兼元をそのまま自分の腰に差したら、名刀故に弁明をしなければならなくなり、如いては全てが露見してしまう危険を防ぐために、1645 年（正保二）11 月 15 日、両親の菩提寺として建立した芳證寺に預け置いたと推測される。御領城跡地に鈴木重成の建てた陣屋【茶屋】がそのまま再利用されて芳證寺として建立されている。
この興秋の所持していた関の兼元（俗名関の孫六）が小笠原玄也一家の処刑されたときに使われた刀と同じ刀かどうかは不明。
堀内傳右衛門の覚書の内『加賀山隼人は切支丹宗門ニて妻子十二人切腹、田中古又助介錯彌六兼元刀ヒケズ右之刀見申候、今又助所持なりと伝々』
（加賀山隼人は切支丹宗門につき妻子十二人が切腹させられた。田中古又助が介錯した。執行には関の兼元（関の孫六）を使った。この刀は今、庫之助が所有している。）との記述が

あり、他の史料との違い等、事実関係考察の余地は多聞にあるように思える。

堀内傳右衛門の覚書の間違いと事実関係

1　加賀山隼人の御誅伐の仕手になったのは、山本三郎右衛門である。
『山本三四郎、後に三郎右衛門（三左衛門とも言）加賀山隼人被誅候時仕手被仰付』
（藩臣閥閲録巻之六仕物の部所載）

2　加賀山隼人の御誅伐のとき、妻、娘二人は処罰されてなく小倉を追放されてキリシタン庄屋にお預けになっている。
『しかし私（中浦ジュリアン神父）は、二人の乙女の優れた徳と勇気とに心をひかれる。二人は越中殿のために、家も故郷も父親も奪われた人たちである。父は殉教者ディエゴ（加賀山隼人）であった。私は敬意を表わしてその名をふたたびあげておく。追放の原因はキリシタン信仰であった。この父に劣らぬ二人の二女を我らの司祭（中浦ジュリアン神父）は別の町に訪問し感動に心が躍らざるを得なかった。』

＊　16・17 世紀イエズス会日本報告集　第Ⅱ期　第 3 巻　96 頁

3　田中氏は代々又助と称するから、古又助とある。小笠原玄也の仕手である。
（藩臣閥閲録巻之六仕物の部所載）

4 新撰御家譜原本巻五　忠利公の部に
『一、十二月廿三日、小笠原玄也妻子、下々迄惣而十六人於禅定院御誅伐、志賀休也、こさいしょう、貴理師旦に付同日御誅伐被仰付候』とある。

5　類族改所帳（細川家蔵）
『源八、女マリ、女クリ、佐左衛門、三右衛門、四郎、五郎、女土、権之助興父同日誅伐』

6　國家老・長岡監物書状、津川四郎右衛門ニ遣候書状之内（寛永十二年十二月廿四日付）
『小笠原玄也儀、相果可申旨被仰下候二付、昨廿三日於禅定院、玄也夫婦・息達以下十一人、女房達下女四人、合十五人誅伐之事二御座候、其段筆紙二難尽事、』
（小笠原玄也の件、相果てることが命じられたので、昨 23 日禅定院に於いて、玄也夫婦、子供達以下 11 人、女房達下女 4 人、合わせて 15 人が誅伐された。この件は筆紙に尽くし難い事である。）

第 1 の見解
個人的推測だが、天草まで興秋を警護してきた米田監物是季が小笠原玄也一家の処刑の総責任者なので、興秋が自分の愛刀を天草御領到着後に米田監物是季に託して、小笠原玄也の処刑のときに興秋所有の関の孫六が使用されたと考えるなら、刀の受け渡しと移動も確実性が出てくるので可能性は十分に考えられる。

第 2 の見解
興秋が愛刀を携えて山鹿庄村の泉福寺から天草御領城跡の切支丹寺への逃避行の時間的経

過と、玄也処刑までの時間的経過と距離的なことなどを考慮した場合、玄也一家の処刑のときに使用された関の兼元は興秋が所持していた刀とは別の刀と考える。細川家には他に数振りの関の兼元の存在が確認されているので、小笠原玄也と同じ時に処刑された『細川忠興の愛妾・小さい将』のために、夫である細川忠興が使わした別の刀と考えることもできる。

＊　御領芳證寺所有の関の兼元は、現在熊本の銀行に寄託、厳重に管理保管されている。

『兼元』美濃の国の刀鍛冶の流派。　関の孫六初代。　細川幽斎・忠興の愛刀。
兼元（かねもと）享禄（きょうろく）1523～31 年間　末古刀最上作『兼元』『兼元作』『濃州赤坂住兼元作』などと切る。初代兼元の子。俗名を『孫六』と呼ばれる。和泉守兼定と兄弟の契りを結んだ名工。刃文は尖り互の目で、『関の孫六三本杉』として有名。刀、無反り、先反り短刀が多い。地鉄小杢目。最上大業物　　（現在価格・約 1500～2000 万）

細川忠利病没する
1641 年(寛永 18) 3 月 17 日　　興秋の弟、肥後熊本藩主・細川忠利【55 歳】脳卒中のため熊本城にて死去。法名　妙解院台雲宗伍。

春頃
興秋の嫡子興季（おきすえ）【推定年齢 35 歳～31 歳】江戸より呼ばれ、天草初代代官鈴木重成の命により御領組みの大庄屋を預かる（池田家文書）興秋【56 歳】息子興季と 27 年ぶりに再会する。

9 月 19 日　鈴木重成が天草代官を命じられる（寛政重修諸家譜）

【家伝池田家文書より】
興秋の嫡子興季（おきすえ）、母の育父、中村半太夫の苗字を取り、中村五郎左衛門興季と名乗る。父興秋（宗専）【56 歳】は殊の外、嫡子興季の大庄屋就任を喜んだ。興秋にとっては 1614 年 10 月以前、興秋が大坂に陣に参戦のため、大阪城入城を前に息子興季を側室とともに側室の郷里である天草佐伊津に隠蔽するために返して以来、27 年振りの再会であった。御領に移ってきて息子興季との 27 年振りの再会と初めての心穏やかな家族生活だったから興秋の心からの喜びはいかばかりだったろうか。

11 月 15 日　　鈴木重成、熊本を訪ね細川藩家老と面談する（綿考輯録）
この時の家老が誰かは不明。おそらく国家老長岡佐渡守（松井新太郎興長）と、興秋の擁護責任者である米田監物是季【57 歳】ではないかと推測される。

細川興秋・病に倒れ死去する

1642 年(寛永 19)6 月 15 日　興秋、病没【57 歳】長興寺の前（薬師堂東側）に葬られる。
（池田家文書）**墓碑銘　長興前住泰月大和尚禅師薬師堂の位牌　長興寺殿慈徳宗専大居士**

【興秋の墓碑銘について】
興秋の墓碑銘には、細川家にゆかりのある文字が沢山使ってある。長興前住とは、長興寺の住職であった人という意味であり、長興寺の長は、長岡の長、（長岡は細川の元の名前）興は興秋の興、泰月大和尚禅師の泰は、興秋の祖父、細川幽齋の戒名、泰勝院殿徹宗玄旨大居士の泰であり、細川家の菩提寺の泰勝寺の泰でもあり、細川家にゆかりのある文字が沢山使ってあり、墓碑銘からしても細川家に連なった人物であることが伺える。

1643 年（寛永 20）12 月 25 日　　幕府が国絵図、郷村高帳の作成を命じる。

1644 年（正保元）12 月 22 日
富岡城番衆として南条大膳（興秋の娘鍋の夫）派遣される（綿考輯録）

1645 年（正保 2）5 月 11 日　細川中務少輔立孝【31 歳】、江戸に於いて死去。
7 月　5 日　　細川藩絵図奉行、天草絵図を完成させる。
11 月 15 日　　芳證禅寺【曹洞宗】、御領城跡内の陣屋（茶屋）を貰い受けて鈴木重成により建立される。（長興寺薬師堂の西側隣）

芳證禅寺
天草・島原の乱後、代官鈴木重成が仏教再興のため建立。自分の両親の戒名より「月圭山・芳證寺」という山号、寺号を命名した。「島鏡」に『寺屋敷東西弐拾四間、南北三拾壱間、此外薬師堂屋敷東西拾弐間、南北拾間、同所廻り畑弐反六畝支配之事』とある。
興秋の持参した薬師三尊を安置する長興寺薬師堂が芳證禅寺に合併されて創建された。
1648 年（慶安元）寺領 12 石を賜るが『ただし二石は薬師堂分』と但し書きがしてある。
これは鈴木重成が薬師堂の主は細川興秋であることを暗に認めている証拠であり、表向きに両親の菩提寺として芳證禅寺を創ったのは、細川藩の最高機密である興秋隠蔽の事実を匿うためであったと思われる。

12 月　2 日　　**細川忠興【83 歳】八代、北の丸に於いて死去。　法名　松向寺三斎宗立**

1647 年(正保 4)3 月　『霜女覚書』が細川光尚の命により提出される。
『霜女覚書』　永青文庫蔵　熊本県立図書館蔵

【霜女覚え書】　永青文庫蔵　熊本県立図書館蔵
細川光尚が正保 4 年（1647）3 月、江戸参勤に出る前に家老の長岡（米田）監物是季（これすえ）に命じて書状を以てガラシャ夫人の最後の様子を調べさせたとき、ガラシャ夫人の最後を見取った「霜（志も）」が翌慶安元年（1648）書付で差し出した報告書。「志も覚書」の他に「おく」という侍女の覚書が提出されたことが昔の目録には記載されているが現在は所在不明、内容について記されたものもない。

1649 年(慶安 2)7 月　8 日
天草絵図作成のため細川藩から田浦甚左衛門他一人が遣わされる。

1651 年（慶安 4）？月　　『*肥後国　江戸江差上候御帳之控え』を幕府に提出。
肥後国　江戸江差上候御帳之控え
江戸幕府が各藩に命じた実態調査。郷帳、城絵図、国絵図の作成と提出を命じたもの。
数値を記した城絵図では、現存する（熊本）県内・中世城跡の約一割に当たる 61 城が報告されている。天草は、当時、細川在番時代で 15 城の記載がある。天草・島原の乱後の影響もあり、2 割強の掲載率である。（五和）町内関係では「下内野古城と城木場古城」が記載されている。（五和町史料編その九、御領城跡・鬼池城跡、八頁より）

御領城跡は南北 250m,東西 85～130m の広さを持ち、標高は北端で 16.63m、南端で 10.593m。高低差の少ない平たい城跡で、長円形の完全な独立区画で、中世城跡そのものの地形を有している。城跡に関連する「馬場」「堀」の字名と「城内」の小名も残されていて、本格的な麓集落（中世の城下町）が成立していたことを伺わせる。
慶安四年（1651 年）肥後藩が古城の実態を報告提出した『肥後国　江戸江差上候御帳之控え』には、御領城の記載はない。御領城は、天草・島原の乱後に鈴木重成によって陣屋が置かれた本格的な中世城跡だけに報告書からの欠落は大きな謎であり、細川藩が作為的に御領城を報告書に記載しなかったと考えられる。興秋が隠蔽されていた御領城は興秋の死去 9 年後も細川藩にとっては最高機密の土地であり、絶対に外部に知られてはならない、触れてはならない最高秘密事項だった。御領城は城が破却放置された後、【芳證寺の境内となる以前】秘密裏に切支丹寺が建てられていたので興秋はこの寺に身を潜めたと考えられる。細川家にとつて御領城跡は隠さなければならない土地であり『慶安四年の差出』から御領城が欠落している最大の理由は興秋の隠蔽と深く係わっていると考えられる。
興秋の警護を担当していた長岡監物是季（米田監物是季）と全責任者の国家老長岡佐渡守興長（松井新太郎興長）は慶安 4 年（1651 年）には共に健在で、興秋の死去 9 年後といえども幕府との緊張関係は続いていて、興秋の隠蔽に深く係わっていた 2 人によって『江戸へ差上候御帳之控え』への御領城の不掲載は決定されたと推測される。
興秋の系譜自体は江戸時代後期、1802 年・享和二年・6 月 15 日に御領組、九代大庄屋長

岡五郎左衛門興道（1815 年・文化十二年・10 月 7 日死去）により書かれたものが池田家に伝えられていた池田家文書である。文書の系譜自体は江戸時代後期の編纂であるが資料的価値が高いと判断されている。

＊『五和町史資料編（その９）御領城跡・鬼池城跡』　五和町教育委員会発行
　御領・鬼池の中世城跡調査にあたって関係史料とその解題　鶴田倉蔵
（行書体　髙田重孝書き込み挿入）

1658 年（万治元）1 月 8 日
長岡監物是季（米田是季）死去。【73 歳】法名　雲祥院仁勇紹実居士。殉死 6 人。子孫は代々家老を務める。菩提寺は見性寺。熊本市坪井町 4 丁目。
見性寺及びその南側一体は米田氏の下屋敷地であり、開基年代は不明だが是季は 1658 年（万治元）に没し、明暦 1655～58 年頃の絵図にはまだ見性寺は見えないので、明暦の末頃の開基と思われる。初祖から三代までの霊廟、及び米田監物の大頌徳碑が建立されていて、東側に米田家の墓碑が並ぶ。

1661 年（寛文元）
長岡佐渡守興長（松井新太郎興長）死去。【81 歳】法名　智梅院松雲宗閑。殉死 9 名。子孫は代々八代城を預かった。松井新太郎興長　天正 8 年～寛文元年（1580 年～1661 年）
興長は、初め吉松、のち新太郎と名乗って細川忠興の一字を賜り興長と改めた。
又細川氏の別姓、長岡も賜った。通称は式部少輔、後に佐渡守を名乗る。従五位下を賜る。
1612 年（慶長 17）1 月 23 日、父、松井康之【63 歳】の死去に伴い、遺領 2 万 5000 石を拝領したが、1632 年（寛永 9）肥後入国に際して 3 万石に加増された。
1645 年（正保 2）12 月 2 日　細川忠興【83 歳】が八代城北の丸に於いて死去。法名松向寺三斎宗立。忠興死去後、八代城の取り扱いが問題になった時、松井興長が八代城を預かり守衛を任され、以後 10 代 225 年に渡り八代城は、松井家が守衛することとなった。また松井家は細川藩の筆頭家老（3 万石）として、細川家を支え続けた。興長の妻は細川忠興の 2 女古保で、跡継ぎは無く、忠興の 6 男を養子にして自分の娘と結婚させた

天草送付資料Ⅱ

細川興秋の生存に関する史料と状況証拠

880-0035
宮崎市下北方町横小路 5886－3

髙田重孝
☎ 0985・25・5467　Fax 0985・22・3628
Email shige705seiko214@outlook.jp
【57～83 頁】

四百年間解明されなかった興秋隠蔽に関するからくり

興秋を匿うために作られた不可思議寺
香春町採銅所・不可思議寺の成立過程

1605 年 1 月 12 日、出家出奔した興秋を京都から移し、興秋を匿うための寺を忠興の領地豊前に作るこの相談は細川幽斎と忠興の間で1608年末から1609年には出来上がっていて、秘密裏に場所の選定が成され、忠興の末弟・細川中務少輔孝之【香春岳城主・2 万 5000 石】に命じて、田川郡香春町採銅所に於いて寺の建設が実行に移された。香春岳城主高橋九郎元種の家老・行木（雪木）善兵衛を、本願寺第十二世教如法主に帰依させ、剃髪して法名を宗慶と号させ住職にさせた。完成は 1610 年（慶長十五年）5 月 10 日開創、法主より阿弥陀如来仏立像本尊を受け、開基創建している。寺の山号を不可思議山と言い、寺号を不可思議寺と言う。これにより豊前において興秋を匿う場所の準備は全て整っていた。

初代住職（第一世）宗慶は慶長 19 年（1614 年）12 月より病気を生じ、元和元年（1615 年）4 月 4 日に 71 歳にて寂定（往定・死去）している。在職期間 5 年。

第 2 世住職宗順は、初代住職宗慶の死後 1615 年～1632 年 12 月まで 18 年間、不可思議寺の住職を務めている。1632 年 12 月の細川藩肥後熊本へ移封に伴い、住職宗順は不可思議寺を出ている。

不可思議寺は細川藩が 1632 年（寛永 9）12 月に肥後に移った 2 年後、1634 年（寛永 11）8 月 7 日、第 3 世住職慶順の世代に至って寺号免許を取り、明善寺と号した。
＊　香春町町史　第一章　神社・寺院　723～724 頁　明善寺
＊　2011 年 4 月 4 日、明善寺蔵の古文書『永代志』から調査した記録による。

☆　不可思議寺第二世住職宗順は細川興秋であるとの前提のもとにこの論考を展開する。

不可思議寺第二世住職宗順に成りすまし隠棲した細川興秋

香春町採銅所明善寺【不可思議寺】古文書より【調査報告責任者・髙田重孝】
『永代志』による
1　慶長 15 年（1610 年）草創、開基雪木善兵衛となっている。雪木と行木との表記の違い。
2　行木（いくき）とは読まず,「ぎょうき和尚」と地元では呼んでいる。

3　初代住職・宗慶【63 歳】、1610 年（慶長 15）5 月 10 日開創、法主より阿弥陀如来仏立像本尊を受け、開基創建している。寺の山号を不可思議山、寺号を不可思議寺という。
4　初代住職・雪木善兵衛の法名は宗慶であり、宗順ではなかった。
5　初代住職（第一世）宗慶は慶長 19 年（1614 年）12 月より病気を生じ、元和元年（1615 年）4 月 4 日に 71 歳にて寂定（往定・死去）している。
初代住職・宗慶の在職任期間は 1610 年 5 月 10 日～1615 年 4 月 4 日となる。
6　第二世、宗順、以下不明【細川興秋と推測される】
7　第三世、慶順、　　【現明善寺住職、片山家の初代】
8　不可思議寺は細川藩が 1632 年（寛永 9）12 月に肥後に移った 2 年後、1634 年（寛永 11）8 月 7 日　第 3 世住職慶順の世代に至って寺号免許を取り、明善寺と号する。
＊　香春町町史　第一章　神社・寺院　723～724 頁　明善寺
＊　不可思議寺古文書、2011 年 4 月 4 日調査記録に基づく史料

不可思議寺初代住職・宗慶の死の意味するもの
【第 1 の疑問点】
初代住職，宗慶の病死について
1614 年（慶長 19）10 月 6 日、細川興秋【29 歳】は米田監物是季【30 歳】と共に大阪城に入城。12 月 21 日和睦成立。不可思議寺初代住職宗慶の 12 月発病は、大坂冬の陣が終わった時期と相前後して重なり、豊臣側の敗北がおおよそ細川忠興には読めた時期と重なる。
1615 年（元和元）4 月 4 日宗慶死去、4 月 19 日、徳川家康が忠興に出陣を命令。
4 月 28 日、細川軍、大坂夏の陣参戦のため摂州兵庫花熊浦に到着。細川忠興は小倉出発前に、採銅所不可思議寺の初代住職宗慶を病死（毒による暗殺）という形で取り除き、次の不可思議寺住職に興秋を迎えるための準備を整えて大坂夏の陣に出陣したと思われる。

細川藩の熊本への移封に伴い不可思議寺を出た第二世住職宗順・細川興秋
【第 2 の疑問点】
宗順和尚とはだれか？
何故宗順は細川藩の肥後熊本への移封に伴い不可思議寺を出たのか？
不可思議寺、第二世宗順の時代は、この明善寺【不可思議寺】古文書『永代志』と香春町史から計算すると、1615 年 4 月 4 日初代住職宗慶の病死以後～1632 年（元和元～寛永 9）12 月 6 日までの 18 年間となる。
1615 年（元和元）は大坂夏の陣が終了して、6 月 6 日細川興秋が京都で切腹させられた年。
1632 年（寛永 9）12 月は，豊前細川藩が肥後熊本に移封になって小倉を去った年。

不可思議寺に関しての状況証拠一覧

1　不可思議寺が作られた時期が、細川興秋の京都に於いて出奔した後、興秋を匿うために

細川幽斎の死去（1615 年 8 月 7 日）前に完成（1615 年 5 月 10 日）させている。

2　不可思議寺（明善寺）古文書には初代住職宗慶に関して詳しく不可思議寺成立の記録文書は残されている。

3　不可思議寺初代住職宗慶の 12 月発病は、大坂冬の陣が終わった時期と相前後して重なり、細川忠興に豊臣側の敗北がおおよそ読めた時期と重なる。4 月 4 日に宗慶は死去。4 月 19 日、徳川家康が忠興に出陣を命令。4 月 28 日、細川軍、大坂夏の陣参戦のため摂州兵庫花熊浦に到着。細川忠興は小倉出発前に、採銅所不可思議寺の初代住職宗慶を病死（毒による暗殺）という形で取り除き、次の不可思議寺の住職に興秋を迎えるための準備を整えて、大坂夏の陣に出陣したと考えられる。

4　不可思議寺初代住職宗慶の病死（1615 年 4 月 4 日）が、興秋切腹（6 月 6 日）の前であり、不可思議寺の第 2 世住職に興秋を据えるために、初代住職宗慶は毒殺・暗殺された可能性がある。

5　第 2 世宗順の住職在位期が、初代住職宗慶の不可解な病死以後から 1632 年 12 月の細川藩の肥後熊本への移封までの 18 年間となっている。

6　第 2 世宗順の在職中 18 年間の寺社記録が不可思議寺古文書（明善寺古文書）には何一つ残されてない。

7　第 2 世住職宗順は、1632 年 12 月、細川藩の肥後熊本移封と共に不可思議寺を出ている。

何故宗順は細川藩の肥後熊本移封に伴って不可思議寺を出なくてはならなかったか？

8　不可思議寺は細川藩が 1632 年（寛永 9）12 月に肥後に移った 2 年後、1634 年（寛永 11）8 月 7 日　第 3 世慶順の世代に至って寺号免許を取り、明善寺と号している。

それ以後の明善寺の記録は詳しく残されている。

＊　香春町町史　第一章　神社・寺院　723～724 頁　明善寺

9　不可思議寺の第 2 世住職宗順が、大坂の陣から 4 年後の 1618 年（元和四）と、6 年後の 1620 年（元和六）のイエズス会年報報告のなかの小笠原玄也の記録に混ざって記録されている。何故イエズス会年報告の中に細川興秋のことをわざわざ『徳の高い仏僧』として記録しなければならなかったのか？

1618 年年報（元和四）イエズス会年報 クリストファン・フェレイラ神父報告

『【細川興秋 33 歳は】その高い身分やキリスト教徒としての徳から言って、これを訪ねて慰めるに相応しい人物であるから、大きな危険を犯して神父【中浦ジュリアン神父 50 歳】がそこ【香春町採銅所鈴麦】に行ったが、泊めてくれた仏僧の助けがなかったならば発見され捕らえられるところであった。この仏僧【採銅所不可思議寺、住職宗順・細川興秋】は信仰の敵であり、神父が何者であるか知っていたにもかかわらず、徳の高い人であったから、その客【中浦ジュリアン神父】が発見され捕らえられることがないようにしてくれた。』

＊『天正少年使節の中浦ジュリアン』　結城了悟著　101～102 頁

1620 年年報（元和六）イエズス会年報 ロドリゲス・ジーラム神父報告
『【細川興秋 35 歳は】かつては富といい、権威といい、大名のごとき身分で、衣服にせよ、供廻りにせよ、容貌にせよ、人々が目を向けしめしものなるが、今や綴れて垢づき破れ下がったぼろをまとい、下層の職人、貧しい農民の中に混じり、最下級の奴隷か賤民階級の一人でもあるかの如く、自ら身を下ろして衣食を求め、いかなる賤務も厭わぬのである。我が会の神父【中浦ジュリアン神父 52 歳】はこの人【細川興秋】が故里にあって豊富な生活をするよりも、むしろ追放の身分となり、苛酷な運命に弄ばれるのを優れたりとするほど熱心に宗教を守ろうと、堅い決心をしているのを見出した。』
＊『16・17 世紀イエズス会日本報告集』　第二期　第 3 巻　95～96 頁　筑後・豊後国

不可思議寺に関して年月順に整理一覧
1610 年（慶長 15）　5 月 10 日
豊前国田川郡香春町採銅所に真宗大谷派、不可思議寺を創建する。
8 月 20 日　　細川幽斎、京都に於いて病のため死去【77 歳】

1614 年（慶長 19）10 月 24 日
徳川家康、忠興に毛利輝元らと合流して東上することを命令する。
12 月 21 日　　大坂冬の陣終了（12 月 21 日和睦成立）
12 月 29 日　　細川忠興、細川軍、小倉から大坂に向けて船出、。後出陣延期。
12 月？　　香春町採銅所不可思議寺の初代住職・宗慶（行木膳兵衛）病気に倒れる。
＊　明善寺蔵古文書『永代志』より

1615 年（元和元）　4 月　4 日
香春町採銅所不可思議寺の初代住職・宗慶 71 歳で寂定（死去）
4 月 19 日　　家康、忠興に出陣を命じる。
4 月 28 日　　細川軍、大坂夏の陣参戦のため摂州兵庫花熊浦に到着。
5 月 10 日　　大坂夏の陣終了。

細川興秋の埋葬場所も墓も寺も不明（現実には存在しない架空の場所）
1615 年 6 月　6 日　　興秋【30 歳】、京都伏見の東林院に於いて切腹させられる。
【池田家文書】伏見の稲荷山、南谷に埋葬。法名　黄梅院真月宗心。
興秋の墓は残されていない。興秋が切腹した東林院も京都伏見稲荷には存在しない。

米田監物是季の出世時期と細川興秋との関連性

米田監物是季の生涯略歴

1606 年（慶長 11）7 月 27 日　興秋の重臣、飯河父子、飯河肥後守、父飯河豊前守が誅罰される。この誅罰で郎党を含めて 22 名が討死にした。米田監物是季【22 歳】は、細川忠興に秘密裏に命じられて細川興秋の警護のために細川家を出て京都に住む。表向きは飯河誅罰事件について細川忠興との不和が原因と言われている。

1614 年（慶長 19）の秋頃、興秋【29 歳】は大坂方（西軍）の招きで大阪城に入城して、豊臣秀頼に仕え、11 月の冬の陣、翌 1615 年（元和元）5 月の夏の陣を戦っている。細川忠興は大坂の陣が始まる前に米田監物是季【30 歳】に大坂城陥落の際には興秋救出を秘密裏に命じて、豊臣方に加担させたと推測される。米田監物是季は大野主馬組の侍大将として 12 月 16 日、塙団右衛門直之と共に撃って出て南御堂の阿波徳島城主蜂須賀至鎮陣屋を夜襲。

1615 年 5 月 10 日、大阪城落城。細川忠興は大坂城落城とともに興秋の安否を必死に確かめた。米田監物是季は興秋の警護をして守り抜き、興秋を大阪城陥落の時に落ち延びさせ、無事に細川方に引き渡したと思われる。米田は脱出後、坂本の西教寺に蟄居していた。

1623 年（元和 9）8 月 28 日、徳川幕府が大阪籠城した浪人を赦免、召し抱えの許可を出す。米田監物是季【39 歳】、細川忠興から帰国を勧められ、忠興の招きにより破格の 2000 石を賜り、細川家に帰参している。

1625 年（寛永 2）【41 歳】6500 石で家老職。

1628 年（寛永 5）【44 歳】大阪城修築の責任者として大役を果たす。

1634 年（寛永 11）【50 歳】に 1 万石を賜る。

1635 年（寛永 12）【51 歳】12 月 23 日、小笠原玄也一家処刑の総責任者。

1638 年（寛永 15）【54 歳】天草・島原の乱の時には、熊本留守居役を命じられている。

1648 年（正保　4）【64 歳】長崎港にポルトガル船が来港した時、藩兵 1 万 1300 人、船 447 隻を率いて出動して大功を立てた。

1658 年（万治元）1 月 8 日死去。【73 歳】法名雲祥院仁勇紹実居士。殉死 6 人。

熊本市坪井町 4 丁目、見性寺に葬られる。子孫は代々家老を務める。

米田監物是季の出世時期と細川興秋との因果関係

【推論】

1606 年（慶長 11）　7 月 27 日

興秋の重臣、飯河父子、飯河肥後守、父飯河豊前守が誅罰される。この誅罰で郎党を含めて 22 名が討死にした。米田監物是季【22 歳】細川家を出る。表向き飯河誅罰事件について

細川忠興との不和が原因と言われている。米田監物是季は細川忠興に秘密裏に命じられて細川興秋の警護のために細川家を出て京都に住む。

1614 年（慶長 19）の秋頃、
興秋【29 歳】は大坂方（西軍）の招きで大阪城に入城して、豊臣秀頼に仕え、11 月の冬の陣、翌 1615 年（元和元）5 月の夏の陣を戦っている。細川忠興は大坂の陣が始まる前に米田監物是季【30 歳】に大坂城陥落の際の興秋救出を秘密裏に命じて、豊臣方に加担させたと推測される。米田監物是季は大野主馬組の侍大将として 12 月 16 日、塙団右衛門直之と共に撃って出て南御堂の阿波徳島城主蜂須賀至鎮陣屋を夜襲。1615 年 5 月 10 日、大阪城落城細川忠興は大坂城落城と共に興秋の安否を必死に確かめた。米田監物是季は興秋を大阪城から何としても助け出すために、興秋を警護して守り抜き、興秋を大阪城陥落の時に落ち延びさせ、無事に細川方に引き渡したと思われる。米田監物是季は興秋と共に脱出して坂本の西教寺に蟄居隠棲した。

1623 年（元和 9）8 月 28 日
徳川幕府が大坂の陣のとき豊臣方に加担した全ての武士・浪人に対して赦免、恩赦を与え召し抱えの許可を出す。これによりどの様な人物でも召抱ることが出来ることになった。
細川忠興は、京都坂本の西京寺に蟄居していた米田監物是季【39 歳】を 2000 石という破格の待遇で召抱えている。米田監物是季の招聘は、1606 年 7 月 27 日、興秋の重臣、飯河父子誅罰以後、京都に於いて興秋の警護を秘密裏にしてきたこと、大坂の陣に興秋とともに豊臣方に参加して興秋を警護したこと、大坂城陥落の時、興秋を城から連れ出して無事細川方へ届けた褒美と考えられる。
興秋の嫡男元服【15 歳前後】の時（推定 1621 年～1625 年）の命名からもこの事は推測される。米田監物是季は 1606 年 7 月以後、興秋の警護を担当しているので、二人は共に大坂の陣を戦い抜き、興秋は命を助けてもらい親密になった米田監物是季の一字・季を興秋が嫡男に貰い付けたと考えられる。また、季の字は細川家の縁戚関係系図、細川家、明智家、妻木家、沼田家、三淵家、松井家、寺沢家のどの系譜を見ても見出せない。興秋の嫡子興季の季の字は米田監物是季から取られたと思われる。、興季元服当時（推定 1621 年～1625 年）興秋の妻【妾】と嫡子興季は天草佐伊津にいたし、興秋は豊前田川郡香春町採銅所不可思議寺の住職だったので、互いの連絡の手段は両方の土地を行き来して宣教活動をしていた中浦ジュリアン神父に頼ったと推測できる。
1625 年（寛永 2）　？月
米田監物是季【41 歳】6500 石に加増され、家老職を命じられる。

1628 年（寛永 5）
米田監物是季【44 歳】大阪城修築の責任者として大役を果たす。

1634 年（寛永 11）？月
米田監物是季【50 歳】　1 万石を賜る。
おそらく米田監物是季が 1 万石を賜った背景に、1632 年の肥後熊本移封前に、興秋隠蔽先として山鹿郡鹿本町庄村に泉福寺を確保した褒美としての加増と考えられる。また今後、藩主細川忠利がキリシタン禁制を厳しく打ち出していく中で、兄興秋【49 歳】を次のより安全な土地へ移転させるための候補地を探すことへの報酬だと思われる。次の候補地は鹿本地方以上にキリシタン信者の多い興秋の側室の出身地である天草の御領を考えていたと思われる。天草の佐伊津、御領は興秋の側室（妾）、嫡子興季の郷里であり、また確固たる基盤を持つキリシタン信徒組織コンフラリアが存在していた。1617 年（元和三）のコーロス徴収文書に天草内野村の信徒代表として三名の名前が記載されている。（正確には内野村とは現在の城河原一帯を指し、井手組庄屋の長嶋家が代表）
天草御領のキリシタン大長嶋九兵衛【安当仁】、ささ原与兵衛【備前天】、飛瀬外記【伊即所】。御領は隠れキリシタン信徒の多い土地であり、興秋を隠すには廃城になっている御領城跡地が最適であり、すでにそこにはキリシタン寺が存在していた。おそらく米田監物是季は、秘密裏に天草御領の隠れキリシタンの代表者に興秋の受け入れを打診していたと思われる。当時、天草は唐津藩主、寺沢広高が拝領していて、幸いなことに 1633 年（寛永 10）に三宅藤兵衛が天草富岡番代になっている。（萬松山却記簿）三宅藤兵衛は細川忠興の妻、玉ガラシャ夫人の姉の子であり細川興秋と三宅藤兵衛は従兄弟同士である。寺沢広高の妻は妻木貞徳の娘、明智光秀の妻も妻木家の出身。明智、寺沢、細川家とのつながりは深い。この血縁関係も背景にあって、米田監物是季は寺沢領である天草だが、あえて興秋の隠棲場所として選択したと推測される。

細川興秋が天草御領へ移動した時期が池田家文書の言及する天草の乱の前と重なる事、及び訴人百姓仁左衛門と小笠原玄也一家の処刑との関連

興秋【50 歳】は 1635 年（寛永 12）10 月中旬から 10 月末、つまり山鹿郡庄村【現・鹿本町庄】の訴人百姓仁左衛門（助十郎とも）が長崎の奉行所に小笠原玄也を訴え出て、長崎の奉行所から細川藩へ問い合わせがあった時点（小笠原玄也一家は庄村の自宅に監禁された）で、興秋は身を隠すために山鹿郡庄村の泉福寺を密かに出て、山鹿から菊池川を（あるいは玉名を経て高瀬から）舟で下り、海路天草の御領に向ったと推測される。天草の御領の選定と隠蔽の準備は米田監物是季【51 歳】が天草御領の隠れキリシタンの代表者達と連絡を取り、全て手筈を整えていた。天草への渡海の準備と警護は米田監物是季の精鋭が務めたと推測される。小笠原玄也は興秋の身代わりの山羊（Scape Goat）だった。興秋の存在を表に出さないために、世間の目を興秋から逸らすため、興秋を逃がすために小笠原玄也一家 15 人は興秋の身代わりとなり犠牲となった。

小笠原玄也の遺書第九号・山田半左衛門宛の手紙の最後に
『申たく候文ニて申べく候へとも、熊（わざと）これを進申さず候。せすす・まりや申候。』
小笠原玄也の遺書第二号・御みやさま宛のかえし書に
『此の一ぶ（分）はこともあまた御さ候まま、しせんの事のためにと、そんし候て、おき申候。』

玄也の言いたいこととは何だったのか？　あえて言わずに死に臨んだこととは、人に言わずに神であるイエス・聖母マリアに言いたかった事とは何だったのか？
玄也の面目（一分）とはなんだったのか？　玄也一家を死にまで追いやったキリシタン信仰と細川家臣として庇い続けた細川興秋のことではなかったのだろうか。

米田監物是季の国家老長岡佐渡守宛の手紙に記録されていた細川興秋の安否

小笠原玄也一家の殉教の記録は、細川藩の記録にのみ見ることが出来る。
小笠原玄也処刑の総責任者・米田監物是季の国家老・長岡佐渡守宛 **1635 年 12 月 24 日付け**の手紙に、興秋の安否が『**御やと御無事二御座候**』と書いてある。

國家老・長岡監物書状、長岡佐渡守二遣候書状之内（寛永十二年十二月廿四日付）
『御やと御無事二御座候、爰元相替儀無御座候、併玄也儀二付而、何も気をつめ申候処、相済らち明申候而、今ハ何も落着申候、』
『御主人は御無事です。こちらは変わりありません。しかし玄也の件については、何とも気を詰めていましたが、処罰が済み解決しました。今はすべて落着しました。』

小笠原玄也処刑の総責任者・米田監物是季【51 歳】の国家老・長岡佐渡守宛 1635 年 12 月 24 日付けの手紙に、興秋【50 歳】の安否が『**御やと御無事二御座候**』と書いてある。米田監物是季が小笠原玄也の処刑報告の冒頭に興秋の安否を『**御やと御無事ニ御座候**』と報告している。米田監物是季にとっての御主人とは細川興秋であり、米田監物是季は大坂の陣以来、興秋の警護を担当し隠蔽の全責任を負っていた。このことは興秋と小笠原玄也とが行動をともにしていたことも示している。この時、藩主細川忠利は江戸に在勤、父忠興は八代にいることが国家老の長岡佐渡守（松井新太郎興長）、長岡（米田）監物是季の両名には分かっているのに、『御やと御無事二御座候』との報告は、興秋についての安否報告であり、米田監物是季のこの手紙は、この時点で細川興秋が生存していて、小笠原玄也の一件に巻き込まれずに無事に鹿本町庄村泉福寺から天草御領のキリシタン寺に逃亡したことを示す唯一の重要な証拠となっている。当時、天草は唐津藩主、寺沢広高が拝領していて、1633 年（寛永 10）以来、三宅藤兵衛が天草富岡番代になっていた。（萬松山却記簿）三宅藤兵衛は細川忠興の妻、玉ガラシャ夫人の姉の子であり細川興秋と三宅藤兵衛は従兄弟同士である。寺沢広高の妻は妻木貞徳の娘、明智光秀の妻も妻木家の出身。明智家、寺沢家ともに、細川家と

のつながりが深い親戚関係である。米田監物是季はこの血縁関係も考慮に入れ、あえて寺沢藩領の天草御領を選択したと推測される。
天草の佐伊津、御領は興秋の側室（妾）、嫡子興季の郷里であり、また確固たる基盤を持つキリシタン信徒組織コンフラリアが存在していた。1617 年（元和三）のコーロス徴収文書に天草内野村の信徒代表として三名の名前が記載されている。（正確には内野村とは現在の城河原一帯を指し、井手組庄屋の長嶋家が代表）。天草御領のキリシタン大長嶋九兵衛【安当仁】、ささ原与兵衛【備前天】、飛瀬外記【伊即所】。秘密裏に米田監物是季が興秋の受け入れを打診していたと思われる。米田監物是季はこれらのキリシタンコンフラリア・信徒組織代表者に連絡を取り、すでに秘密のキリシタン礼拝堂のあった御領城跡に興秋は隠れ住んだ。切支丹寺（礼拝堂）をカモフラージュするために後に長興寺を建立した。表面的には長興寺の住職として興秋は身を隠して潜伏、法名も宗順から宗専に変えて、御領周辺のキリシタン達を庄屋達三人と協力して共に指導したと思われる。
これらは**天草に伝わっている『細川興秋は熊本より天草の乱の前に移ってきた。天草の乱に際しては細川興秋公と長野幾右衛門家重様は島民に乱徒に組みしないように説いて回った』という伝承口伝**とも一致する。

口伝を立証する天草・島原の乱の記録より

天草に伝わっている『細川興秋は熊本より天草の乱の前に移ってきた。天草の乱に際しては細川興秋公と長野幾右衛門家重様は島民に乱徒に組みしないように説いて回った』という伝承・口伝

口伝を裏付ける井口少左衛門の報告書

井口少左衛門より熊本藩三家老へ（御書捧書写言上　）寛永 14 年 11 月 17 日付け
天草へ参様子承届候覚
『一、十一月十六日ニ天草の内五料（御領）と申浦へ着仕候、五料（御領）村の百姓共ハ此中きりしたんニては無御座候ニ付て、一揆とも五料村を放火仕候故、五料村の百姓共ハ逃散り舟ニ乗居申候処、一揆共申候は、きりしたんに成候ハバ組ニ入可申候、無左候ハバ討果し可申候と申ニ付て、無了簡昨日十六日ニ五料村の者共きりしたんニ成申候由申候、家共ハ悉く焼払申候ニ付て、五料の百姓共ハ船ニ其侭居申候、此様子尋申候百姓ハ、五料村の内蔵丞と申者ニて御座候事、』以下省略
＊原史料で綴る天草島原の乱　0406　井口少左衛門より熊本藩三家老へ　289 頁
＊寛永平塞録　熊本細川藩原城の乱記録　53 頁
『本戸（本渡）の近所御領と申所へ同十六日昼の八ツ時分【午後 2 時頃】に着仕候村々浜辺にのぼりを立置岡へ船を引上とまをふきくるすを立居申候私を見候て船より一人立ちあがり申候此方商人の儀に候か私申候は是はおひただ敷躰何たる儀哉と尋申候処に彼者申候は切支丹起候て此在所も放火仕に付て百姓共此中船に乗沖にゆられ居申候得共一揆共申候は

切支丹に成申候はば組に入可申候無左候はば悉く討果可申候由に付て不及是非十六日の朝御領村居不残切支丹に成申候由申候』

＊写本　『肥前有馬切支丹一揆根源』（九州大学図書館所蔵）『天草土賊城中之話』（『改定史跡集覧』第 16 冊　266 頁

＊『山田右衛門作口書写』（『島原半島史』）中巻 190 頁

大意

本渡の近所御領に 16 日の八ツ（午後 2 時頃）船を着けた。村では浜辺に幟を立て陸に引き揚げてられた船にも、苫（とま）をおおいクルスが立てられていた。船内から一人の男が私を見て立ちあがった。少左衛門は『商売に来たものであるが、この仰々しい様子は何事か』と尋ねた。男は内蔵丞という農民で、この男の話によると『御料はキリシタンではなかったから、一揆軍が村に放火して焼き払った。村人は逃げ去り、船で沖に避難して揺られていた。一揆軍は村人に『キリシタンになるなら組に入れてやるが、ならないなら討ち殺してしまう』とのことで、16 日朝、御領村人は仕方なくみんなキリシタンになりました。三宅藤兵衛殿も 14 日の合戦で討ち死にされました。わたしも藤兵衛殿知行地の百姓なので首が晒されている所まで行き拝んでまいりました』また、一揆軍は 17 日朝、富岡城を責める予定で、御領から西の二江に四朗が本陣を構えている、と少左衛門に答えた。

一揆軍は一万の兵を五手に分けて、一組ごとに頭を決めて、本渡から富岡までの五里の間の村々を焼き払っていった。キリシタンに背くものは殺されるので、これらの村の者達は、表面上皆キリシタンに加わるようになった。

井口少左衛門より熊本藩三家老へ（御書捧書写言上　）寛永 14 年 11 月 17 日付け

井口左衛門はこの旨を 17 日高瀬へ出張して来ていた熊本藩家老、長岡佐渡守、有吉頼母に報告したところ，至急に府内【大分】の御目付にも報告するようにとのことで、19 日昼八ツ時（午後 2 時頃）府内に行き報告した。御目付はこの井口左衛門の報告を早速江戸への御書として書き送った。それまで江戸では島原のことだけしか報告を受けていなかった。

1 月 26 日、井口左衛門の報告書が府内目付によって幕府へ届けられ、この報告が初めての天草の状況報告になった。翌 27 日、評定所にて審議され、再度追討上使・松平伊豆守信綱派遣のきっかけとなった。この意味でも井口左衛門の偵察と報告の意義は大きい。

後日、井口少左衛門は細川忠利より感状をもらっている。細川忠利から『姿を変え、心を砕き賊の中に忍び入り良く働いた』として新知二百石の加増、馬回組になった。原城攻めでも立花左近へ使いに立つなどして相当の働きがあった。

御領でもキリシタン一揆勢が攻めてきた。それで村人たちは船に乗り沖に漕ぎ出して難を逃れた。運悪く捕まった者たちに、一揆の者が『キリシタンに成るなら組に入れてやる。しかし、ならないなら討ち果たす』と脅したので、仕方なく皆なキリシタンになりました。

一揆に加担しなければ『討ち果たす』とか『家に火をつける』と言って脅し強要したことが解る。その頃、各地で頻繁に火災が発生しているのは一揆勢が放火をしたためと思われる。したがって、一揆に同心しないものは山に隠れたり、船に乗り沖に漕ぎ出して難を逃れたりしている。火災の記録を見ると、11 月 16～17 日にかけて本渡から富岡の間の村々で家々が放火されている。

細川興秋と長野幾右衛門家重が島民に乱徒に組みしないように説いて回ったという伝承・口伝とも一致する天草・島原の乱に参加しなかった村々・原城に籠城しなかった村々の参加人数と地図【別紙参照】

志岐村 102 名、坂瀬川村 0 名、ニ江村 30 名、下内野村 0 名、上内野村 0 名、荒河内村 0 名、

城木場村 0 名、鬼池村 0 名、御領村 0 名、佐伊津村 0 名、本村 0 名、新休村 0 名、下川内村 0 名、本泉村 0 名、広瀬村 0 名、本戸馬場村 0 名、

＊『松平氏覚書』（内閣文庫）出典

＊再海の乱　下巻　鶴田文史著　西海文化史研究所発行

乱の天草一揆参加状況地図　94～95 頁

原城一揆勢総数一覧　98 頁

乱の天草一揆参加状況地図 94～95 頁、原城一揆勢総数一覧 98 頁でも判る通り、興秋が住んでいた御領を中心として北西は坂瀬川村、西は本村、南は本戸馬場村を境とした地域が天草の乱に参加しなかった。この地域は 1617 年（元和 3）8 月 29 日付けで中浦ジュリアン神父が中心となって作成した『イエズス会士コーロス徴収文書』に署名しているキリシタン代表者達が治める地域であり、信徒組織・コンフラリアが強固に確立されている地域でもあった。同地域とコーロス徴収文書に重複する村名と代表者名を下記に揚げる。

内野村　大長嶋九兵衛・安当仁、ささ原与兵衛・備前天、飛瀬外記・伊那所、

二江村　松田杢左衛門・はうろ、宮崎権兵衛・理庵、茂嶋与三兵衛・はうろ、

坂瀬川村　川崎市右衛門・平とろ、溝野上与四右衛門・さんちょ、前田弥右衛門・とめい、

下津深江村　西嶋金七郎・志ゆ阿ん、西嶋右馬丞・ふらんそ、

＊イエズス会士コーロス徴収文書　第 45 文書　肥後国　天草　1104～1108 頁　『近世初期日本関係南蛮史料の研究』松田毅一著

長興寺

長興寺の号は、長岡の長、興秋の興、を取って長興寺と名付けた。元々は切支丹寺。

長興寺の建てられていた場所は、興秋の七代目の子孫、長岡五郎左衛門源興道が 1802 年（享和 2）壬戌 6 月 15 日建之した墓のある現在地周辺付近と推測される。

つまり長興寺が朽ちて後、その同じ場所に興秋の死後 160 年にして現在の興秋の墓を、興秋の七代目の子孫、長岡五郎左衛門源興道が建てたと考えられる。
1648 年以降、長興寺薬師堂の御領城内の建てられていた場所については、江戸時代の御領城跡芳證寺所有の二枚の絵図（見取り図）に克明な記録が残されている。御領城地は廃城後、切支丹寺が建立され、鈴木重成時代の茶屋（陣所）を経て、1648 年から芳證寺の境内と墓地になった。（芳證寺文書による）【見取り図参照】

1637 年（寛永 14）10 月 25 日　　天草の乱勃発。興秋【52 歳】
10 月 26 日　　長岡監物（米田是季）【53 歳】熊本の自宅で島原の乱の大筒の音を聞く。
11 月 14 日　　三宅藤兵衛（興秋の従兄弟）、天草富岡城代、本渡の戦いに於いて戦死。
11 月 16 日　　井口少左衛門、御領へ偵察のために上陸して、情報を収集する。
11 月 17 日　　井口少左衛門、高瀬の熊本藩家老、長岡佐渡守、有吉頼母に報告

【推論】
1637 年（寛永 14）10 月 26 日夜、細川藩家老長岡監物是季【53 歳】＜小笠原玄也一家処刑責任者＞は自宅で、備頭の長岡（沼田）勘解由延之（5000 石、39 歳）を招いて囲碁の会を催していたとき、『不思議なことだ。西南の方向（島原）に大筒の響きを聞いた。世の常ではない。いまひとつ響けば兵乱である。様子を調べよ』と言い、その夜のうちに、長岡（松井）佐渡守興長（3 万石、56 歳）と、有吉頼母佐英貴（1 万 8500 石、38 歳）と相談・状況把握をしている。天草・島原の乱の勃発である。細川藩家老・長岡監物是季は細川興秋【52 歳】の警護責任者であり保護者でもあるので、おそらく、事前に御領のキリシタン指導者庄屋達から『もし一揆にでもなれば、興秋様をどちらに御移しすればよいだろうか？』との相談・連絡を秘密裏に受けていて、天草・島原での不穏な動きを十分に察知して警戒をしていたと考えられる。興秋を安全な場所に避難誘導して匿うために米田監物是季はすぐさま行動を起こしたと推測される。天草・島原の乱に於いて、歴戦の剛の者である米田監物是季があえて熊本留守居役を務めている理由には、興秋の安全と保護を第一に優先して正規の細川軍とは別に秘密裏に単独行動しなければならなかったためと考えられる。
興秋【52 歳】は、表面上は御領の長興寺薬師堂の住職に扮しているので、興秋を知らない他の天草・島原の決起したキリシタン達から命を狙われる危険があった。おそらく御領地区キリシタン信徒代表の大長嶋九兵衛、ささ原与兵衛、飛瀬外記達の忠告を受け入れ、三人に後を託して乱勃発と同時か直後に御領を離れ*海路、父忠興【75 歳】の城のある八代の盛光寺・安昌院（八代市本町 3 丁目 3－8）か泰巌寺に身を隠したと思われる。移動の際の手引き及び警護は、大坂の陣以来の興秋の警護を担当していた細川藩家老米田監物是季が単独で務めたと推測される。
盛光寺は 1623 年（元和９）6 月 17 日、豊前中津で病死した忠興の愛妾・小山りんの菩提をともらうために建立された寺で、りんの法名・西光寺法樹栄林から西光寺と号した。

三斎に伴って八代城下に移転。その後、盛光寺と改名した。盛光寺には興秋の姉であり、忠興の長女・お長（1603 年・慶長 8・9 月 29 日、出雲に於いて死去・前野出雲守長重の後妻）の位牌が祀ってある安昌院も合併していた。**安昌院**は、西光寺住職の隠居所として最初から住職をおかずに西光寺住職の掛けもちとして、隠居した住職にお長の位牌を守らせていた。西光寺は三斎公（忠興）の祈祷所だった。西光寺には忠興が拝んでいた阿弥陀如来像が祭られている。この阿弥陀如来像は鎌倉前期（12 世紀～13 世紀初期）の古いもので、桧の寄木造り、彫眼、漆伯、像高さ 69，5cm の洗練された姿をしている。京都の高名な仏師の作と思われるが、仏師の名前は不明。この阿弥陀如来像は平安時代の優美さを残しつつ、新しい鎌倉時代の力強い表見を併せ持ち、武士が好んだ質実剛健の精神を感じさせる。盛光寺は三斎公（忠興）の祈祷所だった。細川家にとって最も大事な**菩提寺・泰厳寺**は当時、今の盛光寺と善正寺（八代市本町 4 丁目 18－7）の中間付近（平川原町の北、細工町の南）に建っていた。泰厳寺は細川幽斎の菩提をともらうため、忠興が小倉に建てた泰勝院を 1632 年（寛永 9）八代に入城した翌年、1633 年（寛永 10）にこの地に移した。当然、興秋は細川家ゆかりの二つの寺に身を隠したと推測される。泰厳寺も盛光寺も父忠興の住んでいた北の丸（現・松井神社）とは指呼の距離。後に泰厳寺は 1675 年（延宝 3）落雷で全焼したので、松井家菩提所となっていた宗雲寺を古麓山下に新築なった春光寺に移転して、八代城出丸の三斎創建ゆかりの泰勝院跡地を 1677 年（延宝 5）泰厳寺とした。*海路を見ると【地図で確認して見ると】御領から天草松島の池島の瀬戸、（満越の瀬戸）柳の瀬戸、大戸の瀬戸を通り八代までほぼ東方向に直線で結べる。特に夜陰に紛れての船による移動なら、誰とも接触せず人目にもつかずに八代まで安全に航行することが出来たと思われる。

1638 年（寛永 15）2 月 28 日
島原、原の城陥落。参戦したキリシタン 3 万 7612 人（有馬記）は全員戦死。興秋【53 歳】
11 月 15 日
鈴木重成、熊本を訪ね細川藩家老と面談する（綿考輯録）
この時、鈴木重成と面談した家老が誰かは不明。おそらく国家老長岡佐渡守（松井新太郎興長）と興秋の擁護責任者である米田監物是季【54 歳】と推測される。
天草・島原の乱後の天草御領に隠棲している細川興秋の処遇をめぐっての相談と秘密の取引、乱後の天草の復興の話し合いが成されたと推測される。

16・17 世紀イエズス会日本報告集に記録されている細川興秋と小笠原玄也と中浦ジュリアン神父の関わりに付いて。細川興秋と行動を共にした小笠原玄也

1614 年（慶長 19）　5 月初旬
中浦ジュリアン神父【46 歳】危険を犯して小倉城内に潜入、二の丸の加賀山隼人興良宅に監禁されている小笠原玄也一家を訪ねる。（現・小倉城内二の丸跡・北九州 NHK 放送局）

＊　1614 年イエズス会年報記録　ガブリエル・デ・マットス神父報告による
　　『16・17 世紀イエズス会日本報告集』　第二期　第二巻　127～129 頁

10 月頃
小笠原玄也、小倉城二の丸の加賀山隼人興良宅を追放され香春町中津原浦松地区の農家に監禁され、厳重な監視下に置かれる。監視は香春岳城主細川中務少輔孝之の家来が担当した。香春町中津原浦松の山の上には愛宕山照智院が、慶長年間の火災により焼失。細川忠興が僧永椿に命じて再興に当たらせ、寺禄 50 石を賜り、営繕の費用に充てられた。山上の照智院から永椿に小笠原玄也一家の監視をさせていたと推測される。
＊　1618 年イエズス会年報記録　クリストファン・フェレイラ神父報告による
　　『天正少年使節の中浦ジュリアン』　結城了悟著　101～102 頁
＊　香春町町史　下巻　721 頁　愛宕山照智院

大坂の陣から 4 年後の 1618 年（元和四）と、6 年後の 1620 年（元和六）のイエズス会年報報告のなかの小笠原玄也の記録に混ざって、細川興秋が記録されている。

1618 年（元和４）　？月
中浦ジュリアン神父【50 歳】、香春町採銅所鈴麦の不可思議寺に興秋【33 歳】と香春町中津原浦松地区に小笠原玄也を訪問。中浦ジュリアン神父、逮捕を免れて不可思議寺の住職宗順（興秋）に匿われて不可思議寺に宿泊する。
＊　1618 年イエズス会年報記録　クリストファン・フェレイラ神父報告による
　　『天正少年使節の中浦ジュリアン』　結城了悟著　101～102 頁

1618 年年報（元和四）イエズス会年報　クリストファン・フェレイラ神父報告
『いま具体的に述べるが、信仰のために追放されたキリシタンの中に殉教者ディオゴ加賀山隼人の娘婿【小笠原玄也】とその妻及び八人の子供がいる。彼らは豊前の領主、長岡越中殿【細川忠興】によって、数名の貧しい農民だけがすんでいる人里離れた土地【香春町中津原字浦松地区】に追放され、その土地から出ることはおろか居住する家からも出ないように監視されている。**【細川興秋 33 歳は】その高い身分やキリスト教徒としての徳から言って、これを訪ねて慰めるに相応しい人物であるから、大きな危険を犯して神父【中浦ジュリアン神父 50 歳】がそこ【香春町採銅所鈴麦】に行ったが、泊めてくれた仏僧の助けがなかったならば発見され捕らえられるところであった。この仏僧【採銅所不可思議寺、住職宗順・細川興秋】は信仰の敵であり、神父が何者であるか知っていたにもかかわらず、徳の高い人であったから、その客【中浦ジュリアン神父】が発見され捕らえられることがないようにしてくれた。**それで神の特別な御摂理によって危険から逃れることができた。また同じく神の御心によって神父が企図した目的も都合よく運ばずにはいなかった。』

＊　『天正少年使節の中浦ジュリアン』　結城了悟著　101～102 頁

1620 年年報（元和六）イエズス会年報　ロドリゲス・ジーラム神父報告
『**【細川興秋 35 歳は】かつては富といい、権威といい、大名のごとき身分で、衣服にせよ、供廻りにせよ、容貌にせよ、人々が目を向けしめしものなるが、今や綴れて垢づき破れ下がったぼろをまとい、下層の職人、貧しい農民の中に混じり、最下級の奴隷か賤民階級の一人でもあるかの如く、自ら身を下ろして衣食を求め、いかなる賤務も厭わぬのである。我が会の神父【中浦ジュリアン神父 52 歳】はこの人【細川興秋】が故里にあって豊富な生活をするよりも、むしろ追放の身分となり、苛酷な運命に弄ばれるのを優れたりとするほど熱心に宗教を守ろうと、堅い決心をしているのを見出した。**』
＊『16・17 世紀イエズス会日本報告集』　第二期　第 3 巻　95～96 頁　筑後・豊後国

1619 年（元和５）10 月 15 日
加賀山隼人【54 歳】、豊前小倉に於いて斬首処刑（殉教）、加賀山半左衛門【49 歳】、息子ディエゴ【4 歳】、豊後日出に於いて斬首処刑（殉教）される。
香春町中津原浦松地区に監禁されていた小笠原玄也の下に運ばれて玄也の家の近くに埋葬される。　イエズス会 1619 年年報の記録による
＊『16・17 世紀イエズス会日本報告集』　第二期　第 3 巻　38～40 頁

1620 年（元和 6）　？月
中浦ジュリアン神父【52 歳】、採銅所不可思議寺に第 2 世住職宗順・細川興秋【35 歳】を訪問する。小笠原玄也を香春町中津原浦松地区に訪問する。
＊　イエズス会 1620 年年報の記録による

1620 年年報（元和 6）イエズス会年報　ロドリゲス・ジーラム神父報告
『**【細川興秋 35 歳は】かつては富といい、権威といい、大名のごとき身分で、衣服にせよ、供廻りにせよ、容貌にせよ、人々に目を向けしめしものなるが、今や綴れて垢づき破れ下がったぼろをまとい、下層の職人、貧しい農民の中に混じり、最下級の奴隷か賤民階級の一人でもあるかの如く、自ら身を下ろして衣食を求め、いかなる賤務も厭わぬのである。我が会の神父【中浦ジュリアン神父】はこの人【細川興秋】が故里にあって豊富な生活をするよりも、むしろ追放の身分となり、苛酷な運命に弄ばれるのを優れたりとするほど熱心に宗教を守ろうと、堅い決心をしているのを見出した。**』
＊『16・17 世紀イエズス会日本報告集』　第二期　第 3 巻　95～96 頁　筑後・豊後国

山鹿郡鹿本町庄村泉福寺に於いての細川興秋

1632 年 12 月 6 日、細川忠利【46 歳】は肥後熊本に移封のため秋月街道を南下、香春町採

銅所にて興秋【47 歳】と小笠原玄也の家族は米田監物是季【48 歳】の部隊に紛れ込むようにして香春町採銅所の不可思議寺を出て山鹿まで移動、興秋は 12 月 9 日夜半に山鹿を出立した部隊と別れて、山鹿から山鹿郡鹿本町庄村の泉福寺【真言宗大谷派・山鹿金剛乗寺の末寺】に向かい泉福寺の住職として隠棲したと考えられる。住職の名前は不可思議寺のときに名乗っていた宗順なのか、あるいは天草の池田家文書に書いてある宗専と名乗ったのかは不明。【小笠原玄也の家族はそのまま熊本の塩屋町へ入ったと思われる】
1632 年（寛永 9）12 月、細川忠利が肥後に移封されてきた。移封前の調査で細川忠利はキリシタンが天草と鹿本地区に多く居住していることを把握していて、特に鹿本地区の小西一族に対して寛大な処遇をしている。この時代背景があったからこそ、実兄興秋と小笠原玄也一家をキリシタンの多い鹿本地方の中富地区、庄地区付近に隠したのであろう。
小笠原玄也の遺著 9 号の中の『慈悲頼みます』の言葉も、この地区で活動していた慈悲の組・ミゼリコルジアの存在と、信徒組織・コンフラリアの存在を裏付ける発言として捉えることができる。『熊本県未解放部落史研究』（第 1 集、第 2 集）によると鹿本郡鹿本町御宇田村付近に被差別部落（穢多部落）があり、被差別部落の外れにはハンセン病（癩病）患者収容施設があったことなどから考えると、これら貧しい人々のために玄也達、慈悲の組の人々がハンセン病の治療や施し、慈善貧困救済活動をしていたと考えられる。

1632 年（寛永 9）12 月　9 日
豊前細川藩、細川忠利【46 歳】の肥後熊本への移封、熊本入。
忠利、肥後入国に際、南関・山鹿に宿泊している。
＊　寛永 9 年（1632）11 月 24 日之触状　『綿考輯録』第四巻　296~317 頁

1634 年（寛永 11）　6 月 28 日
第一之制札（キリシタン禁令）が建てられる。
8 月　7 日
香春町採銅所の不可思議寺、第 3 世住職『慶順』の世代に至って寺号免許を取り明善寺と号する。不可思議寺は細川藩が 1632 年（寛永 9）12 月に肥後に移った 2 年後、1634 年（寛永 11）8 月　7 日、『慶順』の世代に至って寺号免許を取り、明善寺と号した。
＊　香春町町史　第一章　神社・寺院　723～724 頁　明善寺

1635 年（寛永 12）　6 月 20 日
小笠原玄也の 10 番目の 4 女お類、病気のため死去。山鹿郡庄村の自宅付近に葬られる。
＊『マンショ 5 号』　小笠原玄也の遺書　鉱脈社
（小笠原玄也遺書第 7 号、みや遺書第 11 号にお類死去の話が出てくる）
7 月 10 日
興秋の側室、天草の佐伊津か御領に於いて死去。法名　月山妙雲大姉（芳證寺過去帳）

庄村訴人仁左衛門【助十郎】、興秋の天草御領への逃亡、小笠原玄也の一家の処刑

7 月 29 日

第二之制札（高札）

1635 年（寛永 12）細川藩領内において、領民全てに対して寺請、起請文を取り、人別改めを行い、キリシタン探索を徹底させている。この年、南蛮誓詞が初めて肥後において踏み絵とともに導入されている。『第二之制札』が 7 月 29 日、長崎奉行、榊原飛騨守の名によって建てられた。高札の文面は次の通りである。【文面省略？】

山鹿に建てられたこの高札を見て、山鹿郡庄村の百姓・仁左衛門（助十郎とも称している）が、懸賞金欲しさに九州の切支丹総取り締まりである長崎奉行所に、10 月始め頃、仁左衛門の近くに隠れて住んでいた小笠原玄也一家を訴え出た。

仁左衛門の心に一層火をつけたのが 7 月 29 日に*下高橋の高札場に立てられた第二のキリシタン禁令の制札（高札）だった。七月、八月、九月の 3 ヶ月の観察の時を経て玄也一家がキリシタンであるとの確証を掴んだ仁左衛門は、9 月下旬～10 月上旬、地元山鹿の番所ではなく熊本の寺社奉行でもなく、約 5 日間、約 180 ㌔を歩み通して長崎の立山奉行所に訴え出た。

＊　細川藩『日帳』（御奉行所日帳・御奉行所日記）寛永 12 年 11 月 2 日の項に
『山鹿郡庄村の仁左衛門、玄也ノ訴人二罷出候二付、銀子弐拾枚被遣候事』とあり、
また、同年 12 月 3 日付けの細川忠利書状に
『山鹿郡庄村之助十郎二相尋候書物、請取候、彼者ニ褒美仕可然由、榊飛騨殿・・・・銀子弐拾枚遣由』とある。

小笠原玄也一家の逮捕と処刑との関連

10 月下旬、玄也達は鹿本町庄村の自宅に監禁される。

11 月　4 日

小笠原玄也、熊本塩屋町田中兵庫屋敷裏の座敷牢に入る【50 日の間に*15 通の遺書を書く】

12 月 23 日

小笠原玄也一家 15 人、禅定寺にて斬首処刑されて、祇園山（現・花岡山）に葬られる。

忠興の側室、小さい将【58 歳】キリシタン故に小笠原玄也とともに処刑される。

処刑の総責任者は長岡監物是季（米田監物是季）【51 歳】一万石の家老が勤めている。

＊　小笠原玄也一家の殉教　『マンショ 4 号』八、玄也一家の殉教　163～171 頁

＊　小笠原玄也 15 通の遺書の現代語訳
『小笠原玄也一家の遺書その現代語訳と解説』髙田重孝訳、監修・児玉雅治
『マンショ第五号』　126～189 頁に掲載　鉱脈社

1641 年（寛永 18）　3 月 17 日
興秋の弟、肥後熊本藩主・細川忠利【55 歳】脳梗塞のため熊本城にて死去。
法名　妙解院台雲宗伍。

春頃
興秋の嫡子・興季【推定 35～31 歳】、江戸より呼ばれ、天草初代代官鈴木重成の命により御領組みの大庄屋を預かる（池田家文書）興秋【56 歳】,息子興季と 27 年ぶりに再会する。

9 月 19 日
鈴木重成が天草代官を命じられる（寛政重修諸家譜）

細川興秋病没する。天草御領芳證禅寺にある細川興秋の墓
1642 年（寛永 19）　6 月 15 日
細川興秋、病没【57 歳】長興寺の前（薬師堂東側）に葬られる。（池田家文書）
墓碑銘　長興前住泰月大和尚禅師　　薬師堂の位牌　長興寺殿慈徳宗専大居士

1645 年（正保 2）　5 月 11 日
細川中務少輔立孝【31 歳】、江戸に於いて死去。
7 月　5 日
細川藩絵図奉行、天草絵図を完成させる。
11 月 15 日
芳證禅寺【曹洞宗】、御領城跡内の陣屋（茶屋）を貰い受けて鈴木重成により建立される。（長興寺薬師堂の西側隣）

芳證禅寺と細川興秋との関連

天草・島原の乱後、代官鈴木重成が仏教再興のため建立。自分の両親の戒名より『月圭山・芳證寺』という山号、寺号を命名した。「島鏡」に『寺屋敷東西弐拾四間、南北三拾壱間、此外薬師堂屋敷東西拾弐間、南北拾間、同所廻り畑弐反六畝支配之事』とある。
興秋の持参した薬師三尊を安置する長興寺薬師堂が芳證禅寺に合併されて創建された。
1648 年（慶安元）寺領 12 石を賜るが『ただし二石は薬師堂分』と但し書きがしてある。
これは鈴木重成が薬師堂の主は細川興秋であることを暗に認めている証拠であり、表向きに両親の菩提寺として芳證禅寺を創ったのは、細川藩の最高機密である興秋隠蔽の事実を匿うためであったと思われる。

1651 年（慶安４）　？月
『*肥後国　江戸江差上候御帳之控え』を幕府に提出。

江戸幕府が各藩に命じた実態調査。郷帳、城絵図、国絵図の作成と提出を命じたもの。
数値を記した城絵図では、現存する（熊本）県内・中世城跡の約一割に当たる 61 城が報告されている。天草は、当時、細川在番時代で 15 城の記載がある。天草・島原の乱後の影響もあり、2 割強の掲載率である。（五和）町内関係では「下内野古城と城木場古城」が記載されている。（五和町史料編その九、御領城跡・鬼池城跡、八頁より）

細川興秋と家伝・天草の池田家文書について

興秋の系譜自体は江戸時代後期、1802 年・享和二年・6 月 15 日に御領組、九代大庄屋長岡五郎左衛門興道（1815 年・文化 12 年・10 月 7 日死去）により書かれたものが池田家に伝えられていた池田家文書である。文書の系譜自体は江戸時代後期の編纂であるが資料的価値が高いと判断されている。なぜならば、慶安四年（1651 年）肥後藩が古城の実態を報告提出した『肥後国　江戸江差上候御帳之控え』には、御領城の記載はない。御領城は、天草・島原の乱後に鈴木重成によって陣屋が置かれた本格的な中世城跡だけに報告書からの欠落は大きな謎であり、細川藩が作為的に御領城を報告書に記載しなかったと考えられる。興秋が隠蔽されていた御領城は興秋の死去 9 年後も細川藩にとっては最高機密の土地であり、絶対に外部に知られてはならない、触れてはならない最高秘密事項だった。御領城は城が破却放置された後、【芳證寺の境内となる以前】切支丹寺が建てられていたので興秋はこの寺に身を潜めたと考えられる。細川家にとつて御領城跡は隠さなければならない土地であり『慶安四年の差出』から御領城が欠落している最大の理由は興秋の隠蔽と深く係わっていると考えられる。

興秋の警護を担当していた長岡監物是季（米田監物是季）と全責任者の国家老長岡佐渡守興長（松井新太郎興長）は慶安 4 年（1651 年）には共に健在で、興秋の死去 9 年後といえども幕府との緊張関係は続いていて、興秋の隠蔽に深く係わっていた 2 人によって『江戸へ差上候御帳之控え』への御領城の不掲載を決定したと推測される。

したがって、慶安四年の差出から 165 年後の編纂といえども御領城に匿われていた興秋の系譜【池田家文書】の信憑性は高いと判断される。

＊『五和町史資料編（その９）御領城跡・鬼池城跡』　五和町教育委員会発行
　御領・鬼池の中世城跡調査にあたって関係史料とその解題　鶴田倉蔵
（行書体　髙田重孝書き込み挿入）

御領芳證寺に伝わる細川興秋の帯刀していたと伝えられている*関の兼元

御領芳證寺に興秋の帯刀していたと伝えられている*関の兼元（俗名関の孫六）の大小一振りの刀が納められている。この刀は興秋が不戦の証として（僧侶には必要のないものとして）、御領の人々をキリシタンと解っていながら暗黙の了承をして処罰の対象から外し、御領の人々を救ってくれた礼として鈴木重成に贈ったと思われる。鈴木重成も贈られた関の兼元をそのまま自分の腰に帯刀したら、名刀故に弁明をしなければならなくなり、しいては

全てが露見してしまう危険を防ぐために、1645 年（正保二）11 月 15 日、両親の菩提寺として建立した芳證寺にそのまま寺の守り刀として預け置いたと推測される。御領城跡地に鈴木重成の建てた陣屋【茶屋】がそのまま再利用されて芳證寺として建立されている。
この興秋の所持していた関の兼元（俗名関の孫六）が小笠原玄也一家の処刑されたときに使われた刀と同じ刀かどうかは不明。
堀内傳右衛門の覚書の内『加賀山隼人は切支丹宗門ニて妻子十二人切腹、田中古又助介錯彌六兼元刀ヒケズ右之刀見申候、今又助所持なりと伝々』
（加賀山隼人は切支丹宗門につき妻子十二人が切腹させられた。田中古又助が介錯した。執行には関の兼元（関の孫六）を使った。この刀は今、庫之助が所有している。）との記述があり、他の史料との違い等、事実関係の考察の余地は多聞にあるように思える。

堀内傳右衛門の覚書の間違いと事実関係

1　加賀山隼人の御誅伐の仕手になったのは、山本三郎右衛門である。
『山本三四郎、後に三郎右衛門（三左衛門とも言）加賀山隼人被誅候時仕手被仰付』
（藩臣閥閲録巻之六仕物の部所載）

2　加賀山隼人の御誅伐のとき、妻、娘二人は処罰されず小倉を追放されてキリシタン庄屋にお預けになっている。
『しかし私（中浦ジュリアン神父）は、二人の乙女の優れた徳と勇気とに心をひかれる。二人は越中殿のために、家も故郷も父親も奪われた人たちである。父は殉教者ディエゴ（加賀山隼人）であった。私は敬意を表わしてその名をふたたびあげておく。追放の原因はキリシタン信仰であった。この父に劣らぬ二人の二女を我らの司祭（中浦ジュリアン神父）は別の町に訪問し感動に心が躍らざるを得なかった。』
＊　16・17 世紀イエズス会日本報告集　第Ⅱ期　第 3 巻　96 頁

3　田中氏は代々又助と称するから、古又助とある。小笠原玄也の御誅伐の仕手である。
（藩臣閥閲録巻之六仕物の部所載）

4　新撰御家譜原本巻五　忠利公の部に
『一、十二月廿三日、小笠原玄也妻子、下々迄惣而十六人於禅定院御誅伐、志賀休也、こさいしょう、貴理師旦に付同日御誅伐被仰付候』とある。

5　類族改所帳（細川家蔵）
『源八、女マリ、女クリ、佐左衛門、三右衛門、四郎、五郎、女土、権之助興父同日誅伐』

6　國家老・長岡監物書状、津川四郎右衛門ニ遣候書状之内（寛永十二年十二月廿四日付）
『小笠原玄也儀、相果可申旨被仰下候二付、昨廿三日於禅定院、玄也夫婦・息達以下十一人、女房達下女四人、合十五人誅伐之事二御座候、其段筆紙二難尽事、』
（小笠原玄也の件、相果てることが命じられたので、昨 23 日禅定院に於いて、玄也夫婦、子供達以下 11 人、女房達下女 4 人、合わせて 15 人が誅伐された。この件は筆紙に尽くし難い事である。）

興秋の愛刀が小笠原玄也の処刑の時、どの様に熊本まで運ばれたかなどの疑問点について
第 1 の見解
推測であるが、天草まで興秋を警護してきた米田監物是季が小笠原玄也一家の処刑の総責任者であるので、興秋が天草御領到着後に自分の愛刀を米田監物是季に託して、小笠原玄也の処刑のときに興秋所有の関の孫六が使用されたと考えるなら、刀の受け渡しと移動も確実性が出てくるので可能性は十分に考えられる。

第 2 の見解
興秋が愛刀を携えて山鹿庄村の泉福寺から天草御領城跡の切支丹寺への逃避行の時期（10 月末）とその後の御領での隠棲、熊本に於いての玄也処刑までの 50 日間（11 月 4 日～12 月 23 日）。天草御領と熊本の距離的なことなどを考慮した場合、玄也一家の処刑のときに使用された関の兼元は興秋が所持していた刀とは別の刀と考える。細川家には他に数振りの関の兼元の存在が確認されているので、小笠原玄也と同じ時に処刑された『細川忠興の愛妾・小さい将』のために、夫である細川忠興が使わした別の刀と考えることもできる。
＊　御領芳證寺所有の関の兼元は、現在熊本のある銀行に寄託、管理保管されている。
＊『兼元』美濃の国の刀鍛冶の流派。　関の孫六初代。　細川幽斎・忠興の愛刀。
兼元（かねもと）享禄（きょうろく）1523~31 年。　末古刀最上作『兼元』『兼元作』『濃州赤坂住兼元作』などと切る。初代兼元の子。俗名を『孫六』と呼ばれる。和泉守兼定と兄弟の契りを結んだ名工。刃文は尖り互の目で、『関の孫六三本杉』として有名。
刀、無反り、先反り短刀が多い。地鉄小杢目。最上大業物（現在価格・約 1500~2000 万）

細川興秋の隠棲した三つの地区の共通した類似点

1　隠れキリシタンの数が多く、信徒組織が確立されている地区。
2　キリシタンの多い地区に表向き仏教の寺を作り、キリシタン寺として機能させる。
3　細川藩は徳川幕府の手前、表面的にはキリシタン排斥をしながら、裏ではキリシタン信徒組織と常に密接な連絡を取り合って、細川興秋の安全の確保をしている。

豊前国田川郡香春町採銅所

1613 年（慶長十八）6 月 4 日、キリシタン禁令が発布され、全国でキリシタン狩りが始まった。迫害を逃れ、追放された貧しいキリシタン達は山の奥深くに逃げ込んだ。徳川家康が全国の金銀山保護のために定めた法律、『御山例五十三条之事』があり、そこには一種の治外法権が認められていたため、貧しいキリシタン達にとっては、山深き地は信仰を守りながら貧しくても生活できる安住の場所であった。昔【奈良時代】から銅や金が採掘できた田川郡香春町採銅所付近も、豊前、豊後、筑前、筑後のキリシタン達の格好の隠れ家だった。採

銅所は呼野・企救郡（きくのこうり）に接していて、このあたりから田川周辺にかけて当時キリシタンが約 3000 人いたと記録に残されている。細川忠興もこの地方に 3000 人からのキリシタンが住んでいる事実を把握していて、次男興秋を隠すために香春町採銅所に 1610 年 5 月に不可思議寺を作っている。このことからも、細川忠興が意識的に息子興秋と小笠原玄也一家を、隠れキリシタンの多いこの地域を選んで隠していたことが理解できる。
約 200 年後の、*1829 年（文政十二）田川郡の香春町採銅所の光願寺で行われていた宗門改めの記録には、男女合わせて 2871 人（男 1488 人、女 1383 人）、像踏み申す分 793 人、像踏み申さず分 2078 人とあり（*金田手永大庄屋六角文書 78～79 頁『年々記録』）、絵踏みをしなかった者（隠れキリシタン）の数が圧倒的に多い。いかにこの地方に隠れキリシタンが多かったかがこの記録からも分かる。
＊　香春町町史　田川郡の宗門改め 527～529 頁、
＊　香春町町史　金田手永大庄屋六角文書 78～79 頁『年々記録』

細川興秋を匿うために作られた不可思議寺

豊前国田川郡香春町採銅所・**不可思議寺（真宗大谷派）**
1605 年 1 月 12 日、出家出奔した興秋を京都から移し、興秋を匿うための寺を忠興の領地豊前に作るこの相談は細川幽斎と忠興の間で1608年末から1609年には出来上がっていて、秘密裏に場所の選定が成され、忠興の末弟・細川中務少輔孝之【香春岳城主・2 万 5000 石】に命じて、田川郡香春町採銅所に於いて寺の建設が実行に移された。香春岳城主高橋九郎元種の家老・行木（雪木）善兵衛を、本願寺第十二世教如法主に帰依させ、剃髪して法名を『宗慶』と号させ住職にさせた。完成は 1610 年（慶長十五年）5 月 10 日開創、法主より阿弥陀如来仏立像本尊を受け、開基創建している。寺の山号を『不可思議山』と言い、寺号を『不可思議寺』と言う。これにより豊前において興秋を匿う場所の準備は全て整っていた。
初代住職『宗慶』は 1614 年（慶長十九）12 月より病気になり 1615 年（元和元）4 月 4 日死去。
細川興秋 1615 年 6 月 6 日京都に於いて切腹。後、不可思議寺第 2 世住職として納まる。
つまり、第 2 世住職『宗順』・興秋は 1615 年 7 月頃より細川藩が肥後に移る 1632 年 12 までの 18 年間、不可思議寺の住職として務める。不可思議寺古文書を調査したが『宗順』が住職を務めていた 18 年間の寺の記録は残されてなく見当たらなかった。不可思議寺は細川藩が 1632 年（寛永九）12 月に肥後に移った 2 年後、1634 年（寛永十一）8 月 7 日、第 3 世『慶順』の世代に至って寺号免許を新たに取り、明善寺と号した。
＊　香春町町史　第一章　神社・寺院　723～724 頁　明善寺
＊　明善寺蔵の古文書『永代志』から調査した記録による。調査責任者・髙田重孝

肥後国山鹿郡鹿本町庄地区、中富地区

1600 年（慶長 5）9 月、関が原の戦いで敗れた小西行長の一族と家臣達が、宇土城下付近か

ら、菊池氏との関係が特に深く中富村を知行していた国衆加悦氏との関係を頼り多く移り住んだ場所。小西一族は加藤氏との軋轢や宗教的弾圧を避けるために農民となり、キリシタン信仰を維持するため隠れキリシタンとなってこの中冨地区やこの付近に定住した。現在も中富地区にはキリシタン史蹟として、*小西行長供養塔、マリア観音像、マリア像踏絵が残っている。*小西行長供養塔のある中富地区と興秋の隠棲していた庄村泉福寺とは約 5 ㌔の距離。*小西行長供養塔は、1600 年 9 月 15 日に石田三成の西軍に組みして関ヶ原の戦いで敗北し、同年 10 月 1 日京都六条川原で斬首処刑された小西行長を悼んで、キリシタンであった元家臣達及び在郷の信者達が、当時旭光山長福寺と称されていた観音堂の裏に、10 月 6 日に建立した供養塔であろうと考えられている。高さ 1.25m,最大幅 56ｃｍの疑灰岩で逆三角形の板碑状石碑。『慶長五年　西岳院殿行長即得大居士　十月六日』と彫られている。さらに中富地区の下分田の墓地と小柳墓地には明らかに「隠れキリシタン」であることを示す墓石が多数残されていたが、近年整理破棄され僅かに数基ずつ残されていた墓石を鹿本町が保存、現在は山鹿市鹿本支所隣の鹿本交番裏に移設保存している。また周囲地方には*上木庭（菊池市木庭　上木庭）のキリシタン墓地、*津留（旭志町小原津留）のキリシタン墓地、*亀尾（菊池市七城町亀尾字北杉田）のキリシタン灯籠、*福本（泗水町福本　泗水町総合支所横）のカマボコ型キリシタン墓碑、*伊倉北方（玉名市伊倉北方）のカマボコ型キリシタン墓碑、等、天草に次いで多くのキリシタン遺物を見ることが出来る。

＊　鹿本町町史　第Ｉ　加藤・小西時代　156～158 頁

＊　小西行長供養塔　鹿本町大字中川字永冨 1998 番地　長福寺跡（小材繁雄氏宅地）
　　鹿本町町史　421 頁【写真掲載参照】　庄村からは約 5 ㌔の距離

＊　下分田、小柳の切支丹墓碑　山鹿市鹿本支所隣接の鹿本交番裏に移設保存されている。

＊　上木庭のキリシタン墓地　　菊池市木庭　上木庭　菊池市の文化財　83 頁

＊　津留のキリシタン墓地　　旭志町小原津留　旭志の文化財

＊　亀尾のキリシタン灯籠　　菊池市七城町大字亀尾字北杉田

＊　福本のキリシタン墓碑　　泗水町福本　泗水町総合支所横

＊　伊倉北方のキリシタン墓碑　玉名市伊倉北方　玉名市の文化財

（口伝ではイルマン・ドワルテ・ダ・シルバの墓と伝えられ、近くの中山家にはシルバの髪の毛が保管されている。東野利夫氏が借り受けて九州大学法医学部・永田教授に依頼した鑑定の結果では約 400～500 年前の西欧人・白人の頭髪で色は黒髪、血液型 B 型との鑑定結果が報告されている。中山家に伝わる「山姥の髪」別名「バテレンの頭髪」は、現在玉名市立歴史博物館こころピアに寄託されている。）

＊　『南蛮医アルメイダ』　東野利夫著　柏書房

＊　シルバの死去　1564 年 10 月 14 日付　アイレス・サンシェス書簡志岐発
　　『16・17 世紀イエズス会日本報告集』第 3 期　第 3 巻　241～244 頁
　　『日本史　西九州編』フロイス著　Ｉ、7 章 123～128 頁

山鹿地方の切支丹の実在を裏付ける史料として『古・転切支丹二期御断帳』が現存している。
史料は『肥後切支丹史・肥後藩切支丹系統』下巻　上妻博之著　エルピスに収録。
この地方の切支丹類族のうち最後まで生存したのは「山鹿郡新町売人転切支丹左太郎系」の、御宇田村百姓市平で、天保 3 年（1832）正月 17 日、71 歳で死去している。なお同系統の庄三郎は新町売人（商人）で、文化 14 年（1817）5 月 5 日、72 歳で死去している。
（肥後切支丹史　下巻　20 之帳　612 頁）
＊　肥後国玉名郡の切支丹について
　『肥後藩切支丹之系統細目』　19 之帳 588～602 頁、20 之帳 603～619 頁
　『肥後切支丹史』　下巻　上妻博之著　エルピス社

1632 年（寛永 9）12 月、細川忠利が肥後に移封されてきた。移封前の調査で細川忠利はキリシタンが領地山鹿の鹿本地区と、寺沢藩の天草に多く居住していることを把握していて、特に鹿本地区の小西一族に対して寛大な処遇をしている。この時代背景があったからこそ、実兄興秋と小笠原玄也一家をキリシタンの多い鹿本地方の中富地区、庄地区付近に隠したと推測される。また米田監物是季【50 歳】が 1 万石を賜った背景に、興秋隠蔽先として山鹿郡鹿本町庄村に泉福寺を確保した褒美としての加増と考えられる。協力した金剛乗寺は 1633 年（寛永 10）1 月 7 日、細川家より寺内 6 反 18 歩の寄進を受けている。これは細川興秋の隠蔽に末寺泉福寺を差し出した見返りと推測される。

山鹿町金剛乗寺の末寺・泉福寺跡（竜徳山、密巌院）
鹿本町大字庄　字小路
真言宗紀州高野山東南院末寺。平安時代平重盛建立。同永暦元年（1160）開基。鎌倉～室町中期頃までは寺領すこぶる繁栄、本堂、御位牌所、客殿、鎮間堂、庫裏に本尊毘沙門天ほか木像五像及び観世音、聖天、庚申堂、六字塔、などを備え、隈部氏、相良氏（高橋氏）の庇護を受け盛大であったが、室町末期に至って戦禍のため衰微したが、永禄年中（1558～1570）に再興。江戸時代元禄 5 年（1692）山鹿金剛乗寺入真住寺、江戸時代初期まで再び衰微荒廃した寺字を継承して復興以来江戸初期まで寺子屋を開設して住職がいたとある。
宝暦 6 年（1774）、寛政 2 年（1790）、寺社間数の御改めあり（森文書）。
寛永年間？妙解院細川忠利御鷹野の節に止宿あり。正保 2 年（1645）4 月、真源院細川光尚同じく御鷹野の節に休息あり。住僧快存。寺跡 290 平方㍍には、鎌倉時代より江戸時代にわたる 500 余年の古碑古塔郡をなし、まさにその展示場的観がある貴重な遺跡である。
＊　鹿本町町史　文化財　22　泉福寺跡　465～466 頁　第四節　15　泉福寺跡　529 頁

泉福寺跡　（現　鹿本町庄）
庄の集落中央あり、肥後国誌によれば竜徳山密巌院と号し、真言宗、高野山金剛峰寺の末、開基・建立年代不明、元禄 5 年（1692）金剛乗寺（現山鹿市）から堂守として入った入真

が復興したという。また寛政 2 年（1790）の寺社間数就御改御達申上候覚帳（森文書）には永暦元年（1160）平重盛が建立。その後寺領も召放され無縁地となり、永禄年中（1558～1570）の再興を伝える。同帳によると境内一反一畝余、本堂には毘沙門天や吉祥天女・弘法大師など六木像、御位牌所に観世音、鎮守堂に聖天像があり、ほかに庚申堂・客殿・庫裏・石地蔵一体があるが、寺領・山藪・寄付米銀・祈祷料はまったくない。明治の「郡村誌」には寺名はみえない。寺跡には本尊と伝える高さ 120 ㌢の毘沙門天像や聖天像、五輪塔 10 基分とその残欠、宝珠印塔の残欠や板碑 9 基がある。板碑は天文 5 年（1536）銘・文禄 3 年（1594）銘が各一、慶長期（1596～1615）のものが四、最新は承応元年（1652）銘。　＊
『熊本県の地名』　174 頁　日本歴史地名体系 44　平凡社

現在は僅かに毘沙門堂、聖天堂を残しているが、共に戦後縮小移転新築したもので新しい。
山鹿市教育委員会の解説によると『真言宗の古刹泉福寺跡には種子アを刻む巨大板碑の勢順大徳碑（1610 年）、種子ウーンを刻む庚申塔（1702 年）があり、墓地北側には五輪塔 10 基分とその残欠、宝珠印塔の残欠と板碑数基（中世～近世）がある。』（昭和 57 年 5 月 1 日一括町指定）
別途、寛政 2 年（1790）の寺社間数御改御達覚帳に依る、昭和 52 年 10 月 1 日平川厚氏作成の泉福寺復元図を掲載する。【泉福寺復原図参照】

寺社間数御改御達覚帳や泉福寺に関する原本文書は，鹿本町の森家が所蔵保管していたが、火災により焼失したとの報告があったので、これ以上の追跡調査が出来ず明細は不明のままである。

天草御領・御領城跡、

コーロス徴収文書とは 1617 年（元和三）8 月 29 日、内野村 3 名、二江村 3 名のキリシタンの代表者達がイエズス会日本菅区長マテウス・デ・コーロスの求めに応じて信仰を告白して自筆署名した文書であり、天草下島では 13 地区、計 34 名のキリシタン指導者が代表者としてコーロス徴収文書に署名をしている。大矢野島 7 名、天草上島 18 名。
いかに天草全域でキリシタン組織が確固として存在していたかがこの数字から推測できる。
内野村は、現・天草市五和町城河原及午野、二江村は五和町二江。

天草御領・御領城跡、元はキリシタン寺、後に細川興秋自身、長興寺を起こす

長興寺の号は、長岡の長、興秋の興、を取って長興寺と名付けた。元々は切支丹寺。
長興寺の建てられていた場所は、興秋の七代目の子孫、長岡五郎左衛門源興道が 1802 年【享和二】壬戌 6 月 15 日建之した墓のある現在地周辺付近に建てられていたと推測される。つまり長興寺が朽ちて後、その同じ場所に興秋の死後 160 年にして現在の興秋の墓を、興秋の七代目の子孫、長岡五郎左衛門源興道が建てたと考えられる。

1648 年以降、長興寺薬師堂の御領城内の建てられていた場所については、江戸時代の御領城跡芳證寺所有の二枚の絵図（見取り図）に克明な記録が残されている。御領城地は廃城後、切支丹寺が建立され、鈴木重成時代の茶屋（陣所）を経て、1648 年から芳證寺の境内と墓地になった。（芳證寺文書による）

肥後国　江戸江差上候御帳之控え

1651 年（慶安四）　？月『*肥後国　江戸江差上候御帳之控え』を幕府に提出。
江戸幕府が各藩に命じた実態調査。郷帳、城絵図、国絵図の作成と提出を命じたもの。
数値を記した城絵図では、現存する（熊本）県内・中世城跡の約一割に当たる 61 城が報告されている。天草は、当時、細川在番時代で 15 城の記載がある。天草・島原の乱後の影響もあり、2 割強の掲載率である。（五和）町内関係では「下内野古城と城木場古城」が記載されている。（五和町史料編その九、御領城跡・鬼池城跡、八頁より）
御領城跡は南北250m,東西85～130mの広さを持ち、標高は北端で16.63m、南端で10.593m。高低差の少ない平たい城跡で、長円形の完全な独立区画で、中世城跡そのものの地形を有している。城跡に関連する「馬場」「堀」の字名と「城内」の小名も残されていて、本格的な麓集落（中世の城下町）が成立していたことを伺わせる。

慶安四年（1651 年）肥後藩が古城の実態を報告提出した『肥後国　江戸江差上候御帳之控え』には、御領城の記載はない。御領城は、天草・島原の乱後に鈴木重成によって陣屋が置かれた本格的な中世城跡だけに報告書からの欠落は大きな謎であり、細川藩が作為的に御領城を報告書に記載しなかったと考えられる。興秋が隠蔽されていた御領城は興秋の死去 9 年後も細川藩にとっては最高機密の土地であり、絶対に外部に知られてはならない、触れてはならない最高秘密事項だった。御領城は城が破却放置された後、【芳證寺の境内となる以前】切支丹寺が建てられていたので興秋はこの寺に身を潜めたと考えられる。細川家にとつて御領城跡は隠さなければならない土地であり『慶安四年の差出』から御領城が欠落している最大の理由は興秋の隠蔽と深く係わっていると考えられる。
興秋の警護を担当していた長岡監物是季（米田監物是季）と全責任者の国家老長岡佐渡守興長（松井新太郎興長）は慶安 4 年（1651 年）には共に健在で、興秋の死去 9 年後といえども幕府との緊張関係は続いていて、興秋の隠蔽に深く係わっていた 2 人によって『江戸へ差上候御帳之控え』への御領城の不掲載は決定されたと推測される。
興秋の系譜自体は江戸時代後期、1802 年・享和二年・6 月 15 日に御領組、九代大庄屋長岡五郎左衛門興道（1815 年・文化十二年・10 月 7 日死去）により書かれたものが池田家に伝えられていた池田家文書である。文書の系譜自体は江戸時代後期の編纂であるが資料的価値が高いと判断されている。
＊『五和町史資料編（その９）御領城跡・鬼池城跡』　五和町教育委員会発行
　御領・鬼池の中世城跡調査にあたって関係史料とその解題　鶴田倉蔵

（行書体　髙田重孝書き込み挿入）